愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 203 集

伝法寺野田遺跡 II

２０１６

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 203 集

伝法寺野田遺跡 II

２０１６

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

一宮市は、古くから木曽川などの河川の恩恵を受けて文化が形成されてきた地域であります。現在でも市民に身近に親しまれている真清田神社は、平安時代の歌人にも詠われ、水と関わる歴史遺産でもあります。そしてこの度報告します伝法寺野田遺跡は、一宮市の南東部に位置する遺跡であり、周辺においても縄文集落として著名な馬見塚遺跡や伝法寺廃寺跡、三ツ井遺跡、猫島遺跡、町屋遺跡などにおいて発掘調査が行われ、この地域の古い時代の様子が少しずつ明らかにされてきました。

さて、伝法寺野田遺跡では、これまでの発掘調査により弥生時代から古墳時代にかけての水田跡と中世の区画溝などが見つかり、弥生時代から古墳時代の水田跡からは無茎銅鏃が出土しています。今回の調査成果では、さらに愛知県において最も古い弥生時代の水田跡と古代から中世にかけての条里型の水田跡が見つかり、当地域の水田開発の歴史をひもとく資料の一つとなるものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成２８年３月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　伊　藤　克　博

例　言

１．本書は、一宮市丹陽町伝法寺に所在する伝法寺野田遺跡 (県遺跡番号 020103) の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、平成 18 年度が愛知県建設部下水道課による五条川右岸流域下水道事業、平成 22 年度が愛知県建設部下水道課による五条川右岸流域下水道事業焼却施設建設に伴い、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

３．発掘調査期間は平成 18 年度が平成 18 年 11 月から平成 19 年 3 月、平成 22 年度が平成 22 年 10 月から同年 12 月である。調査面積は平成 18 年度が 2,600㎡、平成 22 年度が 1,200㎡である。

４．調査担当者は、平成 18 年度が石黒立人 (主査、現副センター長) ・蔭山誠一 (調査研究員、現調査研究専門員)、平成 22 年度が樋上　昇 (調査研究専門員) ・奥野絵美 (調査研究主事、現特定非営利活動法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク) である。

５．整理および報告書作成作業は、平成 26 年 4 月から平成 26 年 9 月までで、蔭山が担当した。

６．平成 18 年度の発掘調査に関しては安西工業株式会社から、平成 22 年度の発掘調査に関しては大成エンジニアリング株式会社からの支援を受けた。

７．遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。

伊藤ますみ・山田有美子・小島裕子・瀧 智美・木下由貴子・時田典子・山本孝枝・阿部裕恵・堀田裕美・前田弘子・鈴木好美 (整理補助員)

遺構図の合成・調整については国際文化財株式会社に、遺物実測・デジタルトレースについては、株式会社シン技術コンサルに委託し、蔭山が校正した。

８．出土遺物の写真撮影については金子知久氏 (有限会社写真工房・遊) の手を煩わせた。

９．発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

愛知県建設部・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・一宮市教育委員会 (五十音順、敬称略)

10．発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。

浅田博造・伊奈和彦・久保禎子・土本典生・永草康次・橋本昇・久田正弘・村松一秀・若杉尚代 (敬称略)

一宮市博物館・春日井市教育委員会

11. 本書の執筆は、主に蔭山誠一が担当し、第５章は鬼頭 剛 (愛知県埋蔵文化財センター調査研究専門員) が分担した。また第 4 章では永草康次氏 (株式会社神塾) から玉稿を頂いた。

12．本書の編集は蔭山誠一が行った。

13．調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。

14．調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24　　TEL：0567-67-4163

15．出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24　　TEL：0567-67-4164

目　次

第１章　前　言
第１節　調査の経緯と方法…… 1
第２節　地理的環境…… 1
第３節　周辺の遺跡と歴史的環境…… 2
第２章　遺　構
第１節　基本層序…… 6
第２節　弥生時代前期から弥生時代中期にかけての遺構…… 6
第３節　弥生時代中期後半から古墳時代にかけての遺構…… 16
第４節　奈良時代から中世にかけての遺構…… 18
第５節　中世から近代にかけての遺構…… 20

第３章　出 土 遺 物
第１節　遺物の出土状況…… 23
第２節　06 区の出土土器・陶磁器 …… 23
第３節　10 区の出土土器・陶磁器 …… 26
第４節　金属製品…… 30
第５節　木製品…… 30
第６節　石製品…… 30
第４章　愛知県一宮市伝法寺野田遺跡出土土器（主に浮線紋鉢）の胎土に関する報告
第１節　はじめに…… 32
第２節　分析の方法…… 32
第３節　分析結果…… 32
第４節　考察…… 35
第５節　まとめ…… 37
第５章　伝法寺野田遺跡における地下層序と古環境
第１節　はじめに…… 39
第２節　試料および分析方法…… 39
第３節　分析結果…… 40
第４節　考察…… 43
第６章　総　括
第１節　伝法寺野田遺跡の遺構変遷…… 47
第２節　古代の条里型水田遺構と地割り …… 48
第３節　水田遺構と植物珪酸体分析の結果…… 49

遺構図版 1 ～遺構図版 24 …… 51

写真図版
遺　　構：写真図版 1 ～写真図版 10
出土遺物：写真図版 11 ～写真図版 14

抄　録

挿図・挿表目次

図 1　伝法寺野田遺跡位置図 …… 1
図 2　伝法寺野田遺跡調査区位置図 …… 2
図 3　伝法寺野田遺跡の立地 (1:200,000)…… 3
図 4　伝法寺野田遺跡周辺の遺跡 (1:25,000) … 4
図 5　10 区西壁・南壁 1(1:100) …… 7
図 6　10 区西壁・南壁 2 …… 8
図 7　06 区 10 トレンチ西壁 (1:100)…… 9
図 8　06 区 1 トレンチ西壁 1(1:100)…… 10
図 9　06 区 1 トレンチ西壁 2 …… 11
図 10　06 区 2 トレンチ北壁 1(1:100)…… 12
図 11　06 区 2 トレンチ北壁 2…… 13
図 12　06 区 3 面・10 区 2 面遺構図 (1:800) … 14
図 13　98A 区・98B 区・99 区・02 区・
06 区 2 面・10 区 2 面遺構図 (1:800) … 17
図 14　98A 区・98B 区・99 区・02 区・
06 区 1 面・10 区 1 面遺構図 (1:800) … 19
図 15　06 区出土土器・陶磁器 1(1:4)…… 24
図 16　06 区出土土器・陶磁器 2(1:4)…… 25
図 17　06 区出土土器・陶磁器 3(1:4)…… 27
図 18　10 区出土土器・陶磁器 1(1:4)…… 27
図 19　10 区出土土器・陶磁器 2(1:4)…… 29
図 20　金属製品 (1:4)…… 29
図 21　木製品 (1:4)…… 31
図 22　石製品 (1:4)…… 31
図 23　主要鉱物三角ダイヤグラム …… 33
図 24　粒径三角ダイヤグラム …… 33
図 25　胎土分析試料実測図 (1:8)…… 37
図 26　伝法寺野田遺跡 10 区におけるボーリング掘削
地点 …… 39
図 27　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 1 にお
ける地質柱状図 …… 40
図 28　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 2 にお
ける地質柱状図 …… 40
図 29　五条川流域における等高線図 …… 44
図 30　伝法寺野田遺跡の調査区と周辺等高線拡大図
…… 45
図 31　伝法寺野田遺跡 06 区 C サンプル地点と
D サンプル地点における地質柱状図 …… 46
図 32　弥生時代中期～古墳時代の遺構 (1:1,500) 47
図 33　古代～中世前半の遺構 (1:1,500)…… 47
図 34　江戸時代後期の遺構 (1:1,500)…… 48
図 35　江戸時代末～近代以降の遺構 (1:1,500)… 48
図 36　古代の伝法寺野田遺跡と周辺の地籍図
(1:5,000)…… 50

表 1　伝法寺野田遺跡周辺の遺跡一覧…… 5
表 2　胎土分析一覧…… 32
表 3　実体顕微鏡観察結果 1 …… 34
表 4　実体顕微鏡観察結果 2 …… 35
表 5　偏光顕微鏡観察結果…… 36
表 6　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 1 の火
山灰分析結果…… 41
表 7　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 1 の放
射性炭素年代測定分析結果…… 42
表 8　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 2 の放
射性炭素年代測定分析結果…… 42

第1章　前　言

第1節　調査の経緯と方法

伝法寺野田遺跡は愛知県一宮市丹陽町伝法寺に所在する遺跡で（図1）、JR東海道本線稲沢駅より北東約3.0kmの地点に位置する。本遺跡は一宮市埋蔵文化財包蔵地一覧に伝法寺野田遺跡（遺跡番号020103、北緯35度15分46秒、東経136度50分39秒）として周知の遺跡として知られていた。愛知県教育委員会文化財保護室では、平成18年度の発掘調査を愛知県建設部下水道課による五条川右岸上流流域下水道事業に伴う事前調査として、また平成22年度の発掘調査を愛知県建設部下水道課による五条川右岸流域下水道事業焼却施設建設に伴う事前調査として計画された。これらの発掘調査について、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが（平成18年度は財団法人）、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて、平成18年度の発掘調査を平成18年11月から平成19年3月にかけて、平成22年度の発掘調査を平成22年10月から平成22年12月にかけての期間で実施した。

調査面積は平成18年度が2,600㎡、平成22年度が1,200㎡である。平成18年度の調査区は、98B区の東と99区・02区の南に隣接し、06区とした。平成22年度の調査区は、02年度の東と06年度の北に隣接し、10区とした（図2）。

発掘調査終了後の平成26年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる最近の盛り土と近世以後の旧水田耕作土と思われる地層を除去した後、発掘調査作業（人力による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察など）を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

第2節　地理的環境

伝法寺野田遺跡の所在する愛知県一宮市は、濃尾平野を流れる木曽川の左岸にある（図3）。この木曽川左岸にある尾張地域では、扇状地帯が上流の犬山市から続き、本遺跡のある一宮市南東部では扇状地帯から氾濫原地帯に移る。尾張地域では、かつての木曽川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は本遺跡の北西を青木川が、南東を五条川が東から西へ蛇行しながら流れている。本遺跡はこの両河川に挟まれた後背湿地に立地しており、標高は7m前後である。

またこれまで、伝法寺野田遺跡のある一宮市南東部は、歴史地理学の分野で取り上げられてきた「島畑」がある地域として著名で、現在でも水田の中に畑が点在する景観が少し残る。この島畑の景観は、先に述べた扇状地帯末端から氾濫原地帯に移る地域で特徴的にみられる土地利用と考えられる。

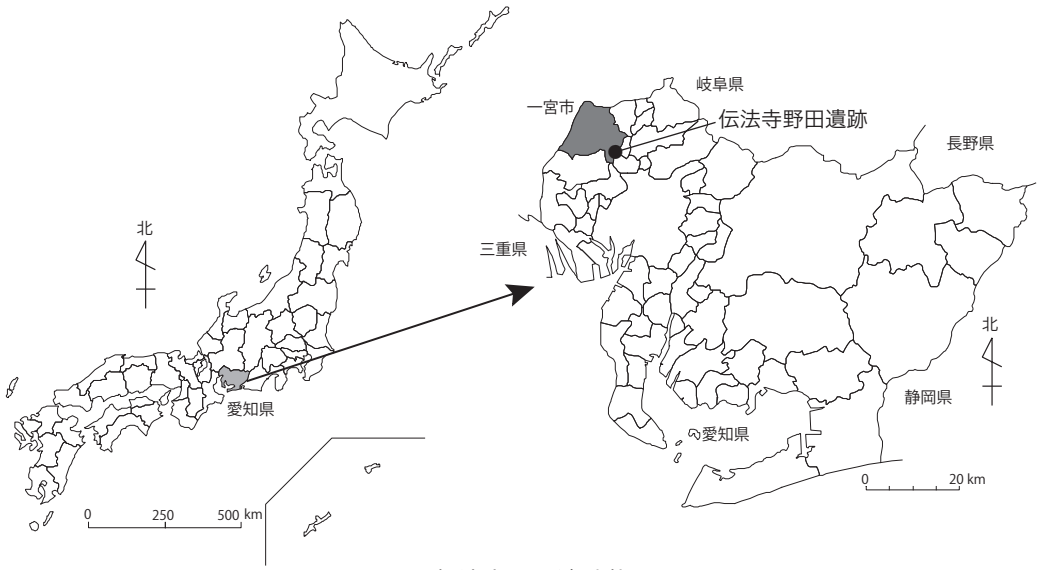


図1　伝法寺野田遺跡位置図

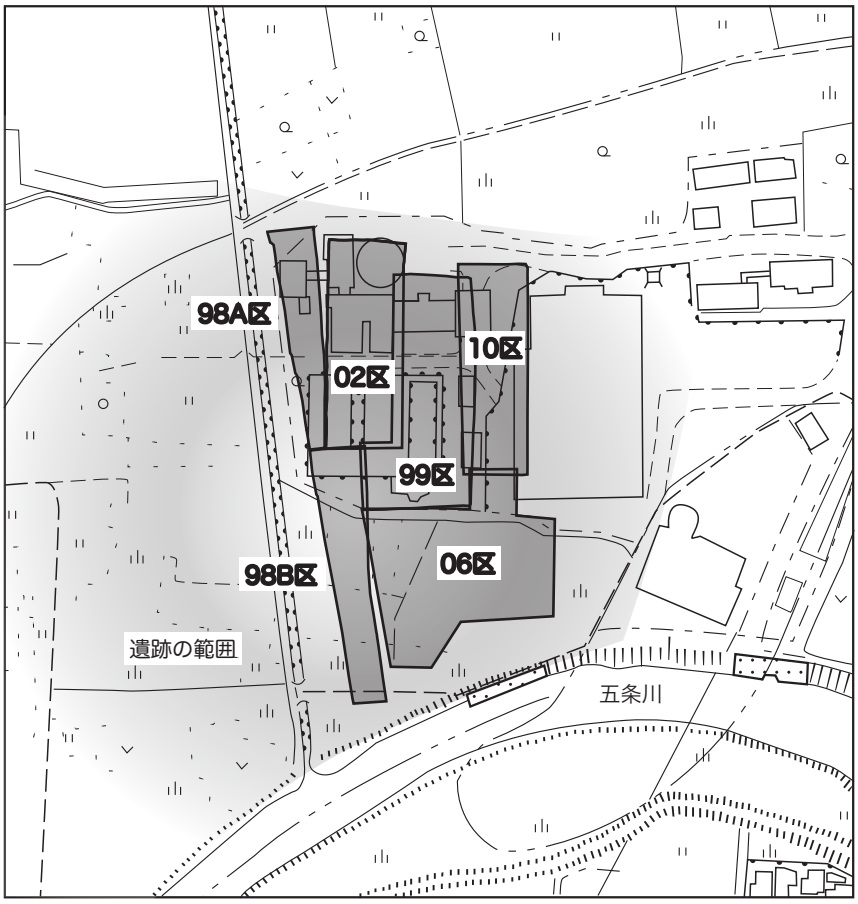


図２　伝法寺野田遺跡調査区位置図

第３節　周辺の遺跡と歴史的環境(図４･表１)

縄文時代の遺跡は、一宮市丹陽町伝法寺から同丹陽町三ツ井の付近に三ツ井遺跡（6）・池之上遺跡（10）・権現山遺跡（18）が、一宮市丹陽町塩尻から岩倉市大地町にかけて猫島遺跡（7）・穴田遺跡（34）・西町畑遺跡（35）・判定遺跡（41）・西北出Ａ遺跡（42）・野辺遺跡（39）・ノンベ遺跡（40）が、岩倉市中野町から鈴井町にかけて御山寺遺跡（28）が分布している。この中で、西北出Ａ遺跡（42）では、堅果類の貯蔵穴が調査されており、権現山遺跡（18）では縄文時代中期末葉～後期の竪穴建物 12 棟をはじめ、土坑、自然流路などが確認された。特に縄文時代後期前半の土器がまとまって出土しており、この地域における土器の形態変遷が明らかにされている。猫島遺跡（7）では、縄文時代後期前葉から晩期末葉の土器や石鏃、磨製石斧が少量出土しており、遺跡の東側にみつかっている自然河道に伴う微高地上に集落が存在した可能性が高い。また御山寺遺跡（28）では、遺跡の西側地点において、縄文時代晩期前半を中心とする土坑などが確認されている。

弥生時代の遺跡は 28 遺跡あり、その中で一宮市元屋敷遺跡（13）は、弥生時代前期の集落遺跡として著名で、東西約 120m、南北 100m の環濠が確認されている。岩倉市野辺遺跡（39）では前期の遠賀川式土器片が出土し、遺物包含層が確認されている。近接するノンベ遺跡（40）からも遠賀川式土器や中期朝日式土器片が出土している。続く弥生時代中期においても、猫島遺跡（7）では弥生時代中期前半の環濠集落がみつかっており、岩倉市大地町にある大地遺跡（37）は沈線文系土器として知られる「大地式土器」が出土した遺跡である。一宮市丹陽町伝法寺にある飯守神遺跡(16)では、中期中葉の土器・石器等が出土しており、土坑・溝を主体とする遺構群も検出されている。弥生時代後期では、一宮市丹陽町塩尻にある蕪池遺跡（8）があり、弥生時代後期の大型器台、底部に先行した大型長頸壺など完形土器多数が出土し、後期の墓域が展開したと推定されている。

古墳時代の遺跡では、一宮市丹陽町三ツ井にある稲



図３　伝法寺野田遺跡の立地（1：200,000）

荷山古墳（11）、北名古屋市鍛冶ヶ一色にある高塚古墳（26）、岩倉市本町にある新溝古墳（31）、岩倉市大山寺町にある神宮寺古墳（45）、西出古墳（46）などの古墳が知られている。古墳以外の集落遺跡は 27 遺跡があり、その中で三ツ井遺跡（6）では古墳時代前期の井戸や土坑、猫島遺跡（7）では古墳時代前期の溝や井戸が確認されている。権現山遺跡（18）では、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物 4 棟、方墳 5 基、古墳時代後期の円墳 4 基が確認されており、古墳時代後期の 1 号墳には横穴式石室が確認された。御山寺遺跡（28）では、西側地点では古墳時代前期の竪穴建物や溝などの遺構群、東側地点では弥生時代後期末の方形周溝墓 1 基、古墳時代前半の竪穴建物 25 棟が確認された。地図の範囲からは外れるが、北名古屋市宇福寺遺跡（25）の南に隣接する中之郷北遺跡では、古墳時代前期後半～古墳時代後期の竪穴建物や土坑が確認されており、宇福寺遺跡においても同様な時期の遺構・遺物が展開する可能性がある。古墳として知られている遺跡は少ないが、発掘調査による成果では、古墳と考えられる遺構が多数確認されており、今後この地域の歴史を考える上で貴重な成果と思われる。

古代の遺跡は 21 遺跡あるが、この地域は古代の寺院跡が多くある地域として知られている。以下に挙げると、本遺跡から東 1.0km にある岩倉市薬師堂廃寺跡（21）、本遺跡から北西 0.8km にある一宮市伝法寺廃寺跡（19）、本遺跡から南西 1.9km にある北名古屋市弥勒寺廃寺跡（59）があり、地図から外れるが、本遺跡から北東 3.8km にある一宮市長福寺廃寺跡と本遺跡か

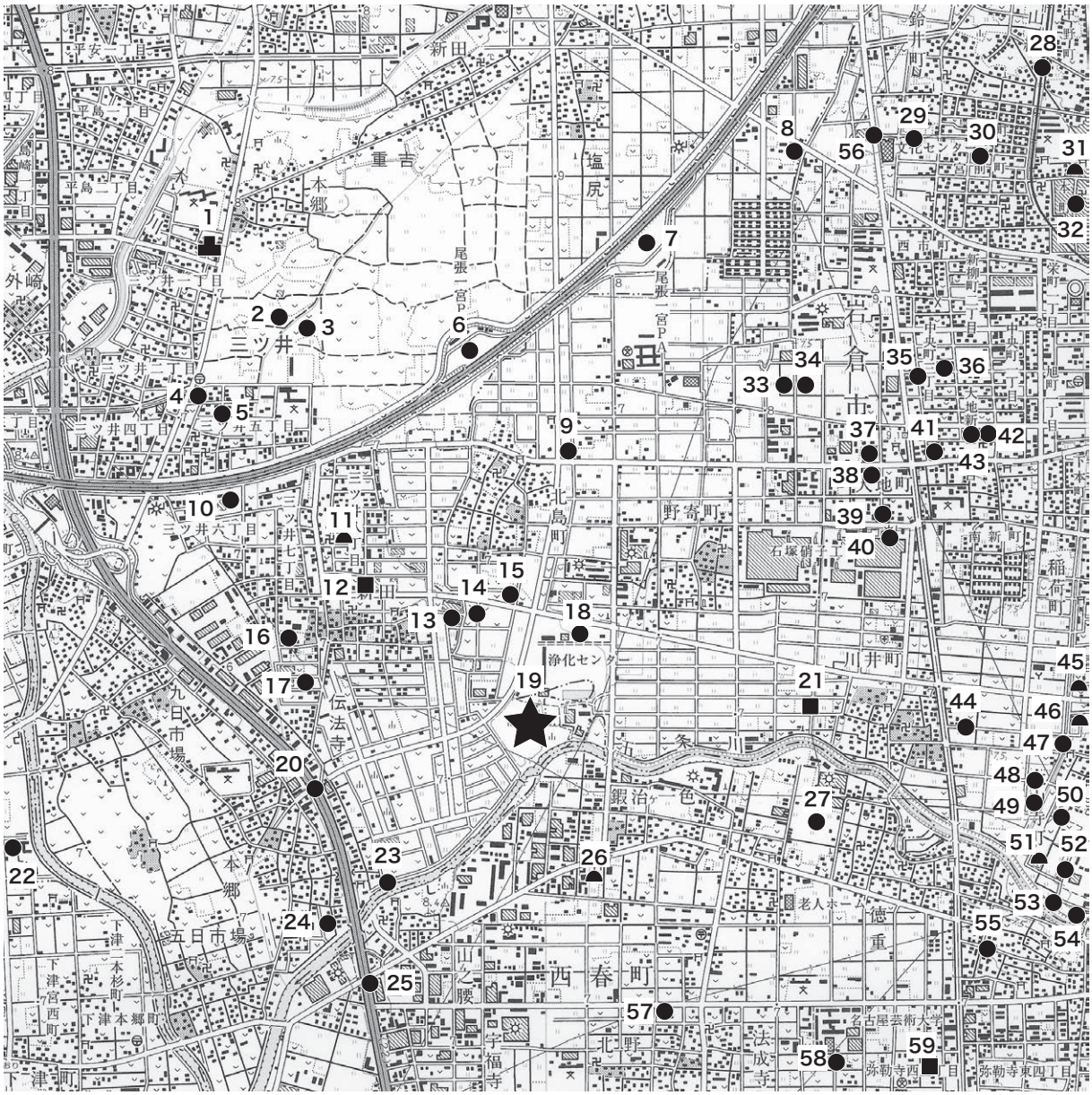


図 4　伝法寺野田遺跡周辺の遺跡（1：25,000）

表1　伝法寺野田遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
1	重吉城跡	一宮市			●	●	●	
2	東高龍遺跡	一宮市				●		
3	飛所遺跡	一宮市				●		
4	茂八杁遺跡	一宮市		●		●		
5	六所遺跡	一宮市		●	●	●		
6	三ツ井遺跡	一宮市	●	●	●	●	●	
7	猫島遺跡	一宮市	●	●		●	●	
8	蕪池遺跡	一宮市		●				
9	西道海戸遺跡	岩倉市		●				
10	池之上遺跡	一宮市	●		●		●	
11	稲荷山古墳	一宮市			●			
12	伝法寺廃寺	一宮市				●	●	
13	元屋敷遺跡	一宮市		●	●		●	
14	北島白山遺跡	岩倉市			●		●	
15	前田遺跡	岩倉市			●	●		
16	飯守神遺跡	一宮市		●		●	●	
17	西大門遺跡	一宮市			●	●	●	
18	権現山遺跡	岩倉市	●		●	●	●	●
19	伝法寺野田遺跡	一宮市		●	●		●	●
20	伝法寺本郷遺跡	一宮市			●	●	●	
21	薬師堂廃寺	岩倉市		●	●	●	●	
22	下津遺跡	稲沢市				●	●	
23	五輪ヶ淵遺跡	一宮市				●	●	
24	寺跡遺跡	一宮市						●
25	宇福寺遺跡	西春町			●			
26	高塚古墳	西春町			●			
27	鍛冶ヶ一色遺跡	西春町		●	●	●	●	
28	御山寺遺跡	岩倉市	●	●	●	●	●	●
29	法成寺遺跡	岩倉市				●		
30	天神遺跡	岩倉市			●			
31	新溝古墳	岩倉市			●			
32	宮東遺跡	岩倉市		●	●	●	●	
33	乾出遺跡	岩倉市						
34	穴田遺跡	岩倉市	●	●				
35	西町畑遺跡	岩倉市	●	●				
36	東町畑遺跡	岩倉市		●				
37	大地遺跡	岩倉市	●	●				
38	葉広遺跡	岩倉市		●	●	●		
39	野辺遺跡	岩倉市	●	●				
40	ノンベ遺跡	岩倉市	●	●	●			
41	判定遺跡	岩倉市	●					
42	西北出A遺跡	岩倉市	●	●	●		●	
43	西北出B遺跡	岩倉市			●			
44	寺山遺跡	岩倉市				●		
45	神宮寺古墳	岩倉市			●			
46	西出古墳	岩倉市			●			
47	西出遺跡	岩倉市					●	
48	吸田遺跡	岩倉市			●			
49	石塚遺跡	岩倉市		●				
50	前畑遺跡	岩倉市			●		●	
51	高畑古墳	岩倉市			●			
52	下流遺跡	岩倉市			●			
53	小森遺跡	岩倉市			●		●	
54	西生田遺跡	岩倉市		●				
55	徳重遺跡	北名古屋市			●			
56	下新田遺跡	岩倉市				●	●	●
57	法成寺遺跡	北名古屋市		●	●	●	●	
58	神子前遺跡	北名古屋市		●				
59	弥勒寺廃寺跡	北名古屋市				●		

ら東 2.3km にある岩倉市御土井廃寺跡などがある。また御土井廃寺跡の南に隣接する岩倉市国衙遺跡は尾張国府推定地の候補ともなっており、この地域が白鳳時代から奈良時代にかけて広く開発されたことを反映した遺跡群と考えられる。発掘調査においても猫島遺跡（7）では奈良時代の掘立柱建物群、平安時代後半の掘立柱建物3棟、井戸1基、溝などが、御山寺遺跡（28）では奈良時代末から平安時代前半にかけての竪穴建物8棟や古代から中世にかけての掘立柱建物11棟が確認されている。また、本遺跡から西 0.8km の地点で発掘調査された伝法寺本郷遺跡では、奈良時代の竪穴建物や平安時代に埋没した自然流路などが確認されている。

中世の遺跡は 20 遺跡あり、本遺跡から西南西 2.0km にある下津宿遺跡では、鎌倉時代～室町時代の尾張地域の中心地であり、室町時代には尾張国守護所がおかれたものと考えられている。これらの状況は下津宿遺跡の発掘調査において多くの遺構と出土遺物から検証されており、中世の本遺跡も下津宿遺跡との関係で考えられるものと思われる。権現山遺跡の報告においても指摘されているように、室町時代の本遺跡周辺は国衙領や正眼寺などの寺院領が散在する状況が文献資料からうかがわれる。

［参考文献］

岩倉市史編集委員会編 1985『岩倉市史』上巻、岩倉市
澄田正一・大参義一・岩野見司 1967『新編 一宮市史 資料編二』一宮市
田中伸明編 1999『三ツ井遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 87 集」財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
土本典生 2000『元屋敷遺跡発掘調査報告書 III』一宮市教育委員会
洲嵜和宏編 2003『猫島遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集」財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二編 2003『権現山遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 110 集」財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
土本典生 2004『元屋敷遺跡発掘調査報告書 II』一宮市教育委員会
早野浩二・宮腰健司編 2006『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 139 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁編 2007『伝法寺野田遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 141 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
石黒立人編 2011『御山寺遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター報告書第 167 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇編 2013『下津宿遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター報告書第 175 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
蔭山誠一編 2013『町屋遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター報告書第 179 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
蔭山誠一編 2013『下新田遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター報告書第 198 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

第２章　遺　　構

本遺跡の遺構平面図について、既報告の遺構と今回報告する 06 区・10 区の遺構図を先ず合成した。既報告の遺構図と 06 区 1 面・10 区 1 面の遺構図（図 14)、既報告の遺構図と 06 区 2 面・10 区 2 面の遺構図を合成した（図 13)。また既報告の 99 区下面と 06 区 2 面と 10 区 2 面（遺構図版 16)、既報告の 99 区下面と 06 区 2 面下部遺構と 10 区 2 面の遺構図を合成した（遺構図版 17)。06 区 3 面・06 区 4 面の遺構図は、既報告の遺構図と 10 区の遺構図とは対応しないため、単独になっている（図 12)。

以下では、先ず本報告にかかる遺跡の基本層序について述べ、その後弥生時代前期から弥生時代中期にかけての遺構（06 区 3 面・06 区 4 面)、弥生時代中期後半から古墳時代にかけての遺構（06 区 2 面と 10 区 2 面)、奈良時代から中世にかけての遺構（06 区 1 面と 10 区 1 面・2 面)、中世から近代にかけての遺構（06 区 1 面と 10 区 1 面）の順に述べていきたい。

第 1 節　基本層序（図 5 〜図 11）

発掘調査時の地表面は標高 6.7m 〜 7.0m 前後で、20 世紀後半に耕作されていた水田面の上に、下水処理場建設に伴う盛り土が約 2m ある。次に 20 世紀後半の水田耕作土は暗灰黄色細粒砂を主体とするもので、06 区北側で 0.2m 〜 0.3m 程残り、06 区の南側にかけて薄くなりなくなる。その上面は､06 区北側の標高 4.9m 〜 5.4m 前後で、06 区東側で高くなる。その下には、中世から江戸時代後期にかけての 06 区の 1002SD と 1003SD に伴う水田耕作土層がある。この地層はにぶい黄色・暗灰黄色の細粒砂を主体とするもので、その上面は標高 4.9m 〜 5.3m 前後にある。この地層上面も 06 区北東側で高くなり、層厚 0.25m 〜 0.50m で、06 区南西側で厚くなる。以下、本発掘調査に関わる地層を上から述べる。

本発掘調査の 1 面は、奈良時代から江戸時代末にかけての水田遺構・方形土坑・土坑・溝などを検出しており、その遺構検出面は先に述べた中世以後の水田耕作土層を除去した下にある暗灰黄色細粒砂を主体とする地層の上面となる。06 区の南西隅側で 4.4m 前後と低く、06 区北東隅側で標高 4.9m 〜 5.0m 前後、その他の地点で標高 4.7m 〜 4.8m 前後である。この地層は、層厚 0.1m 〜 0.2m とやや薄い。

2 面の遺構検出面は黒褐色〜黒色細粒砂を主体とする地層の上面で、弥生時代中期後半から古墳時代にかけての水田遺構・溝・土坑を検出した。その遺構検出面は、1 面の暗灰黄色細粒砂層の下にある自然堆積層と思われるやや明るい灰黄色細粒砂の薄い地層を除去した下にあり、06 区の南西隅部で標高 4.2m 〜 4.3m 前後と低く、06 区北東側や 10 区西側中央部付近で標高 5.0m 前後と高く、その他の地点では 4.6m 〜 4.8m 前後である。この地層は 0.20m 前後の厚さで残っており、10 区中央部西側と 06 区全域に分布していた。

3 面の遺構検出面は、灰黄褐色・暗灰黄色・褐灰色細粒砂を主体とする地層の上面で、弥生時代前期から弥生時代中期にかけての水田遺構・溝・土坑を検出した。その遺構検出面は、2 面の黒褐色〜黒色細粒砂層の下にある自然堆積層と思われる灰黄褐色細粒砂層（層厚 0.1m 〜 0.2m）を除去した下にあり、06 区の南西側で標高 4.0m 〜 4.3m 前後と低く、06 区北東側で標高 4.5m 〜 4.7m 前後と高い。この地層の厚さは 0.20m 前後で、06 区全域で同じ厚さで堆積していた。

4 面の遺構検出面は、06 区南西側の 3 面水田遺構の下で一部確認されたのみで、その上面は標高 3．8 m 〜 3.9m にある。厚さ 0.15m 〜 0.2m の灰黄褐色細粒砂層を主体とする地層で、その上面で弥生時代前期から弥生時代中期にかけての水田遺構と溝を確認した。
尚、本報告書添付 CD に、各遺構平面図にある 10 区トレンチ 2・06 区 12 トレンチ〜 17 トレンチ・19 トレンチ・22 トレンチ・26 トレンチ〜 28 トレンチ・06 区南壁の土層断面図を掲載している。併せてご参照下さい。

第 2 節　弥生時代前期から弥生時代中期にかけての遺構（図 12）

3 面と 4 面の遺構検出面で、弥生時代前期から弥生時代中期にかけての水田遺構・溝・土坑を検出した。3 面では水田遺構 604 筆（1827ST 〜 2430ST）

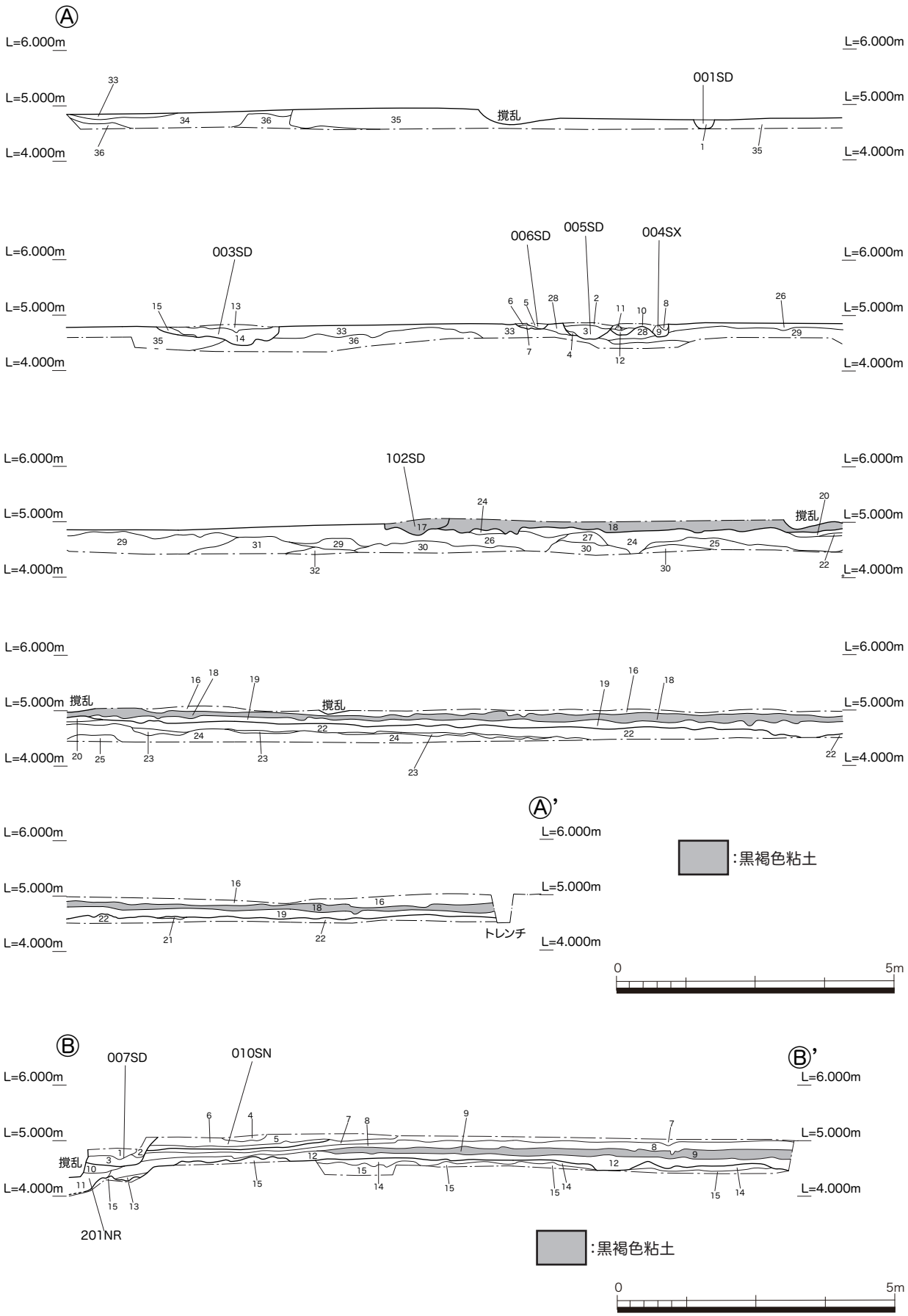


図 5　10 区西壁・南壁 1（1：100）

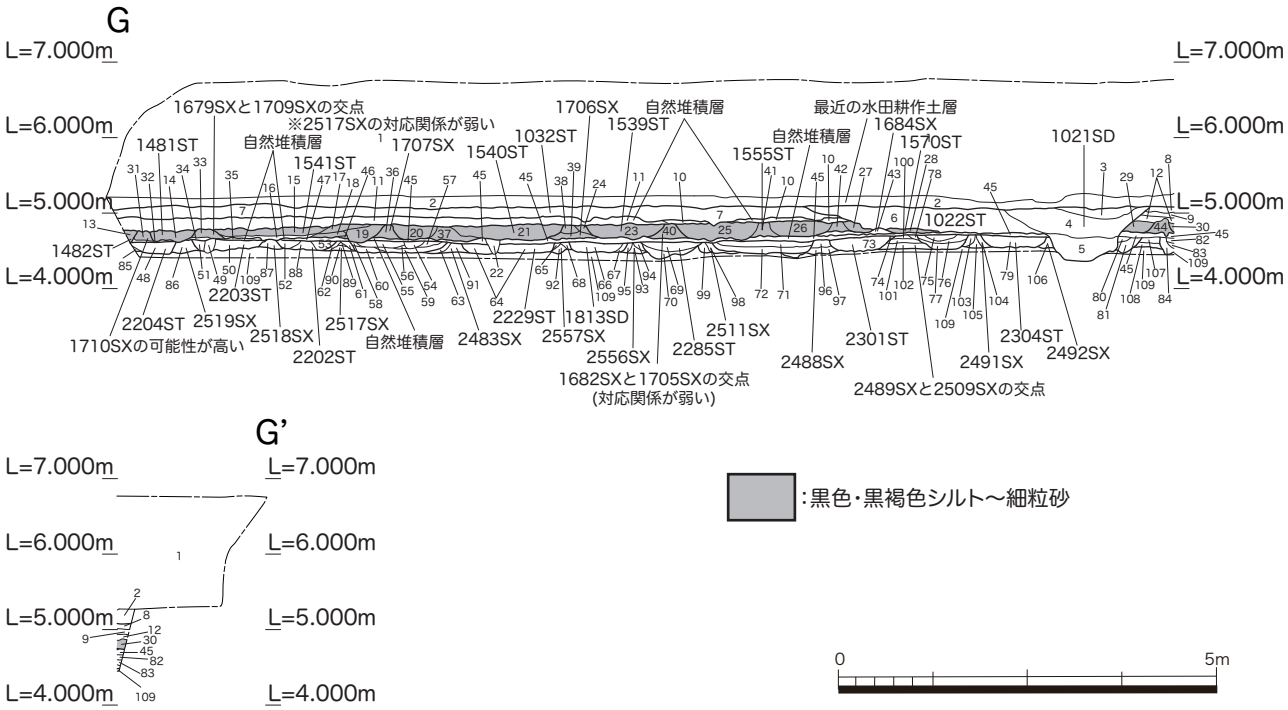
10区西壁土色

1, 5Y7/2灰白色粘土 しまりあり 粘性あり 細粒砂を30%含む
2, 2.5Y4/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり(弱) 細粒砂を10%含む
3, 5Y8/1灰白色砂 しまりあり(弱) 粘性なし 粗粒砂、黄灰色粘土がラミナ状に堆積する
4, 2.5Y4/1黄灰色粘土 しまりあり(弱) 粘性あり(弱) 中粒砂を30%含む
5, 2.5Y4/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり(弱) 細粒砂を10%含む
6, 5Y8/1灰白色砂 しまりあり(弱) 粘性なし 粗粒砂、黄灰色粘土がラミナ状に堆積する
7, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり(弱)
8, 2.5Y6/4にぶい黄色シルト しまりあり(弱) 粘性あり 径5～10cm黄灰色粘土ブロックを含む
9, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり ブロック状に堆積する
10, 5Y8/1灰白色砂 しまりあり(弱) 粘性なし 粗粒砂、黄灰色粘土がラミナ状に堆積する
11, 2.5Y5/1黄灰色砂 しまりあり(弱) 粘性あり(弱) 細粒砂を含む
12, 2.5Y7/1灰白色シルト しまりあり(弱) 粘性あり 灰白色砂がラミナ状に堆積する
13, 2.5Y5/1暗灰色粘土 しまりあり(強) 粘性あり
14, 2.5Y8/1灰白色粘土 しまりあり(強) 粘性あり 下層は、粗粒砂が混在する
15, 2.5Y7/2黄灰色砂 しまりあり(弱) 粘性なし 粗粒砂、灰白色土粒を5%含む
16, 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 黒褐色粘土粒を少量に含み、中粒砂を中量に含む 近世遺物包含層
17, 10YR2/2黒褐色粘土 しまりあり(強) 粘性あり(弱) 下層に、にぶい黄褐色シルトを含む
18, 10YR2/2黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり にぶい黄褐色粘土粒を少量に含む 弥生土器包含層
19, 2.5Y7/2灰黄色シルト しまりあり 粘性あり 黒褐色粘土粒を中量に含む
20, 7.5Y8/1灰白色細粒砂 しまりあり(強) 粘性あり(弱) 黒褐色粘土粒を少量に含む
21, 10Y6/1灰色シルト しまりあり(弱) 粘性あり 中粒砂を中量に含む
22, 7.5Y6/1灰色細粒砂 しまりあり 粘性なし 径1～2cm灰黄色シルトブロックを中量に含み、黒褐色粘土を少量に含む また酸化によるオリーブ褐色化したシルトブロックも含む
23, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂 しまりあり(弱) 粘性あり(弱)
24, 10YR6/1褐灰色細粒砂 しまりあり(弱) 粘性あり(弱) 酸化鉄斑を含む
25, 2.5Y7/2灰黄色中粒砂 しまりあり 粘性あり(弱) 酸化鉄斑を中量に含む
26, 10YR6/6明黄褐色シルト しまりあり 粘性あり(弱) 灰黄色シルトの酸化土壌
27, 10YR6/3にぶい黄橙色シルト しまりあり 粘性あり(弱)
28, 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂 しまりあり 粘性あり(弱) 黄灰色粘土粒を少量に含む
29, 10YR6/3にぶい黄橙色シルト しまりあり 粘性あり(弱) 酸化した灰黄褐色粘土を中量に含む
30, 2.5Y7/2灰黄色シルト しまりあり(強) 粘性あり(弱) 酸化鉄斑を中量に含む
31, 2.5Y7/2灰黄色シルト しまりあり 粘性あり(弱)
32, 7.5Y7/1灰白色中粒砂 しまりあり 粘性あり(弱) 管状な酸化鉄斑を含む
33, 2.5Y6/2灰黄色粗粒砂 しまりあり 粘性なし
34, 2.5Y7/1灰白色中粒砂 しまりあり 粘性あり(弱)
35, 10YR8/1灰白色粗粒砂 しまりあり 粘性なし
36, 2.5Y7/2灰黄色細粒砂 しまりあり 粘性あり(弱) 灰黄褐色粘土粒を少量に含む

10区南壁土色

1, 2.5Y6/1黄灰色粘土 しまりあり(強) 粘性あり 径1～2cm灰白色粘土ブロックを5%含む
2, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり(強) 粘性あり 径1～2cm灰白色粘土ブロックを10%含む
3, 5Y5/1灰色粘土 しまりあり 粘性あり(弱) 径5～8cm炭灰色粘土ブロックを10%含む
4, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり(強) 粘性あり(弱) 酸化鉄斑を中量に含む
5, 10YR8/3浅黄橙色粘土 しまりあり 粘性あり(弱) 細粒砂を少量に含む
6, 7.5Y5/1灰色粘土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄斑を多量に含む
7, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり(強) 下層にマンガン斑が見られる 耕作土
8, 5Y6/1灰色粘土 しまりあり 粘性あり(強) 酸化鉄斑を多量に含む
9, 10Y2/2黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり にぶい黄褐色粘土粒を少量に含む 弥生土器包含層（前報告書P11Ⅶ層相当）
10, 10Y5/1褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり(強) 管状な酸化鉄斑を多量に含む 下部は灰白色極細粒砂を多量に含む(耕作土または床土か)
11, 5Y4/1灰色粘土 しまりあり 粘性あり(強) 灰白色砂を極少量に含む
12, 2.5Y7/2灰黄色シルト しまりあり 粘性あり 黒褐色粘土粒を中量に含む
13, 2.5Y5/1黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 青灰色極細粒砂、灰白色シルトを含む
14, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂 しまりあり(弱) 粘性あり(弱) (地山)
15, 10YR6/1褐灰色細粒砂 しまりあり(弱) 粘性あり(弱) 酸化鉄斑を含む(地山)

図６　10 区西壁・南壁２



06区10トレンチ西壁土色

1, 盛土
2, 10YR4/4褐色細粒砂
3, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
4, 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
5, 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
6, 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
7, 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
8, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
9, 10YR4/2灰黄褐色シルト
10, 7.5YR4/2灰褐色シルト
11, 10YR4/4褐色シルト
12, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂(マンガン斑少量あり)
13, 10YR2/3黒褐色シルト
14, 10YR2/3黒褐色シルト
15, 10YR2/3黒褐色シルト
16, 10YR4/2灰黄褐色シルト
17, 10YR3/2黒褐色シルト
18, 10YR2/3黒褐色シルト
19, 10YR3/2黒褐色シルト
20, 7.5YR3/2黒褐色シルト
21, 7.5YR3/2黒褐色シルト
22, 7.5YR3/2黒褐色シルトの小ブロック混じる10YR4/2灰黄褐色シルト
23, 7.5YR3/2黒褐色シルト(上部は7.5YR4/2灰褐色シルト)
24, 7.5YR3/2黒褐色シルト
25, 7.5YR3/2黒褐色シルト
26, 7.5YR2/2黒褐色シルト
27, 7.5YR3/2黒褐色シルト
28, 7.5YR2/2黒褐色シルト
29, 7.5YR3/2黒褐色シルト
30, 7.5YR3/2黒褐色シルト
31, 10YR3/2黒褐色シルト
32, 10YR4/2灰黄褐色シルト(鉄斑少量含む)
33, 10YR3/3暗褐色シルト
34, 10YR4/2灰黄褐色シルト
35, 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
36, 7.5YR3/2黒褐色シルト
37, 7.5YR3/2黒褐色シルト
38, 7.5YR3/2黒褐色シルト
39, 7.5YR3/2黒褐色シルト
40, 7.5YR3/2黒褐色シルト
41, 7.5YR3/3暗褐色シルト
42, 7.5YR3/2黒褐色シルト
43, 7.5YR4/2灰褐色シルト
44, 7.5YR3/2黒褐色シルト
45, 10YR4/2灰黄褐色シルト
46, 10YR3/2黒褐色シルト
47, 10YR4/2灰黄褐色シルト
48, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
49, 10YR4/2灰黄褐色シルトと7.5YR3/2黒褐色シルトの斑土
50, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
51, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
52, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
53, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
54, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
55, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
56, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
57, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
58, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
59, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
60, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
61, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
62, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
63, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
64, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
65, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
66, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
67, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
68, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
69, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
70, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
71, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
72, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
73, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
74, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)75, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
76, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
77, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
78, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
79, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
80, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
81, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
82, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
83, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
84, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
85, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
86, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
87, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
88, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
89, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
90, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
91, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
92, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
93, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
94, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
95, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
96, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
97, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
98, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
99, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
100, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
101, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
102, 10YR4/2灰黄褐色シルト(細粒砂)
103, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
104, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
105, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
106, 10YR4/1褐灰色シルト(砂質)
107, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
108, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
109, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂

図7　06区10トレンチ西壁（1：100）

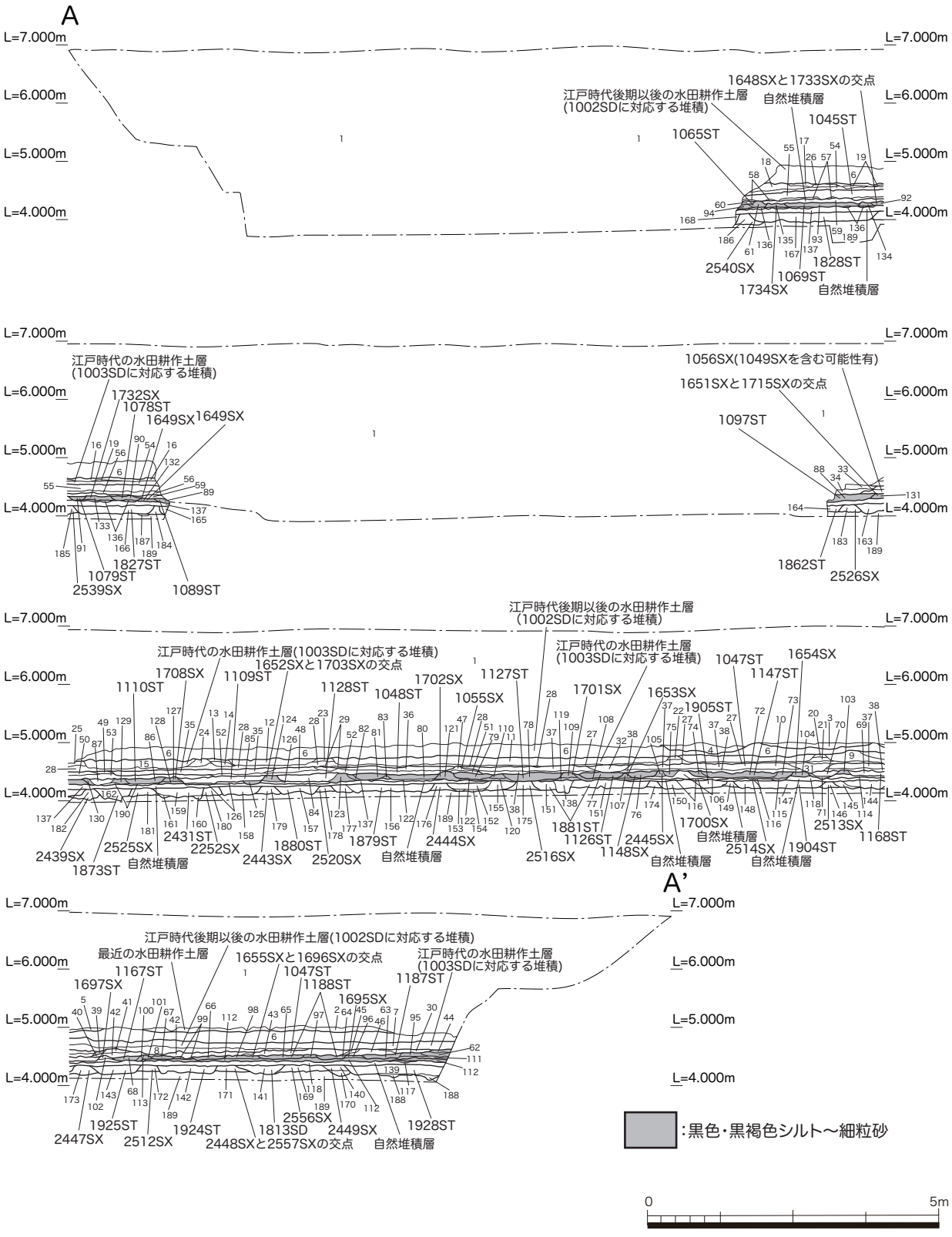


図８　06 区 1 トレンチ西壁 1（1：100）

06区1トレンチ西壁土色

1, 盛土
2, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
3, 2.5Y3/2黒褐色細粒砂
4, 2.5Y3/2黒褐色細粒砂
5, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
6, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
7, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
8, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂に10YR4/2灰黄褐色が混じる斑土
9, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
10, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂
11, 5Y6/２灰オリーブ色細粒砂
12, 5Y5/3灰オリーブ色細粒砂
13, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
14, 5Y5/2灰オリーブ色シルト
15, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
16, 2.5Y5/4黄褐色細粒砂
17, 2.5Y5/4黄褐色細粒砂
18, 2.5Y5/3黄褐色シルト(細粒砂混じる)
19, 2.5Y5/3黄褐色シルト(細粒砂混じる)
20, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂
21, 5Y5/3灰オリーブ色細粒砂
22, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
23, 5Y4/2灰オリーブ色細粒砂
24, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
25, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
26, 2.5Y5/3黄褐色シルト(細粒砂混じる)
27, 5Y5/3灰オリーブ色細粒砂
28, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂
29, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
30, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
31, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂(ややシルト混じる)
32, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
33, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
34, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
35, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
36, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
37, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
38, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
39, 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂(ややシルト混じる)
40, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂(ややシルト混じる)
41, 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
42, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
43, 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
44, 10YR3/3暗褐色細粒砂
45, 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
46, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
47, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
48, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
49, 10YR5/1褐灰色細粒砂
50, 10YR4/1褐灰色細粒砂
51, 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
52, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
53, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
54, 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂
55, 10YR4/2灰黄褐色シルト
56, 10YR5/2灰黄褐色シルト
57, 10YR5/2灰黄褐色シルト
58, 10YR5/2灰黄褐色シルト
59, 2.5Y6/3にぶい黄色シルト
60, 2.5Y6/3にぶい黄色シルト
61, 10YR3/2黒褐色シルト
62, 10YR3/2黒褐色細粒砂
63, 10YR2/3黒褐色細粒砂
64, 10YR3/2黒褐色細粒砂(ややシルト混じる)
65, 10YR3/2黒褐色細粒砂
66, 10YR2/2黒褐色細粒砂
67, 10YR3/1黒褐色細粒砂
68, 10YR3/2黒褐色細粒砂
69, 10YR4/1褐灰色シルト
70, 10YR4/1褐灰色シルト
71, 10YR3/3暗褐色細粒砂
72, 10YR2/2黒褐色細粒砂
73, 10YR3/2黒褐色細粒砂
74, 10YR3/1黒褐色細粒砂
75, 10YR3/1黒褐色細粒砂
76, 10YR2/2黒褐色細粒砂
77, 10YR2/2黒褐色細粒砂
78, 10YR3/1黒褐色細粒砂
79, 10YR3/1黒褐色細粒砂
80, 10YR2/2黒褐色細粒砂
81, 10YR3/1黒褐色中粒砂
82, 10YR2/1黒色細粒砂
83, 10YR3/2黒褐色細粒砂
84, 10YR4/1褐灰色細粒砂
85, 10YR4/1褐灰色細粒砂
86, 10YR3/2黒褐色細粒砂
87, 10YR4/1褐灰色細粒砂
88, 10YR2/2黒褐色細粒砂
89, 7.5YR3/2黒褐色シルト
90, 7.5YR3/2黒褐色シルト
91, 7.5YR3/2黒褐色シルト
92, 7.5YR3/2黒褐色シルト
93, 10YR3/1黒褐色細粒砂
94, 10YR2/2黒褐色シルト
95, 10YR2/2黒褐色シルト
96, 10YR3/1黒褐色細粒砂
97, 10YR2/2黒褐色細粒砂
98, 10YR3/1黒褐色細粒砂
99, 10YR3/2黒褐色細粒砂
100, 10YR3/2黒褐色細粒砂
101, 10YR3/2黒褐色細粒砂
102, 10YR3/2黒褐色シルト
103, 10YR3/3暗褐色細粒砂
104, 10YR3/1黒褐色細粒砂
105, 10YR3/2黒褐色細粒砂
106, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
107, 10YR3/2黒褐色細粒砂
108, 10YR3/2黒褐色細粒砂
109, 10YR3/1黒褐色細粒砂(ややシルト混じる)
110, 10YR2/2黒褐色細粒砂
111, 10YR3/2黒褐色シルト
112, 10YR3/3暗褐色細粒砂
113, 10YR3/3暗褐色細粒砂
114, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
115, 10YR3/3暗褐色細粒砂
116, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
117, 10YR3/2黒褐色細粒砂
118, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
119, 10YR3/2黒褐色細粒砂
120, 10YR3/2黒褐色細粒砂
121, 10YR3/1黒褐色細粒砂
122, 10YR3/2黒褐色細粒砂
123, 10YR2/2黒褐色細粒砂
124, 10YR2/1黒色細粒砂
125, 10YR3/2黒褐色細粒砂
126, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
127, 10YR3/1黒褐色細粒砂
128, 10YR3/2黒褐色細粒砂
129, 10YR3/1黒褐色細粒砂
130, 10YR3/1黒褐色細粒砂
131, 10YR3/2黒褐色細粒砂(ややシルト混じる)
132, 7.5YR3/2黒褐色シルト
133, 7.5YR3/2黒褐色シルト
134, 10YR3/2黒褐色シルト
135, 7.5YR3/2黒褐色シルト
136, 7.5YR5/2灰褐色シルト(鉄斑が顕著な部分)
137, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
138, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
139, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
140, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂(やや中粒砂混じる)
141, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
142, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
143, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
144, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
145, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
146, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
147, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
148, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂
149, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂
150, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
151, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
152, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
153, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
154, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
155, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
156, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
157, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
158, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
159, 10YR4/1褐灰色細粒砂
160, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
161, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
162, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
163, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
164, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
165, 10YR4/1褐灰色シルト
166, 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂質)
167, 10YR4/1褐灰色シルト(砂質)
168, 10YR4/1褐灰色シルト
169, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂(やや中粒砂混じる)
170, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
171, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂(やや中粒砂混じる)
172, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂
173, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
174, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
175, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
176, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
177, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
178, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
179, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや中粒砂混じる)
180, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
181, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
182, 10YR4/1褐灰色細粒砂
183, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
184, 10YR4/1褐灰色シルト(砂質)
185, 10YR4/1褐灰色シルト(砂質)
186, 10YR灰黄褐色細粒砂
187, 10YR4/1褐灰色細粒砂
188, 10YR4/1褐灰色細粒砂
189, 10YR4/1褐灰色細粒砂
190, 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂

図９　06区１トレンチ西壁２

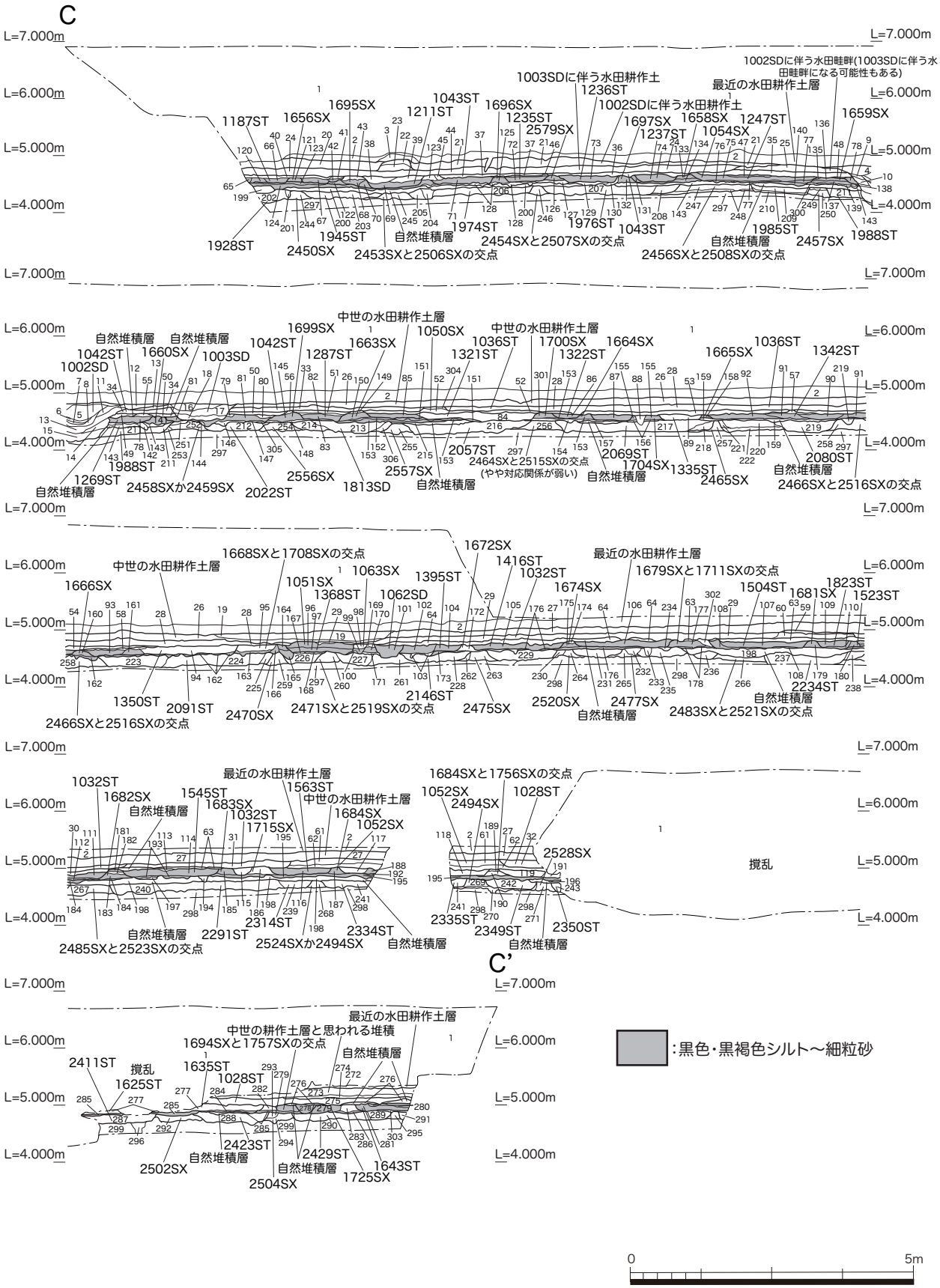


図 10　06 区 2 トレンチ北壁 1（1：100）

06区2トレンチ北壁土色

1, 盛土
2, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
3, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
4, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
5, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂に
10YR5/2灰黄褐色細粒砂が若干混入
6, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
7, 2.5Y5/1黄灰色細粒砂
8, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
9, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
10, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
11, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
12, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
13, 10YR5/1褐灰色細粒砂(ややシルト混じる)
14, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
15, 10YR4/1褐灰色細粒砂(ややシルト混じる)に
10YR3/2黒褐色シルトと2.5Y5/1黄灰色シルトを含む斑土
16, 5Y6/2灰オリーブ色細粒砂
17, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
18, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)に
10YR3/2黒褐色細粒砂(ややシルト混じる)を含む斑土
19, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
20, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
21, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
22, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
23, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
24, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
25, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
26, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
27, 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂
28, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
29, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
30, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
31, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
32, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
33, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
34, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
35, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
36, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
37, 10YR3/3暗褐色細粒砂
38, 10YR3/2黒褐色細粒砂
39, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
40, 10YR3/3暗褐色細粒砂
41, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
42, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
43, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
44, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
45, 10YR3/3暗褐色細粒砂
46, 10YR3/3暗褐色細粒砂
47, 10YR3/2黒褐色細粒砂
48, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
49, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
50, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
51, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
52, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
53, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
54, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
55, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
56, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
57, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
58, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
59, 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂
60, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
61, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
62, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
63, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
64, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
65, 10YR3/2黒褐色細粒砂
66, 10YR3/3暗褐色細粒砂
67, 10YR3/2黒褐色細粒砂
68, 10YR3/2黒褐色細粒砂
69, 10YR3/2黒褐色細粒砂
70, 10YR3/2黒褐色細粒砂
71, 10YR3/2黒褐色細粒砂
72, 10YR3/2黒褐色細粒砂
73, 10YR3/2黒褐色細粒砂
74, 10YR3/2黒褐色細粒砂
75, 10YR3/3黒褐色細粒砂
76, 10YR2/2黒褐色細粒砂
77, 10YR3/2黒褐色細粒砂
78, 10YR3/1黒褐色細粒砂
79, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
80, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
81, 10YR2/2黒褐色細粒砂
82, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
83, 10YR2/2黒褐色細粒砂
84, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
85, 10YR3/2黒褐色細粒砂
86, 10YR3/2黒褐色細粒砂
87, 10YR3/2黒褐色細粒砂
88, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
89, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
90, 10YR3/1黒褐色細粒砂
91, 10YR3/2黒褐色細粒砂
92, 10YR3/2黒褐色細粒砂
93, 10YR3/2黒褐色細粒砂
94, 10YR4/1褐灰色細粒砂
95, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
96, 10YR3/2黒褐色細粒砂
97, 10YR2/2黒褐色細粒砂
98, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
99, 10YR3/2黒褐色細粒砂
100, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
101, 10YR3/2黒褐色細粒砂
102, 10YR3/2黒褐色細粒砂
103, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
104, 10YR3/2黒褐色細粒砂
105, 10YR3/2黒褐色細粒砂
106, 10YR3/2黒褐色細粒砂
107, 10YR3/2黒褐色細粒砂
108, 10YR3/2黒褐色細粒砂
109, 10YR3/2黒褐色細粒砂
110, 10YR3/2黒褐色細粒砂
111, 10YR3/1黒褐色細粒砂
112, 10YR3/2黒褐色細粒砂
113, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
114, 10YR3/2黒褐色細粒砂
115, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
116, 10YR3/3暗褐色細粒砂
117, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
118, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
119, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
120, 10YR3/2黒褐色細粒砂(ややシルト混じる)
121, 10YR3/1黒褐色細粒砂
122, 10YR2/2黒褐色細粒砂
123, 10YR3/2黒褐色細粒砂
124, 10YR3/2黒褐色シルト
125, 10YR3/2黒褐色細粒砂
126, 10YR3/1黒褐色細粒砂
127, 10YR3/2黒褐色細粒砂
128, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
129, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
130, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
131, 10YR3/2黒褐色細粒砂
132, 10YR3/2黒褐色細粒砂
133, 10YR3/3暗褐色細粒砂
134, 10YR3/3暗褐色細粒砂
135, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
136, 10YR2/2黒褐色細粒砂
137, 10YR3/2黒褐色細粒砂
138, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
139, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
140, 10YR3/2黒褐色細粒砂
141, 10YR3/2黒褐色細粒砂
142, 10YR5/1黒褐色細粒砂
143, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
144, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
145, 10YR3/2黒褐色細粒砂
146, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
147, 10YR4/1褐灰色細粒砂
148, 10YR4/1褐灰色細粒砂
149, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
150, 10YR3/2黒褐色細粒砂
151, 10YR4/1褐灰色細粒砂
152, 10YR2/2黒褐色細粒砂
153, 10YR3/1黒褐色細粒砂
154, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
155, 10YR3/2黒褐色細粒砂
156, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
157, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
158, 10YR3/2黒褐色細粒砂
159, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
160, 10YR3/2黒褐色細粒砂
161, 10YR3/1黒褐色細粒砂
162, 10YR3/1黒褐色細粒砂
163, 10YR3/2黒褐色細粒砂
164, 10YR3/2黒褐色細粒砂
165, 10YR3/2黒褐色細粒砂
166, 10YR3/2黒褐色細粒砂
167, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
168, 10YR3/2黒褐色細粒砂
169, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
170, 10YR3/2黒褐色細粒砂
171, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
172, 10YR4/1褐灰色細粒砂
173, 10YR3/1黒褐色細粒砂
174, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
175, 10YR3/2黒褐色細粒砂
176, 10YR3/3暗褐色細粒砂
177, 10YR3/1黒褐色細粒砂
178, 10YR3/3暗褐色細粒砂
179, 10YR3/2黒褐色細粒砂
180, 10YR3/2黒褐色細粒砂
181, 10YR3/3黒褐色細粒砂
182, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
183, 10YR3/2黒褐色細粒砂
184, 10YR3/2黒褐色細粒砂
185, 10YR3/2黒褐色細粒砂
186, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
187, 10YR3/2黒褐色細粒砂
188, 10YR3/3暗褐色細粒砂
189, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
190, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
191, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
192, 7.5YR3/2黒褐色細粒砂
193, 7.5YR3/2黒褐色細粒砂
194, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
195, 7.5YR3/3暗褐色細粒砂
196, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
197, 7.5YR4/3褐色細粒砂
198, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
199, 5Y5/2灰オリーブ色シルト
200, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
201, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや砂っぽい)
202, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
203, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
204, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
205, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
206, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
207, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
208, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂(やや砂っぽい)
209, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
210, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
211, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
212, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
213, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
214, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
215, 10YR5/1褐灰色細粒砂
216, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
217, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
218, 10YR5/1褐灰色細粒砂
219, 10YR5/1褐灰色細粒砂
220, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
221, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
222, 10YR5/1褐灰色細粒砂
223, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
224, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
225, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
226, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
227, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
228, 10YR5/1褐灰色細粒砂
229, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
230, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
231, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
232, 10YR5/2灰黄細粒砂
233, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
234, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
235, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
236, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
237, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
238, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
239, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
240, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
241, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
242, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
243, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
244, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや砂っぽい)
245, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
246, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
247, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(やや砂っぽい)
248, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
249, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
250, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
251, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
252, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
253, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
254, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
255, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
256, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
257, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
258, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
259, 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂
260, 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂
261, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
262, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
263, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
264, 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂(ややシルト混じる)
265, 10YR5/1褐灰色細粒砂
266, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
267, 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
268, 10YR5/1褐灰色細粒砂
269, 10YR5/1褐灰色細粒砂
270, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
271, 10YR5/1褐灰色細粒砂
272, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
273, 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂
274, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
275, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
276, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
277, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
278, 10YR3/3暗褐色細粒砂
279, 10YR3/2黒褐色細粒砂
280, 10YR3/3暗褐色細粒砂
281, 10YR3/2黒褐色細粒砂
282, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
283, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
284, 10YR2/2黒褐色細粒砂
285, 7.5YR3/3暗褐色細粒砂
286, 7.5YR3/3暗褐色細粒砂
287, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
288, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
289, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
290, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
291, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
292, 10YR5/1褐灰色細粒砂
293, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
294, 10YR5/1褐灰色細粒砂
295, 10YR5/1褐灰色細粒砂
296, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
297, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
298, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
299, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
300, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
301, 10YR3/1黒褐色細粒砂
302, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
303, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
304, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
305, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
306, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂

図 11　06 区 2 トレンチ北壁 2

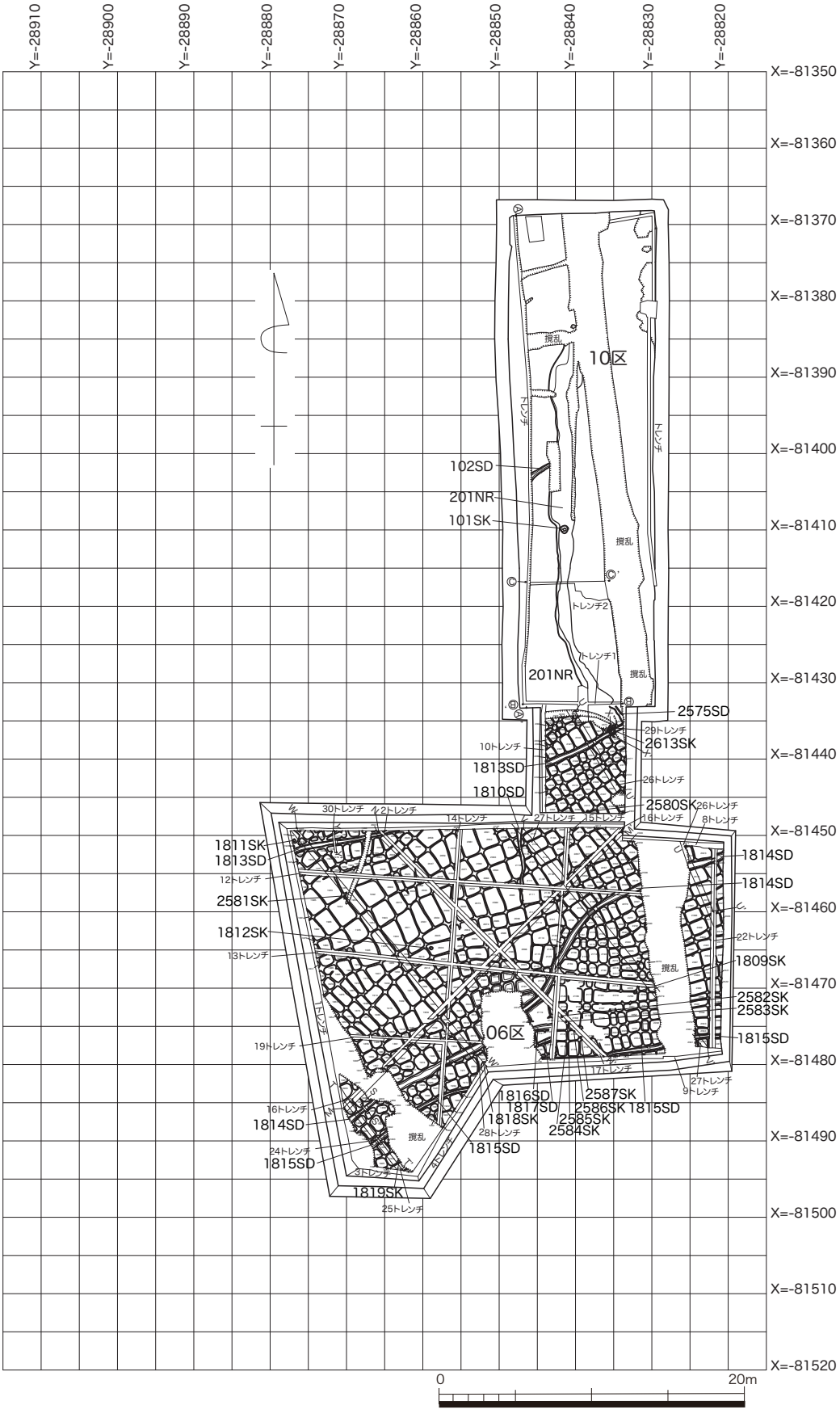


図 12　06 区 3 面・10 区 2 面遺構図（1：800）

とそれに伴う畦畔142条（2431SX～2572SX）、溝3条（1813SD～1815SD）、土坑4基（1809SK・1811SK・1812SK・2613SK）がある。

水田遺構とそれに伴う畦畔：水田遺構は上面幅0.20m前後の畦畔に囲まれた平面隅丸方形から隅丸長方形のものが主体である。遺構の大きさは平面隅丸方形のものが一辺1.0m～2.0m前後のものが多く、全体に小さい。平面隅丸長方形のものは、短辺が1.0m前後のものから2.5m前後のものまで、長辺も2.0mのものから4.0m前後のものまであり、比較的大きい。平面形が不整な隅丸三角形から隅丸台形のものは、溝に隣接・近接するものにみられ、一辺1.0m前後のものから3.0m前後のものまである。遺構の深さは、0.15m～0.25mの範囲で0.20m前後である。遺構内の底面はほぼ平坦であるが、畦畔に沿った外側で1～2cm程溝状に深くなる傾向が見られた。

埋土は灰黄褐色・暗灰黄色・褐灰色細粒砂のもので灰黄褐色細粒砂が多い傾向があるが、水田遺構と畦畔の間に埋土の色調や粒度に明確な違いは認められない。

基本層序で述べたが、水田遺構上面の傾斜と遺構のあり方について分析すると、06区北側部では水田遺構とそれに伴う畦畔の軸線がN−24°−W～N−28°−Wにあり、標高4.60m・4.70mの等高線と非常に良い対応関係がみられ、標高4.80mの等高線ともある程度対応関係が認められる。06区の北側から06区東側にかけて、水田遺構とそれに伴う畦畔の軸線は弧状に曲がりN−6°−W～N−0°−EWにあり、標高4.50mの等高線と非常に良い対応関係がみられ、標高4.60mの等高線ともある程度対応関係が認められる。06区西側では、水田遺構とそれに伴う畦畔の軸線がN−24°−W～N−44°−Wにあり、06区の南側にはしる1814SD・1815SDの流れに直行する軸線となるN−30°−W前後の軸線のものが多い。06区の西側は、その北側で標高4.30m・4.40mの等高線から1813SD付近からその南側で微高地状になり、1814SD付近で最も低い谷地形になる。特に06区南西隅側では、標高3.90m・4.00m・4.10m・4.20mの等高線で顕著にみられ、1815SD付近で再び小さい微高地状の地形が認められる。よって水田遺構とそれに伴う畦畔の軸線と等高線の対応関係は比較的弱い。水田遺構の一筆の大きさとの関係では、06区北西側の1813SD南側の微高地状地形の部分で一筆の大きさが大きい。

出土遺物は、弥生土器と思われる土器片が数点出土しているが、小片で摩耗している為、詳細は不明である。

1813SD：06区北側から06区北西隅側に続く溝で、東北東から西南西に流れる。横断面形は丸底で、幅0.50m～0.60m、深さ0.12m～0.20mである。埋土は暗灰黄色細粒砂である。出土遺物はない。

1814SD：06区北東隅部から06区南西隅部に続く溝で、06区北東側では東北東から西南西に流れるが、06区中央部にて大きく南に振れて、06区南西側で再び東北東から西南西の流れになる。横断面形は丸底で、幅0.50m～0.90m、深さ0.12m～0.22mである。埋土は暗灰黄色細粒砂である。出土遺物はない。

1815SD：06区南東側から06区南西隅側に続く溝で、1814SDの南を東から南西に流れる。横断面形は丸底で、幅0.40m～0.60m、深さ0.15m前後である。埋土は灰黄褐色細粒砂である。出土遺物はない。

1809SK・1811SK・1812SK・2613SK：1809SKは06区南西側、1811SKは06区北西隅部、1812SKは06区中央部西側、2613SKは06区北側に1813SDと重複する位置にある。1809SK・1811SK・1812SKは径0.30m～0.45mの平面円形の土坑で、深さ0.10m～0.20mの比較的浅い丸底の土坑である。埋土は上層の自然堆積と考えられる細粒砂が混じる灰黄褐色細粒砂である。2613SKは径0.95m～1.15mの平面不整円形、深さ0.31mの断面丸底の土坑で、埋土は灰黄褐色細粒砂である。1813SDより古い遺構であるが、出土遺物はない。

4面の遺構検出面は、06区南西側の3面水田遺構の下で一部確認されたのみであるが、より古い遺構として水田遺構4筆（2589ST～2592ST）、それに伴う畦畔5条（2593SX～2596SX・2619SX）、溝2条（2588SD・2612SD）、土坑15基（2597SK～2611SK）がある。

2588SDに伴う水田遺構と畦畔：2588SDは1814SDの下に確認されて溝で、幅0.30m、深さ0.05m前後が残っていた。2588SDの肩にあたる畦畔が2596SX・2619SXで、幅0.15m～0.20m程確認でき、2588SDの南東に隣接する幅1.0m～1.5mの4筆の水田遺構と2588SDに直行する3条の畦畔2593SX～2595SXが認められた。2593SX～2595SXの上面幅は0.20mである。水田遺構の深さは0.05mである。水田遺構とそれに伴う畦畔の埋土は灰黄褐色細粒砂で類似する。

その他の土坑と溝：2612SDは幅0.50m、深さ0.06cm

～0.08m の断面丸底で、埋土は灰黄褐色細粒砂である。この溝は長さ 1.3m 程確認できたのみである。2597SK ～ 2611SK は径 0.15m ～ 0.50m の平面やや不整な円形から楕円形の土坑で、深さは 0.05m ～ 0.10m と比較的浅いものであった。これらの土坑の埋土も灰黄褐色細粒砂を主体とするものであった。出土遺物はない。

第３節　弥生時代中期後半から古墳時代にかけての遺構（図 13）

２面の遺構検出面で、弥生時代中期後半から古墳時代にかけての水田遺構 581 筆（1065ST ～ 1645ST）とそれに伴う畦畔 109 条（1647SX ～ 1755SX）、溝２条（06 区 1062SD・10 区 102SD）、土坑３基（1040SK・2615SK・2616SK）がある。また、06 区北側で２面の水田遺構の下から検出した遺構として溝６条（1761SD・1765SD・1775SD・1776SD・1786SD・1799SD）、隅丸長方形から方形状の平面をもつ土坑３基（1806SK ～ 1808SK）、大型円形土坑１基（1805SK）・小型の柱穴状の土坑 40 基（1759SK・1760SK・1762SK ～ 1764SK・1766SK ～ 1774SK・1777SK ～ 1785SK・1787SK ～ 1798SK・1800SK ～ 1804SK）を確認した。

水田遺構とそれに伴う畦畔：遺構の範囲は、06 区で検出されたのみであるが、水田遺構とそれに伴う畦畔の埋土である黒褐色～黒色細粒砂の分布範囲から考えると、10 区 201NR の西で 10 区 102SD の南から 06 区全域に遺構が展開した可能性が高い。

水田遺構は上面幅 0.15m ～ 0.30m 前後の畦畔に囲まれた平面隅丸方形から隅丸長方形のものが主体である。遺構の大きさは平面隅丸方形のものが一辺 0.8m ～ 2.0m 前後のものが多く、全体に小さい。平面隅丸長方形のものは、短辺が 0.8m 前後のものから 2.2m 前後のものまで、長辺も 2.0m のものから 3.6m 前後のものまであり、比較的大きい。平面形が不整な隅丸三角形から隅丸台形のものは、溝 1062SD に隣接するものとその東西に少し離れた 1238ST・1244ST・1245ST・1271ST・1296ST・1297ST・1373ST・1377ST・1378ST・1447ST・1448ST・1464ST・1484ST などがみられる。一辺 1.0m 前後のものから 3.4m 前後のものまである。これらの遺構の深さは、0.15m ～ 0.40m の範囲で 0.20m 前後である。遺構内の底面はほぼ平坦であるが、畦畔に沿った外側で１～2cm 程溝状に深くなるところがみられた。1062SD との関係では、1397ST と 1398ST は 1062SD の東西に分かれて検出できたが、畦畔の軸線からは本来は一筆の水田遺構である可能性が高いもので、1062SD がその水田遺構の中を新たに掘削された可能性があり、先に述べた平面形が不整な隅丸三角形や隅丸台形になるものは 1062SD 掘削に合わせて設けられた結果であるものと考えられる。

埋土は黒褐色～黒色細粒砂のものであるが、水田遺構と畦畔の間に埋土の色調や粒度に明確な違いは認められない。水田遺構の上層でやや黒色が強く、下層で黒色が薄くなる傾向がみられる。

水田遺構上面の傾斜と遺構のあり方について分析すると、先に述べたように 06 区の南西側で標高 4.0m ～ 4.3m 前後と低く、06 区北東側で標高 4.5m ～ 4.7m 前後と高いが、06 区では水田遺構とそれに伴う畦畔の軸線が N−22°−W ～ N−40°−W にあり、06 区北側で標高 4.80m・4.90m の等高線と比較的良い対応関係がみられるが、他の地点では地形の傾斜とはある程度対応関係が認められるのみで、等高線と水田遺構の軸線とはあまり対応していない。

出土遺物は少ないが、弥生前期の沈線文形土器（E052・E053）・弥生時代中期中葉後半の弥生土器の太頸壺（E056）・細頸壺（E054）・櫛条痕深鉢（E058）・打製石鏃（S001 ～ S003）などがみられる。

06 区 1062SD：06 区中央部を北から南に続く溝で、北東から南西に流れる。横断面形は丸底で、幅 0.60m ～ 0.70m、深さ 0.10m ～ 0.15m である。埋土は黒褐色細粒砂である。出土遺物はない。

10 区 102SD：10 区中央部西側で検出された溝で、東北東から西南西に流れる。99 区 SD10 に続く。横断面形は丸底で、幅 0.50m ～ 0.60m、深さ 0.12m ～ 0.20m である。埋土は暗灰黄色細粒砂である。出土遺物はない。

1040SK・2615SK・2616SK：1040SK は 06 区西側中央付近にある土坑で、平面楕円形の長径 0.90m、短径 0.70m、深さ 0.08m の浅い平底の土坑である。2615SK・2616SK は 06 区中央部北側にある土坑で、2615SK が平面円形で径 0.40m、深さ 0.05cm の丸底の土坑、2616SK が平面楕円形で長径 0.40m、短径 0.20m の深さ 0.05m の丸底の土坑である。この３基の土坑は２面の水田遺構とそれに伴う畦畔の上から掘削された遺構である。出土遺物はない。

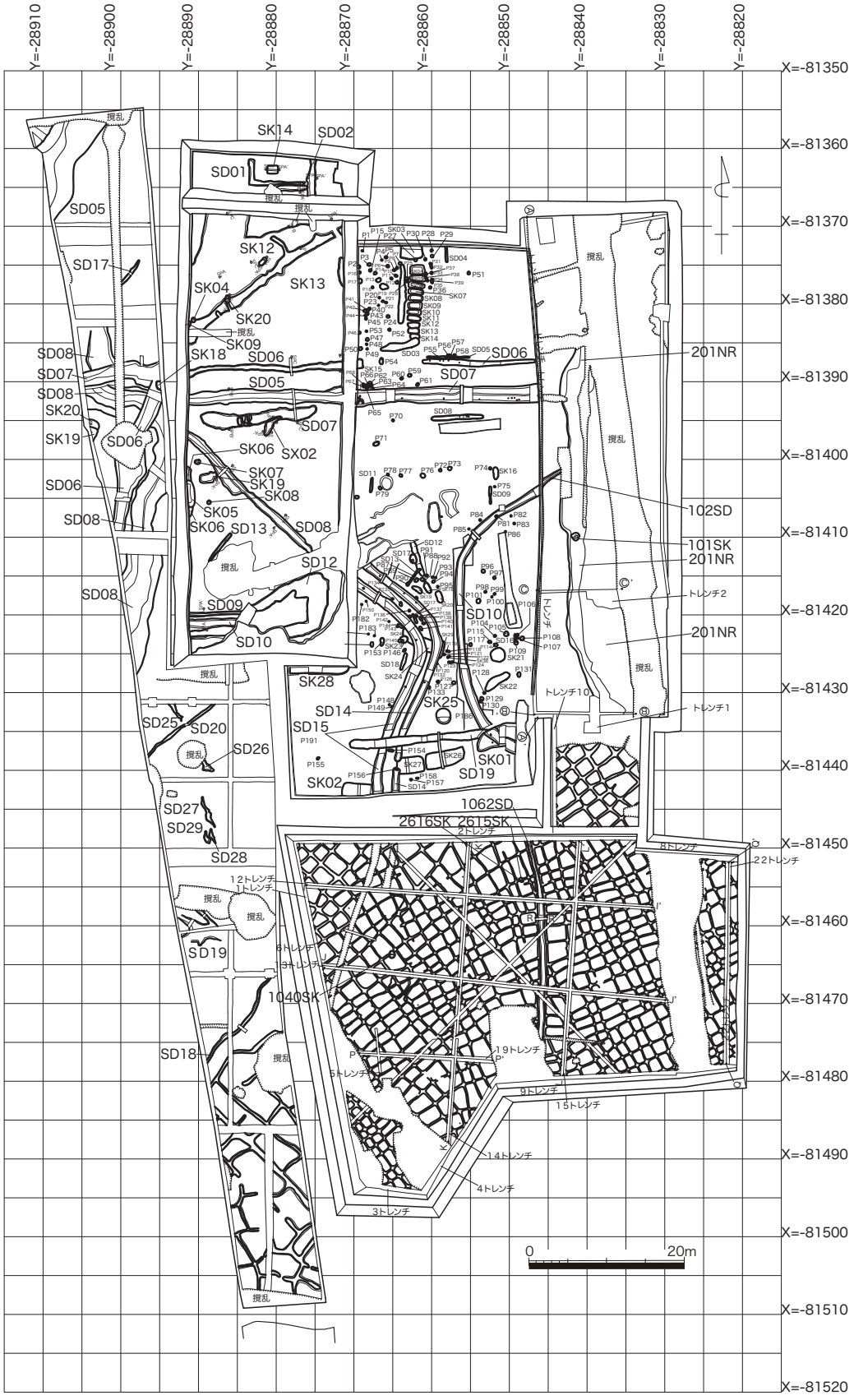


図 13　98A 区・98B 区・99 区・02 区・06 区 2 面・10 区 2 面遺構図（1：800）

06区北側で2面の水田遺構の下から検出した遺構：溝6条は1761SD・1765SD・1775SD・1776SD・1786SD・1799SDがあり、幅0.14m～幅0.25m程で深さ0.03cm～0.06mの浅い丸底の溝で、1786SD以外は鍵状に曲がってめぐる。これらは水田遺構に伴う畦畔の内側にみられる深い部分に、埋土の状況や形態が似ている。埋土は1776SDが黒褐色細粒砂である他は灰黄褐色細粒砂である。隅丸長方形から方形状の平面をもつ土坑は1806SK～1808SKがあり、平面隅丸方形から隅丸長方形の土坑で、埋土は灰黄褐色細粒砂で、深さ0.03m～0.07mの浅い平底の土坑で、2面に検出した水田遺構の形状と類似する。大型円形土坑1805SKは径1.20m～1.30m、深さ0.05mの平面円形、皿状の土坑である。小型の柱穴状の土坑は1759SK・1760SK・1762SK～1764SK・1766SK～1774SK・1777SK～1785SK・1787SK～1798SK・1800SK～1804SKがあり、径0.10m～0.45m、深さ0.03m～0.10m、埋土は灰黄褐色細粒砂を主体とするものであった。

第4節　奈良時代から中世にかけての遺構

(図14)

1面の遺構検出面で、奈良時代から中世にかけての遺構で、1面で確認した水田遺構21筆（1028ST～1048ST）とそれに伴う畦畔10条（1049SX～1057SX）、土坑1基（1015SK）がある。明らかに中世以後の遺構と思われるものは、中世から近世にかけての遺構の中で触れる。

1015SK：06区西側の1044STと1050SXの上から掘り込む平面楕円形の土坑として確認できた。大きさは長径2.0m、短径1.2m、深さ0.10mで、断面皿状のものであった。埋土はオリーブ褐色シルトで、古式土師器の甕（E-029）が出土した。

○水田遺構

水田遺構とそれに伴う畦畔：遺構の範囲は、06区で検出されたのみで、他の調査区では確認されていない。

水田遺構は上面幅2.00m～2.35mの大畦畔と思われる1052SXと上面幅0.40m～0.60mの小畦畔と思われる1049SX～1051SX・1053SX～1057SXに囲まれている。畦畔は遺構検出面より上に突出して残存しているものはなく、隣接する水田遺構の深さと同じである。畦畔の軸線は、大畦畔の1052SXがN-1°-W～N-4°-E、大畦畔に並行する南北の小畦畔で西から1049SXがN-0°-E、1050SXがN-2°-E～N-7°-E、1051SXがN-8°-E、1053SXがN-0°-EW～N-1°-Eにあり、1050SX・1051SXがやや東に振れるが1049SX・1053SXは1052SXと同様にN-0°-EW付近に軸線がある。東西の小畦畔の軸線は、北より1054SXがN-86°-W～N-80°-W、1055SXがN-88°-W～N-83°-E、1056SXがN-88°-W～N-81°-W、1057SXがN-88°-W～N-86°-Wで、平均の軸線はN-84°-W前後にあり、南北の軸線に比べて東に振れる傾向が見られる。

水田遺構の一筆の大きさは、畦畔の軸線の振れと畦畔の間隔が等しくないことから一辺6.4m～15.6m前後の方形・長方形・台形状になっている。以下では各水田遺構について述べる。

1028ST：06区北東隅の北壁沿いに検出したもので、東を1053SX、西を1052SX、南を1054SXに囲まれる。北側は調査区の外に広がり、大きさは東西12.2m、南北3.0m以上を確認できる。埋土は黄褐色細粒砂で、深さは0.12mである。

1029ST：06区東壁沿いに検出したもので、東を1053SX、西を1052SX、南を1055SX、北を1054SXに囲まれる。一筆全体を確認でき、大きさは東西12.8m、南北11.7mの平面やや不整な長方形である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.10mである。

1030ST：06区南東側東壁沿いに検出したもので、東を1053SX、西を1052SX、南を1056SX、北を1055SXに囲まれる。一筆全体を確認でき、大きさは東西12.4m、南北11.0mの平面やや不整な長方形である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.12mである。

1031ST：06区南東隅南壁沿いに検出したもので、東を1053SX、西を1052SX、北を1056SXに囲まれる。大きさは東西12.5m、南北2.0m以上が確認できる。埋土は灰黄色細粒砂で、深さは0.10mである。

1032ST：06区北部に検出したもので、北端部を近代以後の1022ST・1024ST・1021SDにより掘削されており、確認できていないが、東を1052SX、西を1051SX、南を1054SXに囲まれる。北西側が調査区の外に広がるが、大きさは東西13.4m、南北15.5mの平面やや長方形である。埋土はオリーブ褐色細粒砂で、深さは0.14mである。

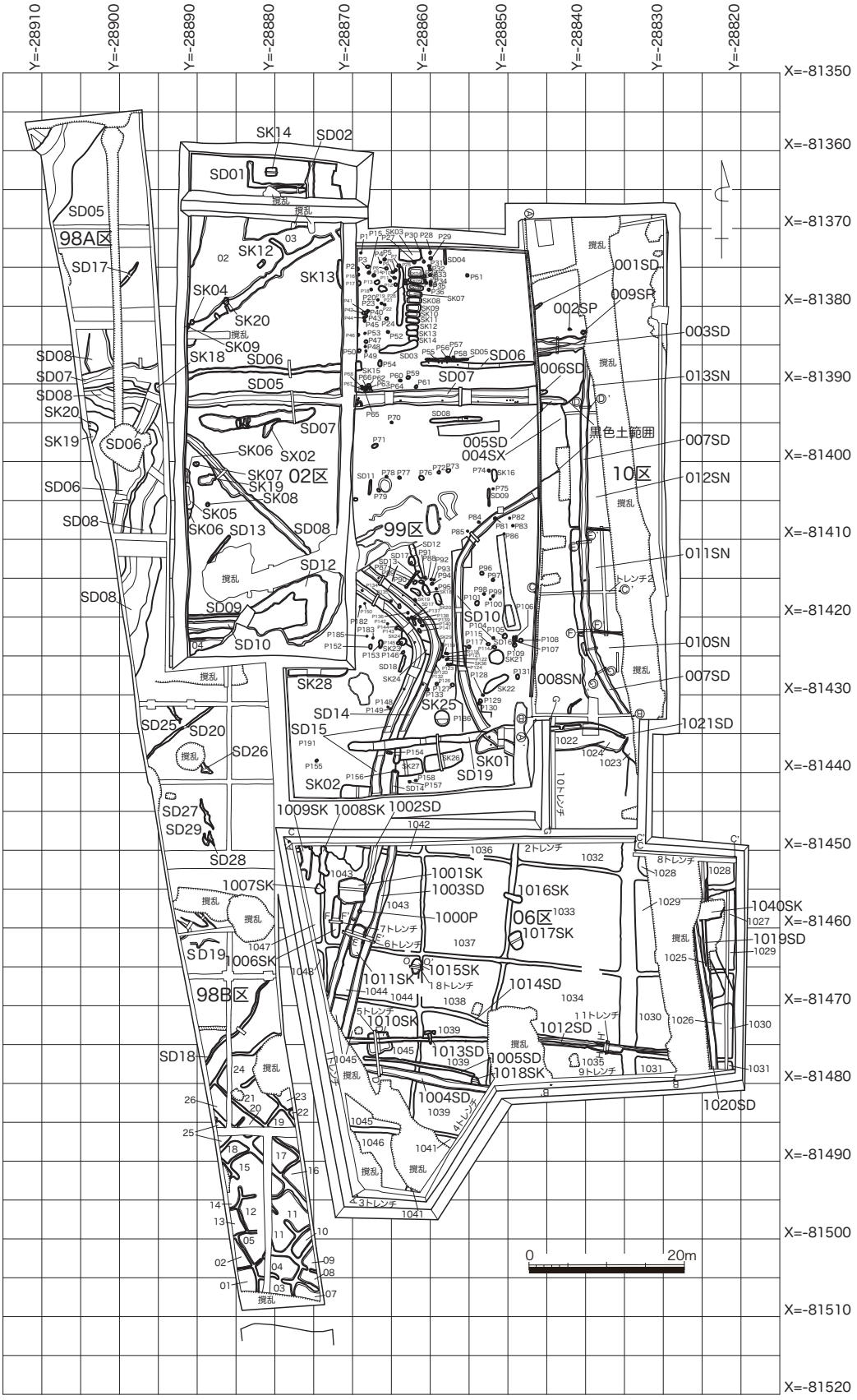


図 14　98A 区・98B 区・99 区・02 区・06 区 1 面・10 区 1 面遺構図（1：800）

1033ST：06区中央部に検出したもので、東を1052SX、西を1051SX、南を1055SX、北を1054SXに囲まれる。一筆全体を確認でき、大きさは東西14.0m、南北12.4mの平面やや不整な長方形である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.11mである。

1034ST：06区中央部南側に検出したもので、東を1052SX、西を1051SX、南を1056SX、北を1055SXに囲まれる。一筆全体を確認でき、大きさは東西15.7m、南北8.7mの平面やや不整な長方形である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.08mである。

1035ST：06区中央部南壁沿いに検出したもので、東を1052SX、西を1051SX、北を1055SXに囲まれる。南側は調査区の外にひろがり、大きさは東西16.8m、南北4.4m以上である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.12mである。

1036ST：06区北壁西側沿いに検出したもので、東を1051SX、西を1050SX、南を1054SXに囲まれる南端部を検出したのみで、大部分が06区の北の外にひろがる。大きさは東西10.1m、南北2.0m以上である。埋土は黄褐色細粒砂で、深さは0.10mである。

1037ST：06区北西側で検出したもので、東を1051SX、西を1050SX、南を1055SX、北を1054SXに囲まれる。一筆全体を確認でき、大きさは東西10.6m、南北12.5mの平面ほぼ長方形である。埋土は黄褐色細粒砂で、深さは0.08mである。

1038ST：06区中央部西側に検出したもので、東を1051SX、西を1050SX、南を1056SX、北を1055SXに囲まれる。一筆全域を確認でき、大きさは東西9.5m、南北7.0mの平面やや東西に長い台形である。埋土は黄褐色細粒砂で、深さは0.08mである。

1039ST：06区中央部南壁沿いに検出したもので、一部を撹乱で確認できていないが、東を1051SX、西を1050SX、南を1057SX、北を1056Xに囲まれる。南東隅部が調査区の外に広がるが、大きさは東西8.6m、南北14.7mである。埋土は灰黄色細粒砂で、深さは0.11mである。

1041ST：06区南隅に検出したもので、西を1050SX、北を1057SXに囲まれる、大部分を撹乱で削平されており、06区の南東の外にひろがる。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.06mである。

1042ST：06区北壁西側沿いに検出したもので、東を1050SX、南を1054SX、に囲まれる南東隅部を検出したのみで、大部分が06区の北の外にひろがる。大きさは東西6.0m以上、南北1.0m以上である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.12mである。

1043ST：06区北西隅部に検出したもので、東を1050SX、西を1049SX、南を1054SX、北を1055SXに囲まれている、北西隅部が06区の北の外にひろがる。大きさは東西12.0m、南北12.2mである、平面形はやや不整な正方形である。埋土は灰黄褐色細粒砂で、深さは0.10mである。

1044ST：06区西側に検出したもので、西を1049SX、東を1050SX、北を1055SX、南を1056SXに囲まれている、ほぼ一筆全域が検出された。大きさは東西11.7m前後、南北6.4mで、東西に長い台形状になる。埋土は灰黄色細粒砂で、深さは0.12m前後である。

1045ST：06区西壁沿いに検出したもので、東を1050SXと北を1056SX､南を1057SXに囲まれている。南西側を撹乱で消失しているが、大きさは東西15.6m前後、南北15.6m以上で、南西側が06区の南西の外にひろがる。埋土は灰黄褐色細粒砂で、深さは0.18m前後である。

1046ST：06区南西隅部に検出したもので、東を1050SXと北を1057SXに囲まれている。半分程撹乱で消失しているが、大きさは南北7.2m以上で、06区の南西の外にひろがる。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.10m前後である。

1047ST：06区北西隅部に検出したもので、東を1049SX、南を1055SXに囲まれた中にある。大きさは東西3.2m以上、南北12.4m以上で、大部分は06区の北西の外にひろがる。埋土は暗灰黄色細粒砂で、深さは0.14mである。

1048ST：06区西壁沿いに一部検出しただけのもので、1049SXと1055SXに囲まれている。大きさは東西3.2m以上、南北12.4m以上で、大部分は06区の西の外にひろがる。埋土は灰黄褐色細粒砂で、深さは0.12mである。

第5節　中世から近代にかけての遺構

(図14)

1面の遺構検出面で、中世から近代にかけての遺構で、溝11条（06区1002SD～1005SD・1012SD～1014SD・1019SD～1021SD、10区001SD・

003SD・005SD ～ 007SD)、水田遺構8筆（06区1025ST ～ 1027ST、10区008SN・010SN ～ 013SN)、畦畔1条（2578SX)、土坑14基（06区1000P・1001SK・1006SK ～ 1011SK・1016SK ～ 1018SK、10区002SP・009SP）がある。また10区2面で調査した自然流路201NRもこの時期の遺構である。

○中世の方形土坑

中世の方形土坑と考えられる埋土が斑土状になるものが3基ある。

06区1006SK：06区北西側の1043SKの上に検出された平面長い楕円形の土坑で、長径5.4m、短径1.1m、深さ0.05mの断面皿状のものである。埋土は灰黄褐色細粒砂に灰オリーブ色シルトが混じる斑土である。出土遺物はなかった。

06区1010SK：06区南西側の1045STの上に検出された土坑で、1012SDにより古い。平面不整な正方形で断面平底のもので、長径3.2m、短径2.7m、深さ0.10mをはかる。埋土は暗灰色細粒砂にオリーブ褐色細粒砂が小ブロック状に混じる斑土であった。出土遺物はなかった。

06区1011SK：06区北西側の1043ST・1044STの上に検出された平面長い楕円形の土坑で、06区1002SD・1003SDより古い。断面は皿状の平底で、長径4.2m、短径1.5m、深さ0.10mをはかる。埋土は灰黄褐色細粒砂に灰オリーブ色シルトが混じる斑土であった。出土遺物はなかった。

○その他の土坑

06区1007SK・1008SK・1009SK：06区北西隅の1043ST・1047STの上に検出された土坑で、埋土は暗灰黄色シルトに灰黄褐色細粒砂が混じる斑土であった。1007SKは長径1.4m、短径1.2m、深さ0.08mの平面不整な三角形、1008SKは長径4.0m、短径0.7m、深さ0.08mの平面不整形なもの、1009SKは長径4.5m、短径1.5m、深さ0.09mの平面不整形なものであった。埋土と平面形や断面浅い皿状になる形態から、上層からの落ち込み状のものと考えられた。

06区1016SK・1017SK・1018SK：1016SK・1017SK・1018SKは平面不整楕円形、断面皿状平底の土坑で、埋土は1016SKが灰黄褐色シルト、1017SKが黄褐色細粒砂、1018SKが灰黄褐色シルトであった。1016SK・1017SKが06区1051SXの上から掘り込まれた平面不整楕円形の土坑で、1018SKは06区1039ST上に掘られ、1004SDより古い土坑である。1016SKは長径2.5m、短径1.0m、深さ0.18mの平面不整な三角形、1017SKは長径2.3m、短径1.7m、深さ0.05m、1018SKは短径1.0m、深さ0.05mであった。

○水田遺構

06区1025ST ～ 1027ST・2578SX：1025ST ～ 1027ST・2578SXは古代の水田遺構1029ST・1030STの上にある水田遺構で、1025ST ～ 1027STは2578SXの東西に伴う耕作土層である。2578SXは幅1.0mで、南北の軸線がN-34°-Wと真北から西に振れる。1025ST ～ 1027STは全体を検出できておらず、一筆の大きさは不明であるが、深さ0.07m、埋土は浅黄色細粒砂であった。

06区1022ST・1023ST・1024ST：06区の北端部で検出した水田遺構で、東西の溝1021SDより古く、1022STの西側は99区SK01に続く遺構と考えられる。平面の規模は不明であるが、深さは0.2m ～ 0.3m前後で、埋土は暗灰黄色シルトであった。

10区010SN・011SN・012SN・013SN：10区中央部から東側に確認された水田遺構で、幅0.3m前後のほぼN-90°-EWにのびる畦畔により区画される。011SNが南北12.8m、012SNが南北14.4mで、010SNは06区1022ST ～ 1024STと同一の遺構の可能性がある。出土遺物には近世末以後の陶磁器があり、10区007SDより古い。

○溝

06区1002SD・1003SD：06区西側を北北東から南南西に流れる溝で、1002SDは02区SD08・99区SD15から続き、1003SDは99区SD14から続く並行する。既報告では、中世の遺物が出土することから、中世の同時期に機能した溝と報告されたが、今回の調査により、1002SDが1003SDより新しいことが明らかになった。これらの溝は中世の方形土坑1011SKより新しいこと、1002SDより江戸時代後期以後の緑釉急須（E012）が出土したことから、江戸時代後期以後の水田遺構に伴う溝と考えられる。1002SDは幅1.2m、深さ0.7m前後、断面丸底で埋土は黄灰色細粒砂を主体とするもの、1003SDは幅1.2m、深さ0.3m前後、断面丸底で埋土は暗灰黄色細粒砂を主体とするものであった。

06区1019SD・1020SD・10区007SD：10区の

中央部から 06 区の東端部に流れる溝で、10 区 007SD と 06 区 1019SD・1020SD は溝の位置や軸線から同一の溝と考えられるものである。1020SD が 1019SD より新しく、溝の掘り直しの痕跡と推定できる。06 区 1019SD は幅 0.5m、深さ 0.2m、06 区 1020SD と 10 区 007SD は幅 1.0m 前後、深さ 0.2m ～ 0.3m 前後である。埋土は 06 区 1019SD・1020SD が暗灰黄色細粒砂、10 区 007SD が黄灰色～灰色の粘土であった。

06 区 1004SD・1005SD：06 区の南側を東西に並行する溝で、1004SD が幅 1.0m、深さ 0.27m、1005SD が幅 0.5m、深さ 0.13m の断面丸底であった。埋土は 1004SD が暗灰黄色細粒砂、1005SD が暗灰色細粒砂にオリーブ褐色細粒砂の少量入る斑土であった。

06 区 1012SD：06 区の南側をほぼ東西にながれる溝で、幅 0.4m、深さ 0.05m の断面丸底、埋土は黄灰色細粒砂であった。この溝は 1020SD の東側では検出されなかった。

10 区 1021SD：06 区北端部に東西に流れる溝で、1022ST ～ 1024ST より新しく、1024ST の東側で溝底が立ち上がって途切れる。幅 1.1m、深さ 0.72m の断面丸底で、埋土は暗灰黄色シルトである。

10 区 003SD：10 区北西側で確認できた東西の溝で、何度かの掘り直しがあるようであるが、幅 1.0m、深さ 0.4m 前後、埋土は上部が暗灰色粘土、下部が灰白色粘土である。

10 区 005SD・006SD：10 区 003SD の南 4m にある東西の溝で、西は 02 区 SD05・99 区 SD07 と続く。005SD は幅 0.6m、深さ 0.08m、006SD は 1.0m、深さ 0.2m である。どちらも断面丸底で、埋土は黄灰色粘土と灰白色粗粒砂が互層になるものであった。

○自然流路

10 区 201NR：10 区中央部から東側にある南北方向の流路で、06 区にはのびない。東西幅は 13m 以上で、西から東に傾斜しており、調査区東側で標高 2.65m より深くなる。埋土は上層が灰色・黄灰色・黄灰褐色・褐灰色の比較的明るい色調の粘土で、下層は上層より暗い灰色・暗オリーブ灰色シルトの堆積であった。中世の南部系陶器の碗（E084）と北部系陶器の碗（E086）・小皿（E085）が出土しており、出土した木材の放射性炭素年代測定分析結果による年代も中世にはいるものであった（添付 CD 掲載の放射性炭素年代測定分析結果を参照）。

第３章　出　土　遺　物

第１節　遺物の出土状況

今回の発掘調査では、コンテナに 11 箱の出土遺物があり、弥生時代から近代にいたるものまでがある。出土遺物には土器・陶磁器、石製品、鉄製品、木製品がある。これらの分類後、不完全ではあるが発掘調査でみつかった遺構の時期や性格を考えるために、土器・陶磁器について弥生土器、古式土師器、須恵器、古代土師器、灰釉陶器、南部系陶器、北部系陶器、中世土師器皿、中世土師器鍋類、古瀬戸陶器、大窯陶器、常滑産甕、白磁、近世陶磁器、近世土師器、近代・現代陶磁器、いぶし瓦に分類し、それらの出土破片点数を各遺構・出土層位毎にカウントした（添付 CD に掲載してある表「伝法寺野田遺跡遺物出土状況」を参照）。

その結果、時期の判明するものは、弥生土器 940 点、古式土師器 55 点、須恵器 55 点、古代土師器 22 点、灰釉陶器 17 点、南部系陶器 84 点、北部系陶器 70 点、中世土師器皿類 22 点、古瀬戸陶器 2 点、大窯陶器 2 点、常滑産甕 2 点、中世土師器鍋類 4 点、白磁 1 点、布目瓦 1 点、近世陶磁器 173 点、近世土師器 20 点、近代以後陶磁器 11 点、いぶし瓦 9 点がある。出土点数の多いものから、弥生土器が全体の約 64.3％、近世陶磁器が約 11.8％、中世の南部系陶器が約 5.7％、北部系陶器が約 4.8％と続く。出土遺構と層位の傾向では、トレンチと撹乱から出土したものを除くと、1 面の古代以後の遺構とその遺構検出時（検出 1）の出土遺物には、弥生土器を少数含むものの、古墳時代以後の土師器・須恵器・灰釉陶器・南部系陶器・北部形陶器・近世陶磁器などが多く出土したが、2 面と 3 面の遺構とその遺構検出時（検出 2・検出 3）の出土遺物では、弥生土器が主体であり、古墳時代以後のものは極少量であった。

第２節　06 区の出土土器・陶磁器
(図 15 ～図 17・写真図版 11 ～写真図版 13)

遺構からの出土遺物と特徴のある遺物を中心に 63 点を図化した（図 15 ～図 17）。

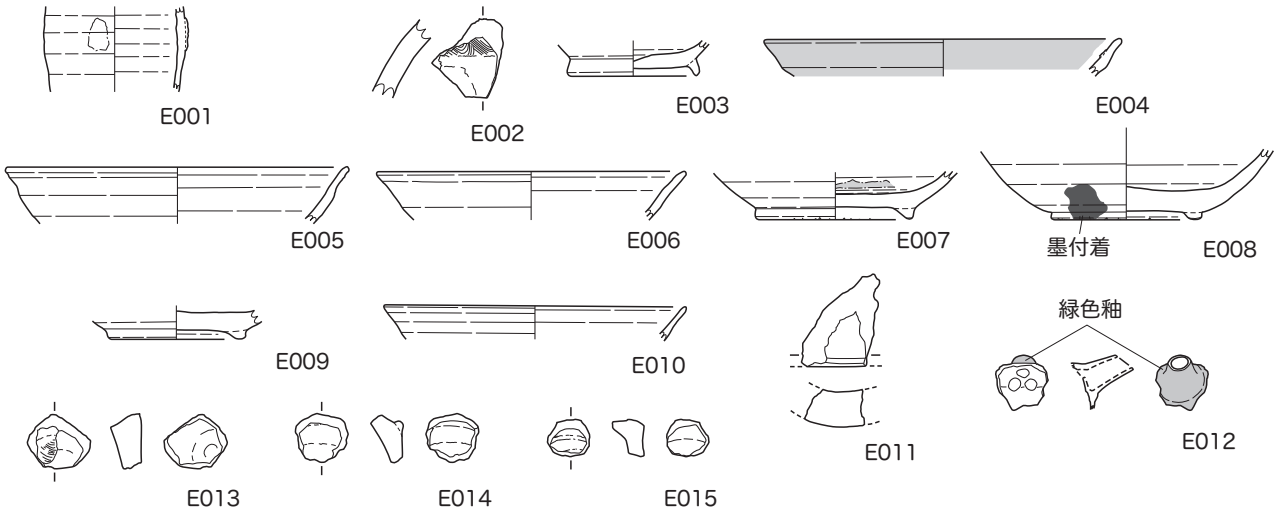
1001SK（E001）：E001 は近世末の灰釉徳利の体部片で、体部径 3.6cm をはかる。

1002SD（E002 ～ E015）：E002 は須恵器の甕で、外面に櫛描波状文がみられる頸部片と思われるもの。E003 は内湾する高台が付く灰釉陶器の碗で、高台径 6.7cm をはかる。E004 ～ E009 は南部系陶器の碗で、口縁部径は E004 が 18.8cm、E005 が 18.0cm、E006 が 16.2cm で、高台部径は E007 が 8.0cm、E008 が 7.6cm、E009 が 6.7cm をはかる。E004 の内面に灰釉がみられ、E008 の外面に二次被熱による煤が付着している。E011 は丸瓦の下端部で、厚み 1.9cm である。内・外面ともナデ調整されており、外面の一部にいぶしたあとがみられることから、中世末～江戸前期頃のものと思われる。E012 は近世後期以後の緑釉急須の注ぎ口部で、注ぎ口部の長さは 2.2cm、径 1.25cm である。E013 ～ E015 は南部系陶器の碗の底部を転用した加工円盤で、E013 が長径 3.2cm、短径 2.8cm、E014 が長径 3.0cm、短径 2.7cm、E015 が長径 2.4cm、短径 2.0cm をはかる。E015 は側面が摩滅しており、研磨痕の可能性がある。

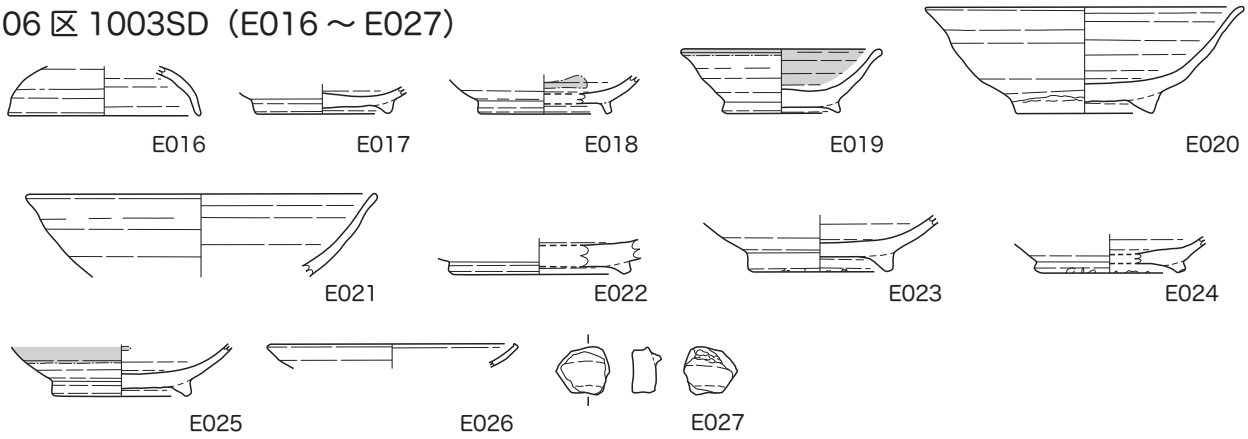
1003SD（E016 ～ E027）：E016 は 7 世紀の須恵器の杯蓋と思われるもので、口縁部径 10.0cm をはかる。E017・E018 は灰釉陶器の碗で、E017 は高台の断面が三角形に近い内湾するもので、高台部径 7.0cm、E018 は内湾する高台で、高台部径 6.6cm をはかる。E019 ～ E025 は南部系陶器である。E019 は外面の口縁部から内面にかけて灰釉のみられる小碗で、口縁部径 10.4cm、高台部径 6.0cm、器高 3.4sm である。E020 ～ E025 は碗で、E020 は断面三角形の比較的しっかりした高台があるもので、口縁部径 16.7cm、高台部径 7.2cm、器高 5.6cm をはかる、E021 は口縁部径 18.5cm、E022 は高台部径 9.0cm、E023 は高台部径 7.3cm、E024 は高台部径 7.0cm、E025 は高台部径 6.8cm である。E026 は北部系陶器の碗で、外面にヌタ痕がみられ、口縁端部が内側につままれている、口縁部径 13.0cm の小型の薄手のものである。E027 は南部系陶器の碗の底部を転用した加工円盤で、長径 2.8cm、短径 2.4cm である。

1004SD（E028）：E028 は灰釉陶器の甕と思われる

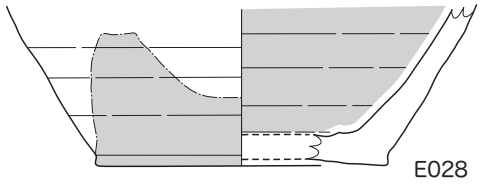
06区 1001SK（E001） 06区 1002SD（E002～E015）



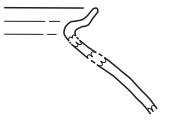
06区 1003SD（E016～E027）



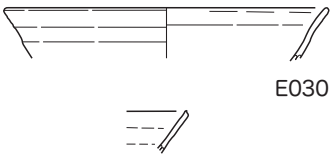
06区 1004SD（E028）



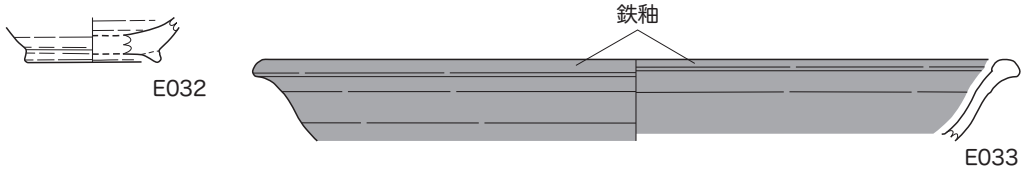
06区 1015SK（E029）



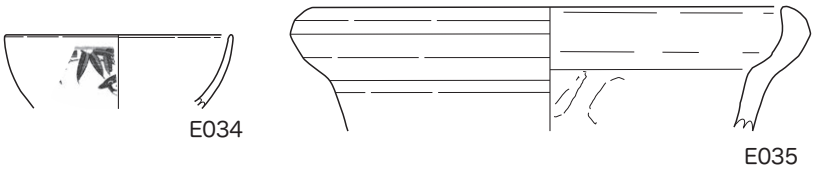
06区 1019SD（E030・E031）



06区 1020SD（E032・E033）



06区 1021SD（E034・E035）



06区 1022SD（E036）

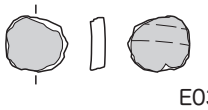




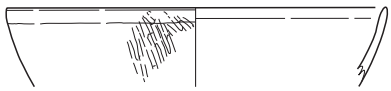
図15　06区出土土器・陶磁器1（1：4）

06 区 1030ST（E037）



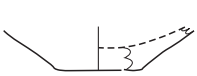
E037

06 区 1038ST（E038）



E038

06 区 1039ST（E039 ～ E041）



E039



E040



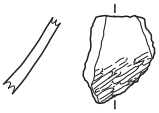
E041

06 区 1052SX（E044）

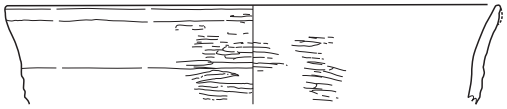


E044

06 区 1040SK（E042・E043）

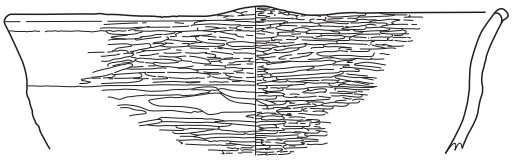


E042



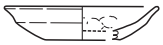
E043

06 区 1156ST（E045）



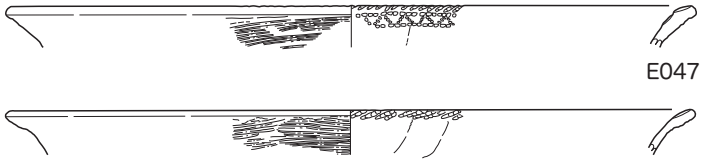
E045

06 区検出 1（E046）



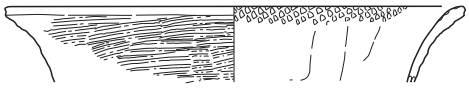
E046

06 区検出 2（E047 ～ E051）

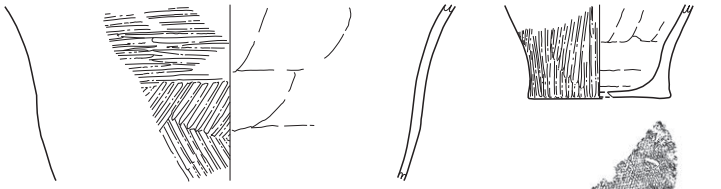


E047

E048



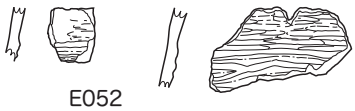
E049



E050

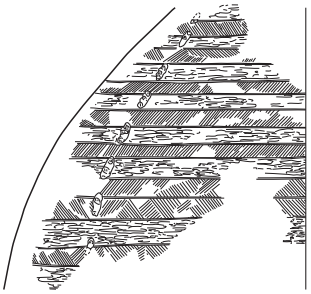
E051

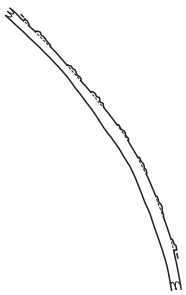
06 区検出 3（E052 ～ E058）



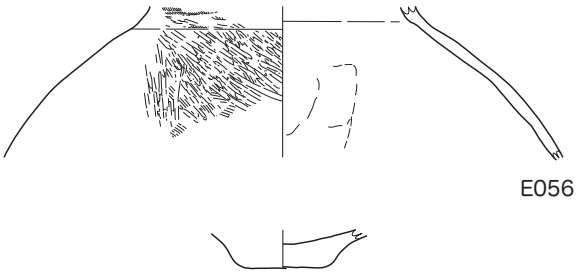
E052

E053



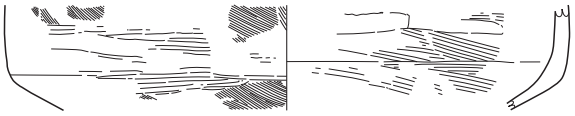


E054

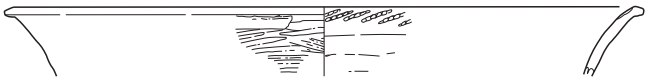


E056

E057



E055



E058

0　20cm

図 16　06 区出土土器・陶磁器 2（1：4）

もので、内・外面にロクロナデ調整がみられる、底部径 15.4cm をはかる。

1015SK（E029）：E029 は古式土師器の有段口縁甕で、廻間 1 式期のものであろうか。古式土師器はこの土坑から出土したものがほとんどで、同一個体のものと思われる。

1019SD（E030・E031）：E030 は内・外面に灰釉がみられる碗で、口縁部径 17.0cm、E031 は北部系陶器の碗の口縁部片である。

1020SD（E032・E033）：E032 は南部系陶器の碗で、高台部径 7.0cm、E033 は近世後期の鉄釉擂鉢で、口縁部径 39.0cm をはかる。

1021SD：（E034・E035）：E034・E035 は近世後期から近代のもので、E034 が磁器の染付碗で口縁部径 12.0cm、E035 が口縁部径 25.0cm 程の内湾する口縁部をもつ素焼きの鉢である。

1022SD（E036）：近世末の灰釉皿を転用した加工円盤で、長径 3.2cm、短径 2.8cm、厚み 0.8cm をはかる。

1030ST（E037）：弥生時代中期中葉後半の弥生土器の甕で、内・外面にハケ調整がみられる、口縁部が外反しておわるもので、口縁端部下端に刻みがみられる。口縁部径 18.0cm をはかる。

1038ST（E038）：古式土師器の高杯で、口縁部が内湾しておわるもの、口縁部径 20.0cm で外面にミガキ調整がみられる。

1039ST（E039 ～ E041）：弥生時代中期中葉後半の弥生土器で、E039 は細頸壺の底部、底部径 4.0cm である。E040 は口縁部が外反しておわるハケ調整の甕で、口縁端部下端に刻みがみられる、口縁部径 18.0cm。E041 は高台部径 4.6cm の台付き甕の脚部で、外面にハケ調整がみられる。

1040SK（E042・E043）：弥生前期の弥生土器と思われるもので、E042 は外面にミガキ調整に近いナデ調整がみられる遠賀川式甕の体部片、E043 は口縁部径 26.0cm をはかる浮線文鉢と思われるもの、内・外面にヨコミガキ調整がみられる。E045 と同一個体の可能性がある。

1052SX（E044）：弥生中期中葉後半の弥生土器の細頸壺の底部で、外面にハケ調整がみられる、底部径 6.0cm である。

1056ST（E045）：弥生前期の浮線文鉢で、口縁部がやや山形の波状形態になる。体部は丸く立ち上がる体部中央付近で内側にやや屈折し、口縁部が外反する形態で、体部上側に網状沈線文がみられ、内・外面全体にヨコミガキ調整が施される。口縁部径 26.0cm をはかる。

検出 1（E046）：E046 は中世土師器の小皿で、内・外面をナデ・ヨコナデ調整するもの、口縁部径 8.0cm、器高 1.7cm をはかる。

検出 2（E047 ～ E051）：弥生時代中期中葉後半の弥生土器の櫛条痕調整の深鉢である。外面に櫛条痕調整がみられ、E050 の外面体部にはヨコ羽状櫛条痕調整がみられる。内面はヨコナデ調整で E047 ～ E049 の内面口縁端部際に櫛条痕斜め刺突文があり、E047 は斜め刺突文の下に山形刺突文がみられる。E051 は底部外面に布圧痕がみられる。E047・E048 は口縁部径 36.0cm、E049 は口縁部径 24.0cm、E051 は底部径 7.6cm である。

検出 3（E052 ～ E058）：E052・E053 は弥生前期の浮線文鉢の体部片で、内・外面にヨコミガキ調整がある。外面には、浮線網状文がみられる。E054 ～ E058 は弥生時代中期中葉後半の弥生土器で、E054 ～ E057 は壺、E058 は櫛状痕調整深鉢である。E054 は細頸壺と思われるもので、体部上半外面にハケ調整後沈線直線文を施し、その沈線文間をヨコミガキ調整で磨り消し帯があるもので、その上に刻みのある垂下浮文がみられる。E055 は壺の体部で、外面にハケ調整後にヨコミガキ調整がみられるもの、E056 は太頸壺の体部上半で外面にハケ調整後ミガキ調整がみられる。E057 は細頸壺の底部片、E058 は櫛条痕調整の深鉢で、口縁部径 33.0cm である。

トレンチ（E059・E060）：E059 は素焼きの花文小蓋で、外面に摘みがあり、沈線が放射状にのびる。径 3.1cm、厚み 0.8cm である。E060 は南部系陶器の碗で、底部径 8.0cm をはかる。

撹乱（E061 ～ E063）：E061 は製塩土器の脚部片、E062・E063 は南部系陶器の碗で、E062 は高台部を欠損する。E063 は籾殻圧痕が多数残るつぶれた高台をもつもの、高台部径 7.4cm である。

第 3 節　10 区の出土土器・陶磁器
（図 18・図 19・写真図版 12・写真図版 13）

遺構からの出土遺物と特徴のある遺物を中心に 58

06 区トレンチ（E059・E060）　06 区撹乱（E061 ～ E063）

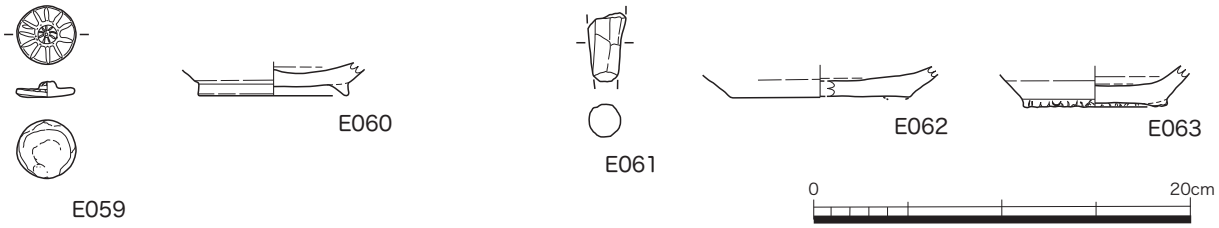
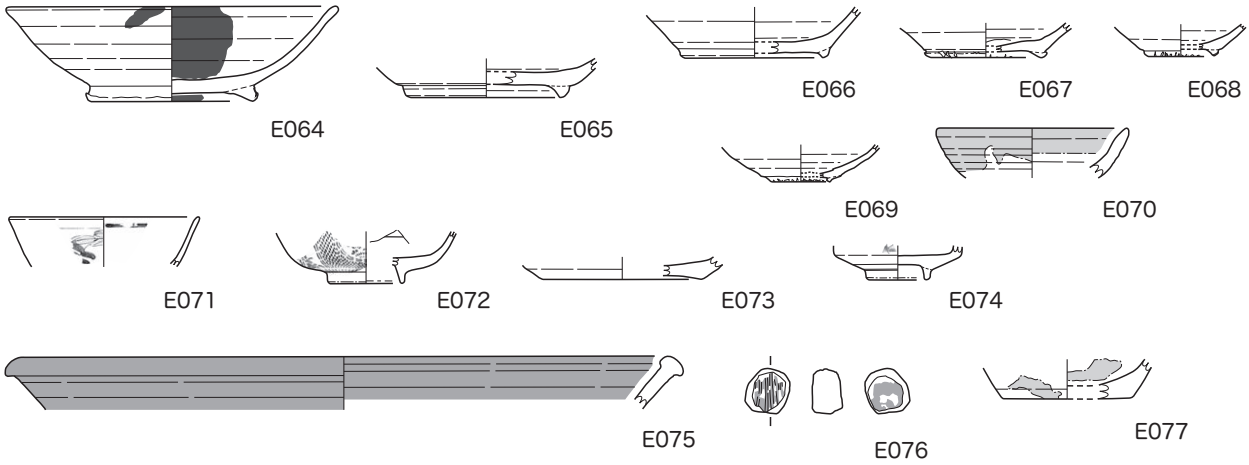
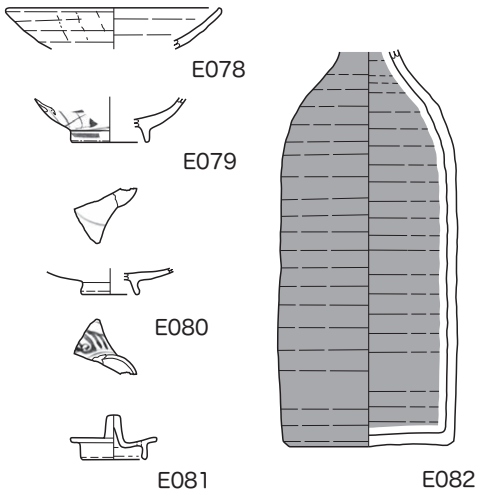


図 17　06 区出土土器・陶磁器 3（1：4）

10 区 005SD（E064・E065）　10 区 007SD（E066 ～ E077）



10 区 011SN（E078 ～ E082）　10 区 012SN（E083）



10 区 201NR（E084 ～ E086）



10 区検出 1（E087 ～ E097）

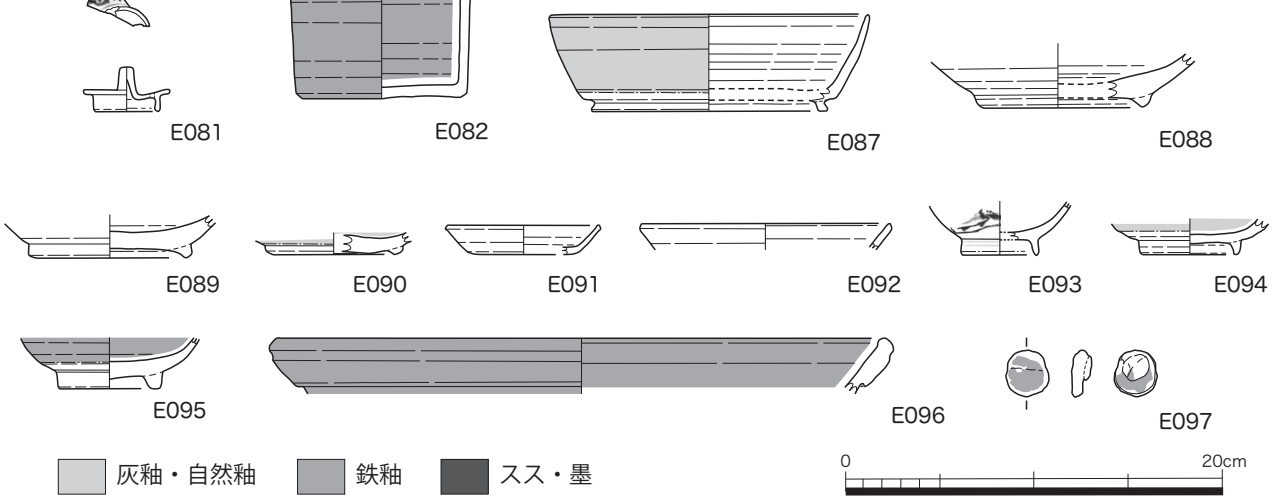


図 18　10 区出土土器・陶磁器 1（1：4）

点を図化した（図 18・図 19）。

005SD（E064・E065）：E064・E065 は南部系陶器の碗で、どちらも比較的しっかりした断面三角形高台が付く。E064 は口縁部径 17.4cm、高台部径 8.5cm、器高 5.0cm、E065 は高台部径 8.0cm をはかる。E064 は内・外面に二次被熱による煤が付着する。

007SD（E066 ～ E077）：E066 は南部系陶器の碗で、高台部径 7.2cm をはかる。E067 ～ E069 は北部系陶器の碗で、高台に籾殻圧痕が多くみられ、不定形な帯状になる。高台部径は E067 が 5.8cm、E068 が 3.5cm、E069 が 3.2cm である。E070 は古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で、口縁部の内・外面に灰釉を付け掛けするもの、口縁部径 10.0cm である。E071 ～ E077 は近世から近代にかけての陶磁器で、E071 は磁器の赤絵碗で口縁部径 10.0cm、E072 は磁器の染付碗で、外面に銅板摺り絵があり、高台部径が 3.8cm、E073 は陶器の灰釉碗で底部径 8.4cm、E074 は体部下半で屈折して口縁部にいたる陶器の染付碗で高台部径 3.2cm、E075 は口縁端部が上・下に広がる端面を形成する鉄釉擂鉢で口縁部径 34.0cm をはかる。E076 は鉄釉擂鉢を転用した加工円盤で、長径 2.5cm、短径 2.2cm、厚み 1.5cm をはかる。E077 は灰釉瓶の底部を転用した砥土器で、側面に研磨痕がみられる。

011SN（E078 ～ E082）：E078 は北部系陶器の碗で、口縁部径 11.0cm の小型のものである。E079 ～ E081 は近世以後の磁器で、E079 が外面に色絵の草文がある高台付きの色絵碗で、高台部径 4.0cm、E080 が内・外面に染付け文が描かれている高台付き染付碗で、高台部径 3.2cm、E081 が上面に柱状の摘みのある鉄釉小蓋で、内面に白色釉、外面に黒色釉を施した近代以後のものである。E082 は内・外面に鉄釉を施した近世後期以後の鉄釉徳利で、底部径 8.4cm。

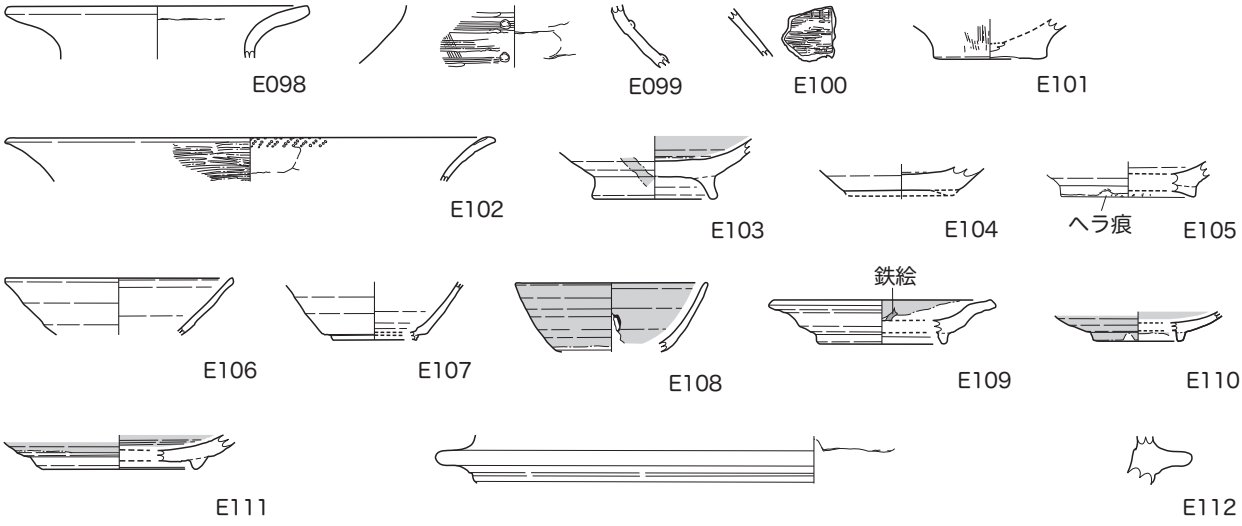
012SN（E083）：近世後期から近代にかけての急須の身で、口縁部径 5.8cm をはかる。色調は灰オリーブ色で、内・外面をロクロナデ調整後、外面に網スタンプ文後沈線波状文を施し、体部下半をヨコナデ調整する。

201NR（E084 ～ E086）：E084 は南部系陶器の碗で断面三角形の高台が付く、高台部径 5.0cm である。E085 は北部系陶器の緻密な胎土をもつ小皿で、口縁部径 8.2cm、底部径 4.9cm、器高 1.0cm をはかる。E086 は北部系陶器の碗で、高台の付かない生田型式のものである。口縁部径 9.8cm、底部径 3.6cm、器高 2.7cm である。口縁部内面と外面底部に煤が付着する。

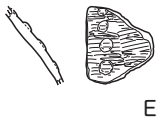
検出 1（E087 ～　E097）：E087 は貼り付け高台の付く須恵器の杯身で、底部から体部が屈曲して立ち上がり、やや丸みをもって口縁部にいたる、口縁部径 16.8cm、高台部径 12.4cm、器高 5.1cm である。E088 ～ E090 は南部系陶器の碗で、高台が断面三角形からやや扁平になった三角形になるものである。高台部径は E088 が 9.0cm、E089 が 7.8cm、E090 が 6.4cm である。E091 は北部系陶器の小皿で、口縁部径 8.0cm、底部径 5.4cm、器高 1.5cm をはかる。E092 は北部系陶器の碗で、口縁部径 13.0cm である。E093 は近代以後の磁器の色絵碗で、外面に黒色絵があり、細身の高台が付く、高台部径 4.0cm である。E094 ～ E097 は近世後期以後の陶器で、E094 が内・外面に灰釉を施した灰釉椀で高台部径 5.0cm の断面やや内湾する細身の高台をもつもの、E095 が内・外面に鉄釉を施した鉄釉碗で高台部径 4.8cm のやや幅がある断面方形状の高台が付く。E096 は口縁部径 32.0cm の鉄釉擂鉢で、口縁部がやや肥厚する。E097 は鉄釉擂鉢片を転用した加工円盤で、側面に研磨痕がみられる、長径 2.4cm、短径 2.2cm、厚み 0.8cm である。

検出 2（E098 ～ E114）：E098 ～ E102 は弥生時代中期中葉後半の弥生土器で、E098 は口縁部径 16.0cm で口縁部が大きくひらく広口太頸壺、E099 が体部上半に櫛描直線文をめぐらし、その上に円形浮文を付ける櫛描文細頸壺、E100 が櫛描文細頸壺の体部片で、櫛描直線文後櫛描垂下波状文を施し、その後擦り消し線文をヨコ帯状にめぐらす、E101 は細頸壺の底部で底部径 5.6cm、E102 は櫛条痕調整の深鉢で、口縁部径 25.0cm のものである。E103 は高台が高く「ハ」の字状にひらく灰釉陶器の深碗で、内・外面に灰釉がみられる、高台部径 6.2cm をはかる。E104・E105 は南部系陶器の碗で、E104 は底部外面に高台の剥離した痕跡が残る、E105 は高台の下端部にヘラの痕がみられる、底部径 7.0cm である。E106・E107 は北部系陶器の碗で、E106 が口縁部径 12.0cm、E107 が高台部径 4.5cm である。E108 ～ E112 は近世後期以後の陶器で、E108 は内・外面に灰釉を施した灰釉椀で、口縁部径 10.0cm、E109 は内面に灰釉と鉄絵がみられる灰釉鉄絵皿で、口縁部径 12.0cm、高台部径 6.6cm、器高 2.3cm をはかる、E110 は内・外面に御深井釉を施した御深井釉皿で、高台部径 4.8cm、E111 は内・外面に灰釉を

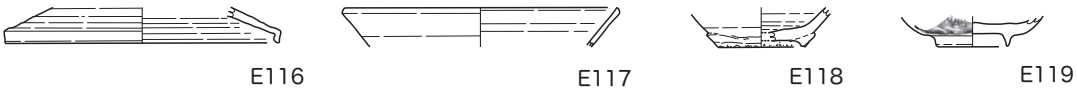
10区検出2（E098～E114）



10区検出3（E115）



10区東側トレンチ（E116～E119）



10区表土掘削（E120・E121）

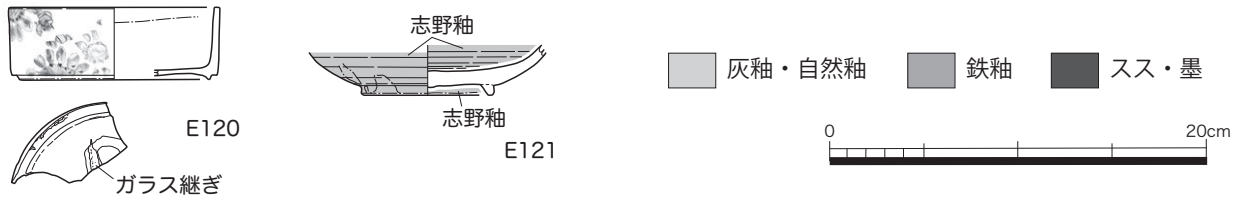


図19　10区出土土器・陶磁器2（1：4）

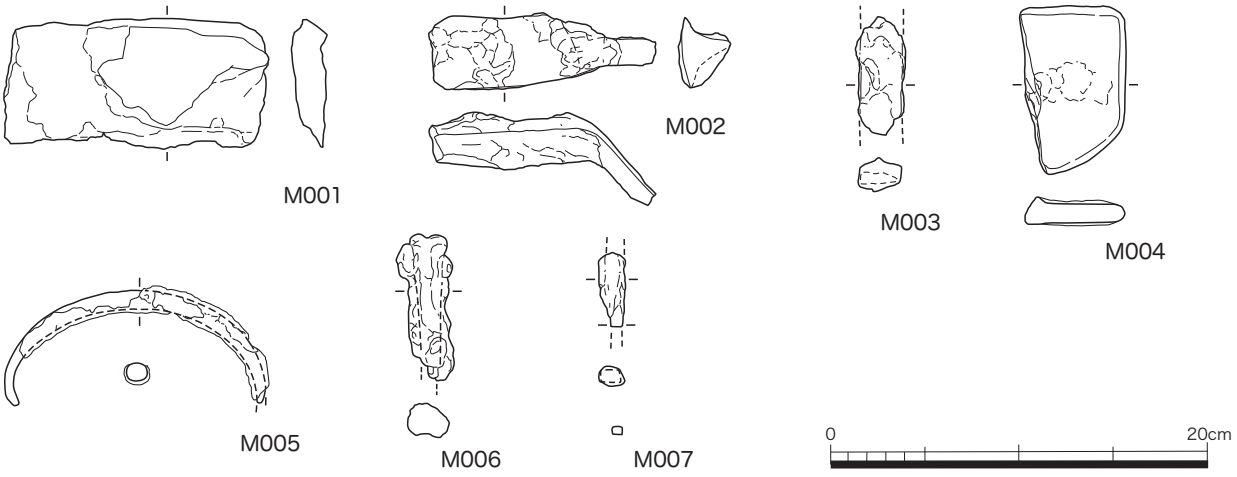


図20　金属製品（1：4）

施した灰釉皿で、高台部径 8.0cm、E112 は内・外面をヨコナデ調整する鍔の部分で、甕の形態になるものか。E113 は口縁部径 29.5cm をはかる近世土師器の焙烙である。E114 は南部系陶器の碗の底部を転用した加工円盤で、長径 2.5cm、短径 2.3cm、厚み 1.0cm である。

検出３（E115）：弥生時代中期中葉後半の弥生土器で、外面に櫛描直線文後ヨコミガキ帯をめぐらし、その上に櫛刺突文を施した円形浮文を付ける細頸壺の体部片である。

東側トレンチ（E116 ～ E119）：E116 は奈良時代の須恵器の杯蓋で、口縁部径 14.4cm をはかる。E117・E118 は北部系陶器の碗で、E117 は口縁部がほぼ直線的にひらく形態で口縁部径 14.4cm のもの、E118 は籾殻圧痕が残る断面不整三角形の高台が付くもので、高台部径 4.2cm をはかる。E119 は近世後期以後の磁器の染付碗で、細い高台が付く、高台部径 3.6cm である。

表土掘削（E120・E121）：E120 は近世後期から近代にかけての磁器の色絵鬢盥で、口縁部径 10cm 前後の楕円形の形状になるものである。底部にガラス継ぎによる補修痕があり、外面体部には花の色絵がみられる。E121 も近世後期以後の志野釉碗で、高台部径 6.6cm である。

第４節　金属製品（図 20・写真図版 13）

溝や水田の遺構から出土した７点の鉄製品を図化した（図 20、M001 ～ M007）。

M001 と M002 は同一個体の可能性のある刃物の可能性のある鉄製品で、出土遺構から近世後期のものと思われる。M003 は断面に残る痕跡から刀子と思われるもので、古代の水田遺構から出土したものである。M004 ～ M007 は、近代以後の水田遺構から出土したもので、M004 は長径 4.5cm、短径 2.7cm、厚み 0.6cm の楔状の板製品である。M005 は断面円形で幅 7.0cm の把手の金具と思われるもの、M006・M007 は断面形状の観察から釘と思われるもので、M006 は先端部を、M007 は基部と先端部を欠損する。

第５節　木製品（図 21・写真図版 14）

板材と杭の５点を図化した（図 21、W001 ～ W005）。

W001 は 06 区の弥生時代中期以前の水田遺構から出土したスギの板材で、幅 3.5cm、厚み 1.2cm のものである。W002・W003 は 10 区の近代以後の溝 007SD から出土したもので、W002 はヒノキの角材で基部が腐って欠損しているが、先端部側の残りは良好で、表面を削った工具痕が残る、先端部側に木釘が斜めに入っている。残存長 70.6cm、幅 3.0cm、厚み 2.0cm である。W003 は片面に刃物痕が多数残るクリの板材で、長方形の形状のようである、残存長 23.4cm、幅 4.0cm、厚み 0.6cm である。W004 は 10 区の中世の河川跡から出土したヒノキの板材で、側面が少し残るものである、残存長 20.8cm、厚み 0.5cm で表面に赤漆の痕跡が少し残る。W005 はヒノキの板状の小材で、厚み 0.5cm である。

第６節　石製品（図 22・写真図版 12・写真図版 13）

弥生時代中期中葉後半の弥生土器に伴うと思われる石製品８点を図化した（図 22、S001 ～ S008）。

S001 ～ S006 は打製石鏃で S001・S004 がチャート製のもの、S002・S003・S005・S006 が下呂石製のものである。S001 は凸基式の平面二等辺三角形のもので、長さ 2.8cm、幅 1.4cm、厚み 0.7cm、重さ 2.3g である。S002 は凹基式の平面二等辺三角形のもので、長さ 1.8cm、幅 1.4cm、厚み 0.4cm、重さ 0.7g である。S003 は凸基式のやや長い平面三角形のもので、先端部を欠損しているが長さ 4.4cm、幅 1.3cm、厚み 0.7cm、重さ 3.7g である。S004 は凸基式の薄く長い三角形のもので、長さ 6.1cm、幅 1.85cm、厚み 0.5cm、重さ 5.8g である。S005 は短い凸基部をもつ平面二等辺三角形のもので、長さ 1.95cm、幅 1.4cm、厚み 0.35cm、重さ 0.8g である。S006 は凹基式の先端部が基部側から屈曲してのびるもので、長さ 2.55cm、幅 1.65cm、厚み 0.3cm、重さ 0.9g である。S007 は濃飛流紋岩の亜円礫を用いた磨石と思われるもので、平坦になる片面が円滑で磨き面になるものと思われる。半分程欠損しているが、長径 13.6cm、厚み 3.8cm である。S008 は濃飛流紋岩を扇状に剥離した粗製剝片石器と思われるもので、基部と思われる側に剥離した箇所が２箇所ある。長径 13.0cm、短径 10.3cm、厚み 2.6cm、重さ 426.8g である。

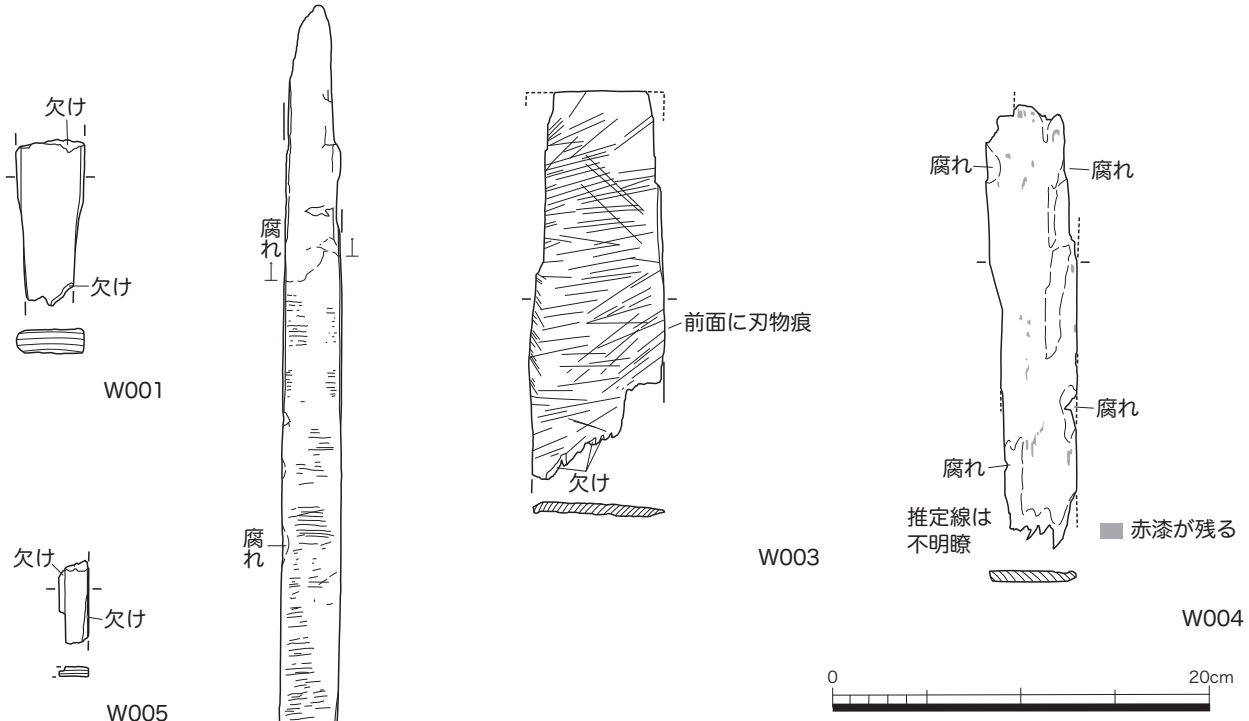


図 21　木製品（1：4）

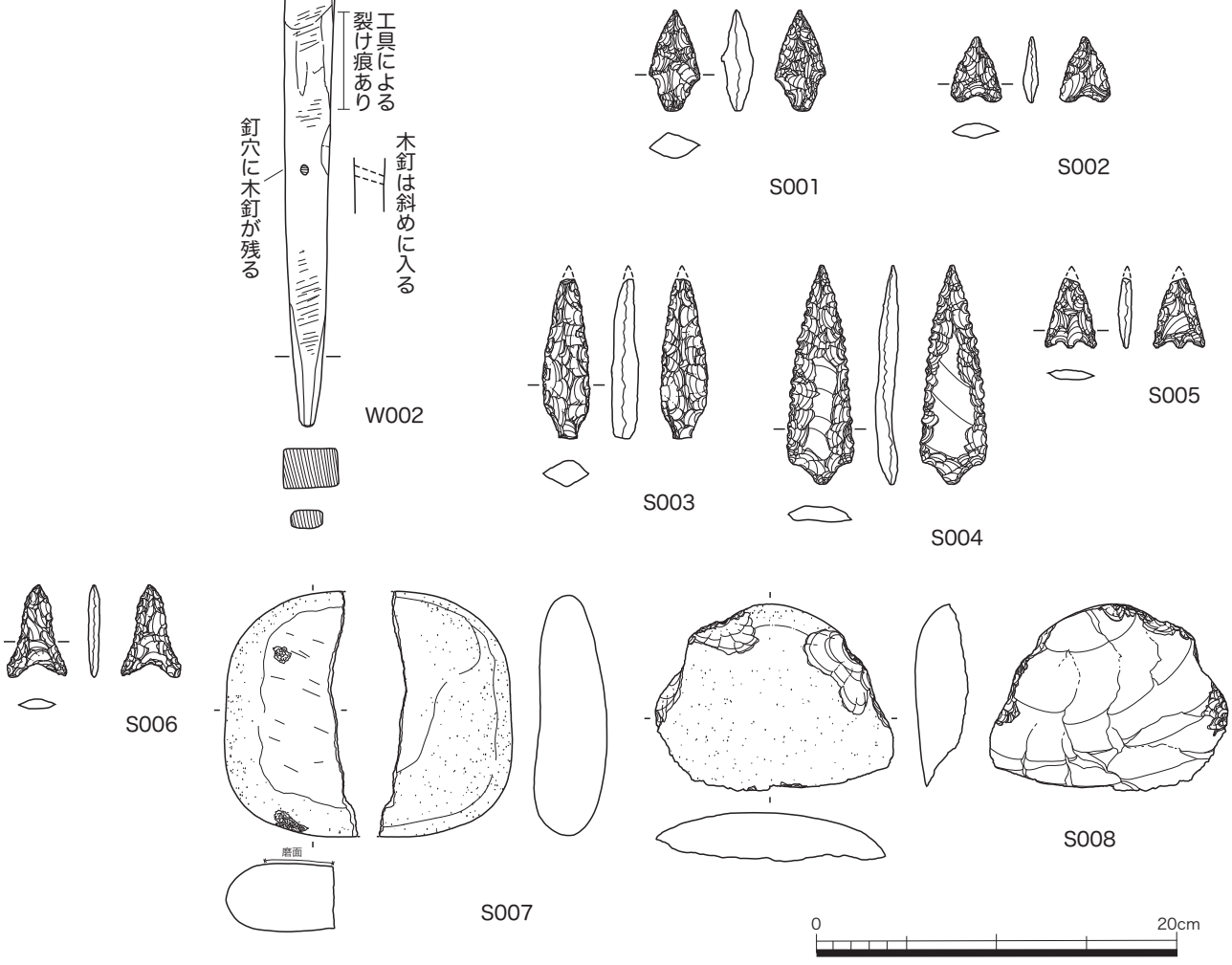


図 22　石製品（1：4）

第４章　愛知県一宮市伝法寺野田遺跡出土土器（主に浮線紋鉢）の胎土に関する報告

永草　康次

第１節　はじめに

2006 年に調査を実施した伝法寺野田遺跡（愛知県一宮市丹陽町）より出土した土器およびその比較試料について、胎土分析の結果を報告する。

分析を行った土器は、伝法寺野田遺跡 2006 年度調査により出土した弥生時代前期の浮線紋鉢３点（弥生時代前期）、櫛条痕深鉢１点（弥生時代中期中葉後半）、櫛描文細頸壺１点（同）の計５点、それに加え、春日井市教育委員会のご厚意で提供いただいた、松河戸遺跡（春日井市松河戸町）の同時期の土器 12 点である（表2・図 25）。この松河戸遺跡出土土器には、永草 (2013) で報告した町屋遺跡出土土器との比較試料３点を含んでいる。松河戸遺跡の土器胎土の考察には、この町屋遺跡関連資料３点も再度記載し併せて検討する。

伝法寺野田遺跡は五条川右岸に位置し、付近には多くの同時期の遺跡が所在する。過去筆者らによって胎土分析・報告をしている猫島遺跡（同市）や町屋遺跡（同市千秋町）、あるいは継続して特に多くの胎土分析を実施してきた朝日遺跡（清洲市他）などともさほど遠くない。特に永草 (1992) では、今回の分析土器と時期の重なる、朝日遺跡を含む県内外の出土資料について分析をしており、直接の比較が可能である。

これら比較資料も含む土器の考古学的な評価は、本報告書の編集責任者である蔭山誠一氏にいただいた。

第２節　分析の方法

分析の方法は、１試料に対し、実体顕微鏡による土器表面の観察と、偏光顕微鏡による土器試料から作成したプレパラートの観察の２方法である（Ｅ－０５２を除く）。過去筆者により実施している２方法で、詳細は池本・永草・楯 (1990a) を参照していただきたい。

第３節　分析結果

以下に、各試料の分析結果を記載する。ここでは、報告済みであるが町屋遺跡関連の松河戸遺跡出土土器の記録も同時に掲載する（表２～表５・図 23 ～図 25）。

（１）伝法寺野田遺跡出土土器

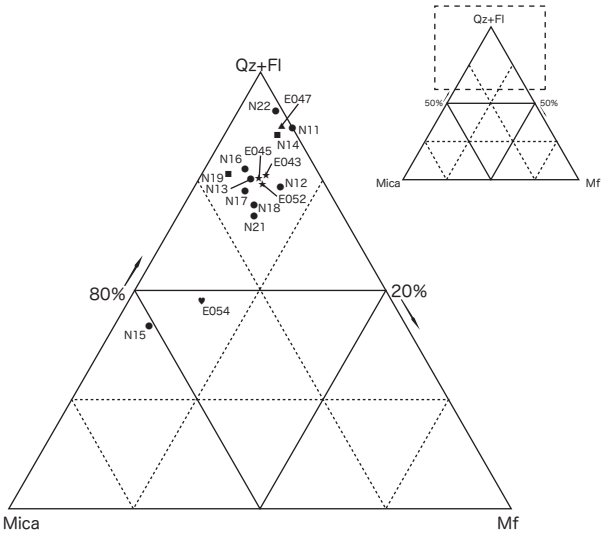
①Ｅ－０４３

表面観察において、岩片・鉱物とは別に特徴的にいわゆる海綿骨針と呼ばれる生物起源と考えられる粒子が数多く観察できた。過去分析をしている土器にも、海綿骨針は含まれることがあるが、計数した土器面以外も含めそれらと比較してもよく目立つ。

偏光顕微鏡下では、花崗岩や堆積岩類が見られ、か

表２　胎土分析一覧

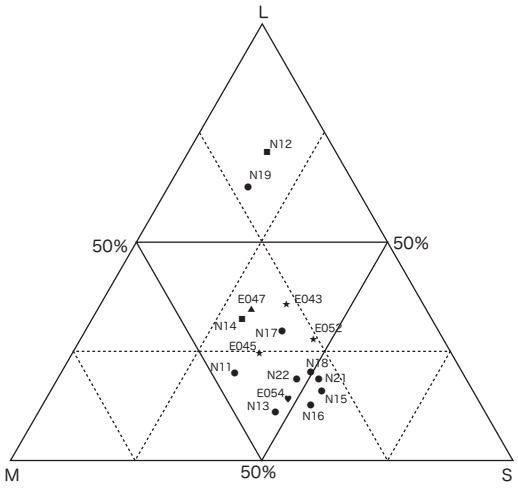
試料番号	調査区	グリッド	遺構名・出土位置	層位　No.	取上げ日	器種	時期など
E043	伝法寺野田06	5B13g	1040SK	-	061222	浮線文鉢口縁部	弥生時代前期
E045	伝法寺野田06	5B15g	1156ST	検出3,褐色土	070129	浮線文鉢口縁部	弥生時代前期
E047	伝法寺野田06	5B8I	検出2	-	061208	櫛条痕深鉢口縁部	弥生時代中期中葉後半
E052	伝法寺野田06	5B14g	検出3	褐色土	070131	浮線文鉢口縁部	弥生時代前期
E053	伝法寺野田06	5B15g	検出3	褐色土	070131	浮線文鉢体部	弥生時代前期
E054	伝法寺野田06	5B9m	検出3	黒褐色土,29	070209	櫛描文細頸壷体部	弥生時代中期中葉後半
N11	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	壺口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N12	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	壺口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N13	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	壺口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N14	松河戸安賀B		SD44			条痕文系壺肩部	弥生時代前期、貝殻条痕
N15	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	甕口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N16	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	甕口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N17	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	甕口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N18	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	甕口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
N19	松河戸安賀D	F14・F15	SD75 3層(III区)	南溝部	970910	条痕文系深鉢底部	弥生時代前期、貝殻条痕か？
N20	松河戸安賀D		SD75			壺肩部	弥生時代前期、遠賀川式古いタイプ
N21	松河戸安賀D		SD75			壺肩部	弥生時代前期、遠賀川式古いタイプ
N22	松河戸安賀D		SD75			壺肩部	弥生時代前期、遠賀川式古いタイプ



（Qz+Fl：無色鉱物、Mica：雲母、Mf：雲母以外の有色鉱物）

★: 伝法寺野田遺跡浮線文鉢（E043・E045・E052）
▲: 伝法寺野田遺跡櫛条痕深鉢（E047）
♥: 伝法寺野田遺跡櫛描文細頸壷（E054）
●: 松河戸遺跡遠賀川式土器（N11・N13・N15～N19・N21・N22）
■: 松河戸遺跡条痕文系土器（N12・N14）

図 23　主要鉱物三角ダイヤグラム
（N-12 に関しては、粗粒砂礫の脱落により、計数が 200 粒に達していない。）



★: 伝法寺野田遺跡浮線文鉢（E043・E045・E052）
▲: 伝法寺野田遺跡櫛条痕深鉢（E047）
♥: 伝法寺野田遺跡櫛描文細頸壷（E054）
●: 松河戸遺跡遠賀川式土器（N11・N13・N15～N19・N21・N22）
■: 松河戸遺跡条痕文系土器（N12・N14）

図 24　粒径三角ダイヤグラム
（N-12 に関しては、粗粒砂礫の脱落により、計数が 200 粒に達していない。）

つ尾張平野西部の土器胎土に普遍的に含まれるチャート、また同地域の胎土の特徴ともいえる火山岩や輝石類が見られないなど、尾張平野の土器胎土とは傾向が異なる。

②Ｅ－０４５

Ｅ－０４３と同様に、海綿骨針が含まれる。組成もＥ－０４３に類似する。

③Ｅ－０４７

部位によりばらつきがあるが、他土器に比べ長石が多い。また偏光顕微鏡下でもチャートが目立つなど、尾張東部 (庄内川流域か) に近い。

④Ｅ－０５２

この試料のみ、プレパラート化がかなわず、表面観察のみの分析である。

表面観察では、Ｅ－０４３, ０４７とよく類似する。

⑤Ｅ－０５４

表面観察でも、また偏光顕微鏡観察でも、尾張西部の土器の特徴を備えている。しかし雲母の含有量が他試料に比べ高い。

(2) 松河戸遺跡出土土器

①Ｎ－１１

径 2mm を越える大型の砂礫を含むが、それ故に砂礫脱落が激しい。

表面観察では一見尾張西部の土器に近い特徴を有するが、偏光顕微鏡下では火山岩類および輝石が観察できず、チャートが優占し花崗岩が伴う点は、むしろ出土遺跡周辺の胎土と同傾向である。

②Ｎ－１２　町屋遺跡報告試料

粗粒砂礫の脱落が特に激しく、実体顕微鏡観察の基準としている 200 粒に達していない。土器表面には粗粒で円磨度の高いチャートが目立つ。一方偏光顕微鏡下では火山岩が認められ、尾張西部の砂礫組成に共通の特徴を持つ。

③Ｎ－１３

部位により砂礫量に差があり、口縁に近いほど粗粒砂礫が多くなる傾向がある。やはり、表面観察では尾張西部の土器に類似するが、やはり火山岩起源の砂礫は見られない。全体に若干花崗岩の影響が大きいようである。

④Ｎ－１４　町屋遺跡報告試料

土器表面に花崗岩起源と思われる長石粒が多い。町屋遺跡の分析でも報告したとおり、庄内川上流域との関連を伺わせる。

③Ｎ－１５

砂礫の粒径は、他試料と比べ細粒であり、素地も緻密な質感を与える。

表３　実体顕微鏡観察結果１

E043	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	13	1	2	0	0	0			3	19	骨針	
M	22	5	5	0	0	0				32		
S	136	15	2	0	11	0			5	169	視野数	１視野平均
合計	171	21	9	0	11	0	0	0	8	220	9	24.44444444

E045	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	5	0	2	0	0		1			8	骨針	
M	29	0	4	0	1				2	36		
S	130	10	4	0	8				4	156	視野数	１視野平均
合計	164	10	10	0	9	0	1	0	6	200	13	15.38461538

E047	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	9	2	0	0	0			1		12		
M	16	10	0	0	0				1	27		
S	58	29	1	0	6					94	視野数	１視野平均
合計	83	41	1	0	6	0	0	1	1	133	10	13.3

E052	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	10	0	0	0	0	0			1	11	骨針	
M	17	0	5	0	1	0				23		
S	126	22	5	0	9	0			7	169	視野数	１視野平均
合計	153	22	10	0	10	0	0	0	8	203	7	29

E054	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	0	2	1	0	0		1	1		5		
M	20	9	3	0	1		1			34		
S	99	26	25	0	12					162	視野数	１視野平均
合計	119	37	29	0	13	0	2	1	0	201	9	22.33333333

N-11	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	9	0	0	0	0			1		10		
M	45	5	0	0	0					50		
S	120	21	0	0	11			1	1	154	視野数	１視野平均
合計	174	26	0	0	11	0	0	2	1	214	9	23.77777778

№12	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	16	0	0	0	0	0	0	1	1	18		
M	4	1	1	0	0	0	0	2		8		
S	30	1	1	0	4	0	0	0		36	視野数	１視野平均
合計	50	2	2	0	4	0	0	3	1	62	3	20.66666667

N-13	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	3	0	0		0		2			5		
M	31	4	1		1		1		1	39		
S	146	11	11		8				2	178	視野数	１視野平均
合計	180	15	12	0	9	0	3	0	3	222	9	24.66666667

№14	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	15	3	0	0	0		0	0	0	18		
M	35	11	0	0	0		0	0	0	46		
S	119	15	3	0	9		0	0	0	146	視野数	１視野平均
合計	169	29	3	0	9	0	0	0	0	210	10	21

N-15	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	6	0	0	0	0			0	0	6		
M	11	3	11	0	0			0	0	25		
S	122	20	31	1	4			1	1	180	視野数	１視野平均
合計	139	23	42	1	4	0	0	1	1	211	6	35.16666667

N-16	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	4	1	0	0	0					5		
M	25	3	0	0	0				1	29		
S	154	12	7	5	8				2	188	視野数	１視野平均
合計	183	16	7	5	8	0	0	0	3	222	8	27.75

N-17	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	10	0	0	0	0		2	1		13		
M	22	5	1	1	0		0	1		30		
S	113	24	8	2	9		0	2		158	視野数	１視野平均
合計	145	29	9	3	9	0	2	4	0	201	10	20.1

N-18	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	7	1	0	0	0					8		
M	15	7	1	0	0			1	3	27		
S	129	25	7	5	12					178	視野数	１視野平均
合計	151	33	8	5	12	0	0	1	3	213	12	17.75

表４　実体顕微鏡観察結果２

N-19	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	43	8	0	0	0		1			52		
M	31	6	3	0	0		2			42		
S	68	30	9	2	3					112	視野数	１視野平均
合計	142	44	12	2	3	0	3	0	0	206	18	11.44444444

№20	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L										0		
M										0		
S										0	視野数	１視野平均
合計	○	△	＋	＋	＋			－		0	砂礫極少	１～２程度

N-21	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	6	0	0	0	0		1			7		
M	23	0	1	0	0			1		25		
S	143	11	10	3	13					180	視野数	１視野平均
合計	172	11	11	3	13	0	1	1	0	212	12	17.66666667

N-22	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	備考	
L	5	1	0	0	0			1		7		
M	22	5	0	0	0			1		28		
S	143	15	0	1	6					165	視野数	１視野平均
合計	170	21	0	1	6	0	0	2	0	200	10	20

一見尾張西部型の胎土に近い印象を受けるが、土器中の砂礫は在地型の組成である。ただし全体に雲母が多く、花崗岩の影響が強いように感じられる。

④Ｎ－１６

質感などはＮ－１５とよく類似し、同一個体である可能性も否定できない。しかしＮ－１５に比べ雲母の含有量が少ない。

⑤Ｎ－１７

やや粒度が粗い傾向にあるが、Ｎ－１６に類似する。

⑥Ｎ－１８

偏光顕微鏡下で火山岩片を認める。尾張西部の土器に共通する特徴を持つといえる。

⑦Ｎ－１９

表面観察では、他試料に比べ長石が目立つ。偏光顕微鏡下でも両雲母花崗岩が含まれるなど他試料より花崗岩の影響を強く受けている。同時に尾張平野部では多く含まれるチャートが見られない。同遺跡の他試料あるいは尾張平野部の遺跡出土土器とは、異なった特徴を示す。

⑧Ｎ－２０　町屋遺跡報告試料

実体顕微鏡で計数する 0.25mm 以上の砂礫が極端に少なく（１視野１～２粒程度）、土器表面の砂礫の計数にすら至っていない。偏光顕微鏡下での観察も含め、チャートが見られる点などは尾張平野の土器胎土に共通する。ただし、砂礫の少なさ故か火山岩など尾張西部の指標となる砂礫の有無は判断できず、詳細は不明と言わざるを得ない。

⑨Ｎ－２１

若干チャートの砂礫が少ないが、おおよそＮ－１１、１３，１５等と共通の特徴を持つ。

⑩Ｎ－２２

チャートの比率が高いことも含め、上記試料と類似する。

第４節　考　察

（１）伝法寺野田遺跡出土土器

Ｅ－０５４をのぞき、他地域からの搬入品である可能性が高い。

Ｅ－０４３，０４５，０５２の３試料は、考古学的観点では「浮線紋鉢」とされ、同じ系統に分類されている。胎土分析の結果でも、砂礫組成に加え、特徴的に海綿骨針を含む点、さらに質感などの数値化されない特徴もあわせ、同一個体かと思わせるほどよく類似する。しかし、少なくともＥ－０４３，０４５は、口縁に異なった特徴を持つようであり、その可能性は否定される。すなわち、これらは少なくとも２個体の搬入された土器であり、同じ起源を持つ可能性が高いといえる。

筆者によるこれまでの分析でも、土器中の海綿骨針について報告している（森勇一ほか 1989b）が、今回の分析土器に比べごくわずかである。量的には不明だがその他にも北陸から東北地方でも報告例がある。

特徴的に海綿骨針を含む土器は、石川県七尾市の遺跡で出土例があることを、石川県埋蔵文化財センターの久田正弘氏にご教示いただいた。石川県加賀市猫橋

表５　偏光顕微鏡観察結果

遺跡名	サンプルNo.	黒雲母	白雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	ジルコン	火山岩	花崗岩	チャート	砕屑性堆積岩類	火山性堆積岩類
伝法寺野田	E043	△							○		△	
	E045	△	−						△		−	
	E047	＋							−	○		
	E052	プレパラートなし										
	E054	＋					(−)	＋		○		
松河戸	N11	△	(−)				(−)		○	○		
	N12	△	−					△	○	○		
	N13	−					(−)		△	○		
	N14								○	△		
	N15	−	(−)						△	○		
	N16	−	(−)						△	○		
	N17	−							△	○		
	N18	−					−	(−)	−	○		
	N19	△	△	(−)					◎			
	N20	△					(−)		○	○		
	N21	−		−					△	△		
	N22	−					(−)		△	○		

遺跡の報告書によれば、石川県北部に海綿骨針を多量に含む土器が出土し、そこから県中部にかけて海綿骨針を含む土器の出土が分布するとしている。またその中で、「邑知地溝帯は石動山系からの堆積が激しく、石動山には古期花崗岩が存在するから、土器の胎土が石英基調になるのであろう。」との記載がある。あるいは県中部の宝達山には花崗岩の分布があり、今回の３試料の分析結果に共通点が見られ、起源をこの地域に求めることができるかもしれない。ただし、現状では海綿骨針の含有量や岩片・鉱物組成が不明瞭なため、直接の比較はできず可能性の指摘にとどめざるを得ない。

今回の分析では、これらの試料の起源特定には至らないが、少なくとも同系統の複数の土器が、おそらく一括して他地域から持ち込まれたものと思われる。

Ｅ－０４７は櫛条痕深鉢と分類されており、過去に分析した同系統の土器と共通の胎土である。町屋遺跡出土の特徴的器型である双口壺と同起源と考えられる内傾口縁高坏(№２)など、同系統の土器に比較的類似した土器胎土をもつものが少なからず存在する(永草2013ほか)。筆者は、今のところこの一群の起源を庄内川上流域に想定をしているが、同時期の遺跡の調査例が少なく詳細は未だ不明である。

Ｅ－０５４は、伝法寺野田遺跡を含む尾張平野西部の在地型の胎土である。

(２)松河戸遺跡出土土器

Ｎ－１２，１４，１８，１９以外はよく似た胎土の特徴を示す(Ｎ－２０は除く)。これまでの分析と比較しても、表面観察、偏光顕微鏡観察ともチャートが優占する点は春日井地域の土器胎土と共通し、また地質とも整合するといえる。試料の中の多数であり、松河戸遺跡を含む春日井地域の土器胎土と考えるのが妥当であろうか。しかし今回の松河戸遺跡の土器は、春日井地域の土器に類似しながら、他に比べ若干花崗岩の影響が強いようである。特にＮ－１６はその傾向が強い。少なくともＮ－１６は他地域に起源を持つ可能性を考える必要がある。もし他地域に起源を求めるとするならば、北勢地域が候補となる。

松河戸遺跡出土土器は、多くが円磨度の高い大型砂礫に特徴づけられる独特の表面組織を持っている。またこれらの土器が、町屋遺跡を含む一宮周辺地域の遺跡から出土する同時代の土器に一定数含まれ、その起源を求めることは以前からの課題であった。

町屋遺跡関連資料(永草ほか2013)も含めて考えると、松河戸遺跡土器と似た表面組織を持つ町屋遺跡出土の№７は、やはり春日井地域に類似しながら若干花崗岩地質の影響が強い胎土である。これらは一連の生産体系によるものかもしれない。

一方でＮ－１２は、松河戸遺跡出土でありながら、むしろ尾張西部地域産の可能性が高く、今回の松河戸遺跡出土土器とは異なった傾向を示していた。

したがって、これら円磨度の高い粗粒砂礫を含む土器が、松河戸遺跡を生産の重心と考えるのであれば、

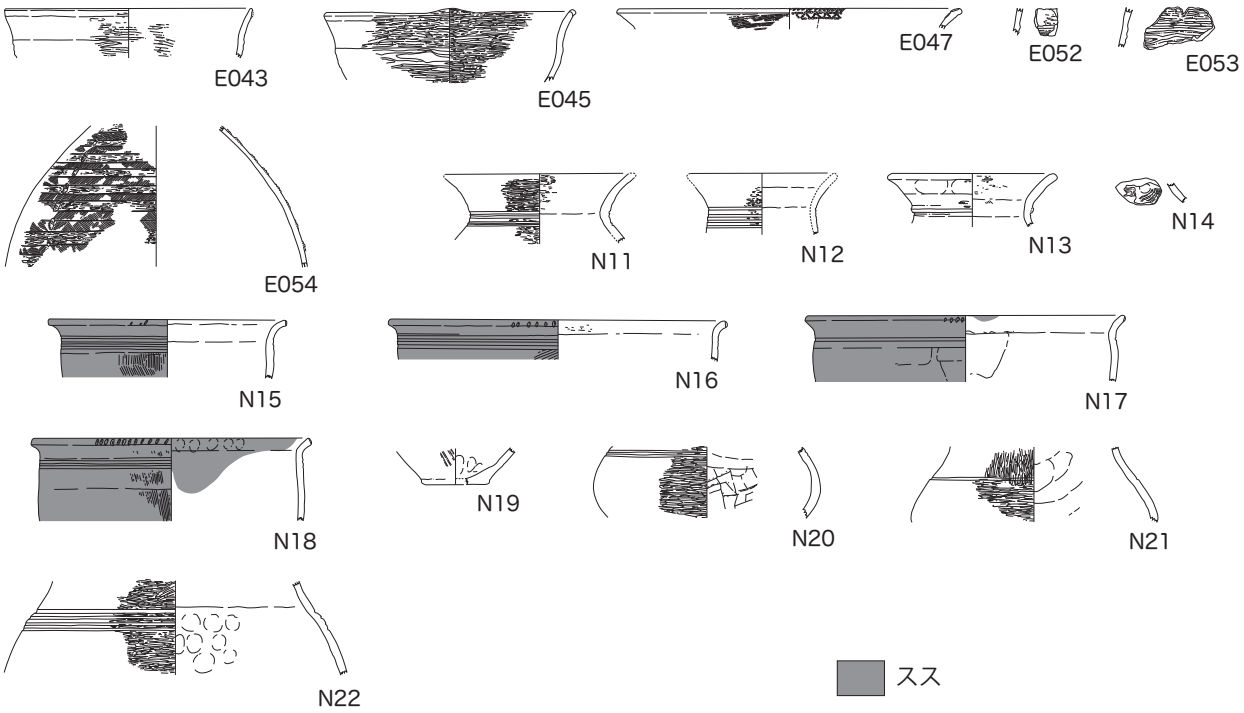


図 25　胎土分析試料実測図（1：8）

他の特徴を持つ在地土器も含めた分析を進め、詳細な比較検討を要する。

Ｎ－１８は尾張西部地域から松河戸遺跡への搬入品と考えられる。他試料の多くと器種は同じ分類をされるが、起源は異なることになる。すなわち尾張西部地域と直接の交流があったことを裏付ける。

Ｎ－１４，１９は花崗岩起源の砂礫を特徴とする。これらの試料は条痕文系土器に分類されており、上述のように伝法寺野田遺跡のＥ－０４７が同系統の土器である。このうちＮ－１４とＥ－０４７はチャートを伴うが、Ｎ－１９にはチャートは含まれない。この点で起源を別に求める必要がある。これらの土器の産地を、Ｎ－１９が庄内川上流域、Ｎ－１４，Ｅ－０４７が下流域に想定することができようか。

第５節　ま と め

今回の分析は、伝法寺野田遺跡から出土した「浮線紋鉢」の胎土の特徴を明らかにすることが主な目的である。その点では、分析を実施した３点は、かなり類似する胎土を持ち、一連の生産体系によるものである可能性が高いことが明らかとなった。ただし、現状ではその起源を求めるには至らない。

この地域での同系統の土器の状況把握の一つとして、愛知県埋蔵文化財調査センターの橋本昇氏のご協力を得て、朝日遺跡出土の同じ特徴をもつ土器 (朝日遺跡 VI 遺物番号 820) の実見の機会をいただいた。土器表面の大まかな観察ではあるが、この土器には伝法寺野田遺跡試料のように海綿骨針は含まれず、砂礫組成も尾張平野に共通するもののようである。この土器は搬入品ではなく、模倣品である可能性が高い。

また、比較試料として提供いただいた松河戸遺跡に関しては、特徴的に円磨度の高い大型砂礫を含む胎土が、概ね同じ傾向を示すことがわかった。前述のように、同様の組織を有する土器は伝法寺野田遺跡を含む一宮市周辺の同時期の遺跡で一定数見られるが、それらが松河戸遺跡と関連を持つ可能性が指摘できたといえる。ただし、同様の特徴を持つ土器に、松河戸遺跡出土ながら一部尾張西部地域の胎土を持つものも存在し、すべてにおいて松河戸遺跡あるいはその近辺に起源を求められるとは限らない。また、質感のようなデータ上には現れない要素も含め、松河戸遺跡出土土器の多くが、隣接する勝川遺跡や町田遺跡の土器とは異なる印象を受ける。尾張地域全体で弥生時代中期以降に土器胎土の砂礫に細粒化の傾向があるとはいえ、砂礫粒度だけでも大きく差があるようである。素地部分に

ついても、松河戸遺跡の土器の方が緻密な印象を受ける。時期差である可能性もあるが、地域的には隣接するにも関わらず土器づくりの材料調達に違いがあることが考えられる。

また、今回の分析結果を永草 (1992) と比較すると、三角ダイヤグラム上での松河戸遺跡出土土器が、一部重複のあるものの、朝日遺跡・山中遺跡など尾張西部の領域とも、三重県納所遺跡などのそれとも異なる領域に集中することが示された。一方で、この領域からはずれるＮ－１５や伝法寺野田遺跡Ｅ－０５４は、花崗岩の影響が若干強く、三角ダイヤグラムの領域が示すように、三重県中部まではいかないもののより西方の影響があるかもしれない。

逆に、北陸系の特徴を持つとされるＥ－０４３，０４５，０５２は、松河戸領域に入る。しかし海綿骨針の存在や、偏光顕微鏡下もチャートが見られない点等の異なった特徴を持つことは明白である。より詳細な土器胎土の特徴を探る上で、実体顕微鏡観察による土器表面と、偏光顕微鏡による観察の併用は、きわめて重要であるといえる。

謝辞

分析を進めるにあたり、春日井市教育委員会文化財課の村松一秀氏、浅田博造氏、若杉尚代氏には、町屋遺跡の報告も含め、快く松河戸遺跡出土土器のご提供をいただいた。愛知県埋蔵文化財調査センターの橋本昇氏には、関係資料の実見の機会をいただいた。また、石川県埋蔵文化財センター久田正弘氏、愛知県埋蔵文化財センター永井宏幸氏、鬼頭 剛氏、蔭山誠一氏には、試料調整や施設使用、試料の考古学的評価など、多くのご協力を賜った。記して関係する方々に感謝の意を表す。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター (2000) 朝日遺跡Ⅵ．670p.

池本正明・永草康次・楯真美子 (1990a) 岡島遺跡の土器胎土の特徴．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 14 集）岡島遺跡，51-63.

池本正明・永草康次・楯真美子 (1990b) 岡島遺跡の土器胎土に関する考察．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 14 集）岡島遺跡，98-101.

石川県埋蔵文化財センター (2004) 加賀市猫橋遺跡．116 p．

永草康次 (1992) 朝日遺跡出土の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 31 集）朝日遺跡Ⅱ（自然科学編），299-314.

永草康次 (1993) 岡島遺跡の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 43 集）岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡，142-152.

永草康次 (1994a) 朝日遺跡ｓｚ 162 出土の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 34 集）朝日遺跡Ⅴ，322-328.

永草康次 (1994b) 伊勢湾岸地域の土器胎土－弥生時代から古墳時代を中心として－．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 34 集）朝日遺跡Ⅴ，355-362.

永草康次 (1998) 一色青海遺跡出土土器の岩石学的手法による胎土分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 79 集）一色青海遺跡（自然科学・考察編），101-108.

永草康次・蔭山誠一 (2001) 川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 91 集）川原遺跡（第三分冊），61-70.

永草康次・蔭山誠一 (2003) 猫島遺跡出土弥生土器の分析. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 107 集）猫島遺跡，130-140.

永草康次 (2007) 朝日遺跡 (2001 年度・2002 年度出土) における土器胎土の岩石学的分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 138 集) 朝日遺跡Ⅶ (第三分冊)，143-145.

永草康次 (2013) 愛知県一宮市町屋遺跡から出土した櫛条痕文系土器の胎土に関する考察．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 179 集），152-157.

森勇一・永草康次・楯真美子 (1989a) 尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 9 集）町田遺跡，44-49.

森勇一・永草康次・楯真美子 (1989b) 町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 9 集）町田遺跡，50-53.

第５章　伝法寺野田遺跡における地下層序と古環境

鬼頭　剛

第１節　はじめに

濃尾平野北東部、一宮市丹陽町伝法寺の伝法寺野田遺跡において試錐調査を実施し、その層序解析、火山灰分析および放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。また、地形解析と植物珪酸体分析の結果を基に古地理・古環境について述べる。

第２節　試料および分析方法

10 区の東（地点 1）と南西端（地点 2）の 2 地点で地表から試錐調査を実施した（図 26）。採取したコアは科学分析室に運び、地層の観察および火山灰分析と放射性炭素年代測定用の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

試錐調査は 2010 年（平成 22 年）12 月、株式会社アーキジオに依頼し、油圧式ロータリー型試錐機を使用した。コアパックスリーブ内蔵型サンプラー（φ 86mm）によるオールコアで実施した。

火山灰分析の試料は古澤（2003）の方法を基本に前処理を行なった。はじめにナイロン製＃ 255 メッシュシート（糸径 43 μ m、オープニングワイド 57 μ m）を用い､流水中で洗浄した。残渣を＃ 125 メッシュシート（糸径 70 μ m、オープニングワイド 133 μ m）を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ（1/8 ～ 1/16）に粒度調整した試料を超音波洗浄器を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉱物観察用スライドグラスの上に硬化後屈折率が 1.545 程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を撹拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を 1.545 とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子を偏光顕微鏡（100 倍）を用いて観察し、テフラ純層の場合 300 粒子（1000 粒子の平均値）を古澤 (2003) の区別手法にしたがって区分した。また、テフラ固有

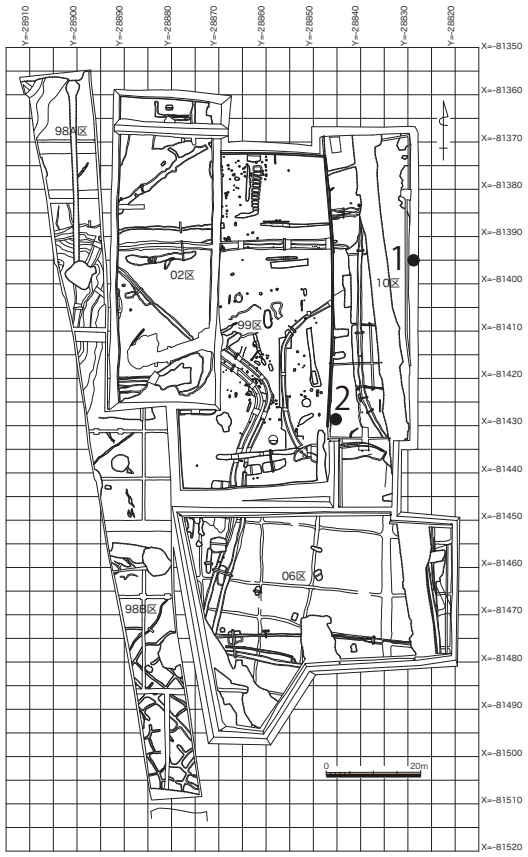


図 26　伝法寺野田遺跡 10 区におけるボーリング掘削地点（黒丸が掘削地点の地点 1・地点 2 を示す。）

で含有率の低い粒子の産出層準を特定するため 3000 粒子（10000 粒子の平均値）の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置 "MAIOT" を使用した。測定精度は火山ガラスで ±0.0001、斜方輝石および角閃石で ±0.0002 程度である（古澤，1995）。火山ガラスの主成分分析について SEM は HITACHI 製 SU1510 を使用し、エネルギー分散型 X 線マイクロアナライザー (EDX) は HORIBA 製 EMAX ENERGY EX-270 を用いた。分析は古澤地質株式会社に依頼した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調

整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代値の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL13）を使用した。なお、2 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

第 3 節　分析結果

試錐層序

10 区の東（地点 1）と南西端（地点 2）の 2 地点で試錐調査を実施した（図 26）。各地点の層序の特徴をまとめて以下に述べる。

地点 1 では深度 13m のコア資料を得た（図 27）。下位層より順に、標高 -6.04m ～ -5.76m は灰オリーブ色 (新版標準土色帖によるカラーチャートで 5Y4/2 ; 以下ではカラーチャートの記号のみを記す) の大礫層である。径 60mm の円礫を含む。基質は細礫～極粗粒砂からなり、礫の量に比べて基質の多い基質支持礫層である。礫種にはチャートや濃飛流紋岩がみられる。本層の下部（標高 -5.98m）で火山灰分析の試料（A5) を採取した。標高 -5.76m ～ -5.64m は灰オリーブ色 (5Y4/2) の細礫層である。基質にシルトを含むようになる。本層の下部（標高 -5.74m）で火山灰分析の試料（A4) と放射性炭素年代測定試料 (C14）を採取した。標高 -5.64m から標高 0.66m までは砂が卓越するようになる。標高 -5.64m ～ -5.04m　には灰色 (5Y4/1) を呈するシルト質極細粒砂層がみられ、粒径の細かい砂層が下位の礫層を覆う。いっぽうで標高 -5.04m から標高 0.66m までは極粗粒砂層や粗粒砂層が卓越するようになる。砂層を区分する層理面は明瞭である。これらの砂層において、標高 -5.04m ～ -4.48m の黄灰色 (2.5Y4/1) を呈する極粗粒砂層の下部（標高 -5.04m）で火山灰分析試料（A3) を、同じく標高 -4.04m ～ -3.80m で灰色 (7.5Y5/1) の極粗粒砂層の下部（標高 -4.04m）で A2 を、標高 -3.44m ～ -2.82m で灰色 (5Y4/1) の粗粒砂層において砂層の上部（標高 -3.04m）から A1 を採取した。また、標高 -2.50m ～ -2.42m の黄灰色 (2.5Y4/1) の粘土質シルトの混じる極粗粒砂層の上部（標高 -2.44m）で放射性炭素年代測定試料 (C13）を、標高 0.50m 付近の極粗粒砂層と粗粒砂層との間に薄く挟まれる標高 0.41m ～ 0.46m の黒褐色 (2.5Y3/2) を呈する粘土層から放射性炭素年代測定試料 (C12：標高 0.42m）を採取した。標高 0.66m から標高 2.52m までは黒褐色 (10YR3/2) を呈する粘土層が累重するようになる。これらの粘土層では下位層から上位層へ放射性炭素年代測定試料 (C11 ～ C5）を採取した。標高 2.52m から標高 3.84m までは粗粒砂層やシルト質砂層などの砂粒子が卓越する地層が覆う。下位層の粗粒砂層から上位層であるシルト質砂層へと漸移し、これらの砂層全体では上方に細粒化する傾向がみられる。標高 3.11m ～ 3.30m の黒褐色 (10YR3/2) を呈するシルト質中粒砂層の中部（標高 3.21m）で放射性炭素年代測定試料 (C4）を、標高 3.44m ～ 3.56m の黒褐色 (2.5Y3/2) の砂混じり粘土層から放射性炭素年代測定用の試料 (C3：標高 3.51m)

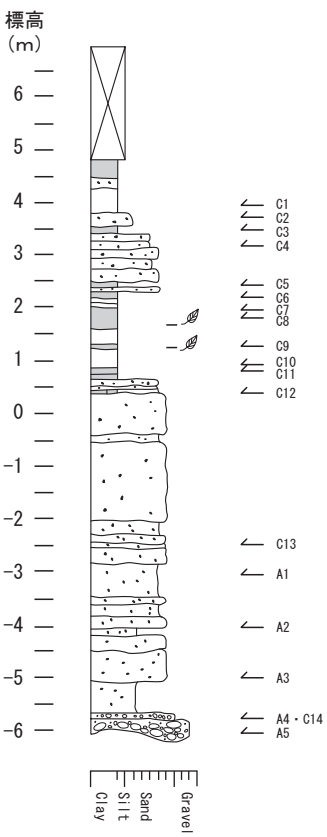


図 27　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 1 における地質柱状図

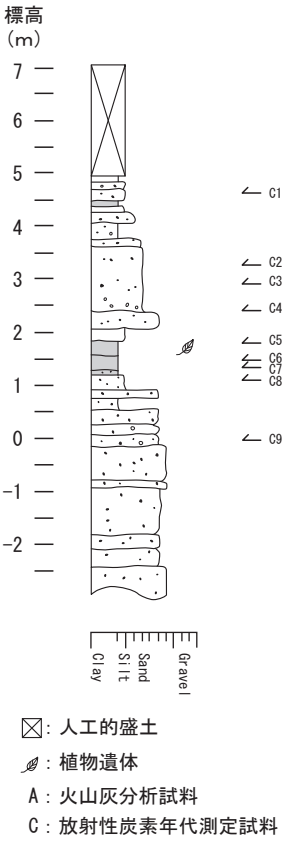


図 28　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 2 における地質柱状図

表６　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点１の火山灰分析結果

試料名	深度 (m)	火山ガラスの形態別含有量 (/3000)			重鉱物の含有量 (/3000)			β 石英 (/3000)	検出されたテフラ名 (記号)
		Bw	Pm	O	Opx	Gho	Cum		
A1	10.00	0.1	0.0	0.0	21.0	22.0	0.0	0.0	
A2	11.00	0.0	0.0	0.0	17.0	16.0	0.0	0.0	
A3	12.00	0.0	0.1	0.0	16.0	16.0	0.0	0.0	
A4	12.70	0.1	0.0	0.1	5.0	10.0	0.0	0.0	
A5	12.94	0.1	0.0	0.0	12.0	13.0	0.0	0.0	姶良Tn (AT) が混在 (鬼界アカホヤ (K-Ah) 降灰以前)

Bw：バブルウォールタイプ　　Opx：斜方輝石　Gho：緑色普通角閃石　Cum：カミングトン閃石
Pm：パミスタイプ
O：低発泡タイプ

を、標高 3.56m ～ 3.84m の灰黄褐色 (10YR4/2) のシルト質砂層の上部（標高 3.76m）で放射性炭素年代測定試料 (C2) を採取した。標高 3.84m から標高 4.84m には灰黄褐色 (10YR4/2) や黒褐色 (10YR3/2) を呈する粘土層やシルト質粘土層ないしシルト質砂層が堆積する。それぞれの地層は塊状・均質で、堆積構造はみられない。下位層である標高 3.84m ～ 4.29m の灰黄褐色 (10YR4/2) の粘土層下部（標高 3.98m）から放射性炭素年代測定試料（C1）を採取した。標高 4.84m ～ 6.96m は現代の人工的な盛土であり、本層の頂部（標高 6.96m）が地表面となる。

地点２では深度 10m のコア資料を得た（図 28）。下位層より順に、標高 -2.96m から標高 0.54m までは極粗粒砂層～粗粒砂層が累重する。下位層では淘汰良好であるが、上位層になるにしたがって基質にシルト成分が混じるようになり淘汰も悪くなる。また、上位層では径 20mm の中礫や径 30mm 程度の黒褐色の粘土層ブロックを含む場合がある。標高 -0.18m ～ 0.04m の灰オリーブ色 (5Y4/2) を呈する粗粒砂層の上部（標高 -0.01m）で放射性炭素年代測定試料 (C9) を採取した。標高 0.54m から標高 2.04m までは粘土層やシルト層といった細粒な堆積物粒子がみられるようになる。それぞれの地層において下位層から上位層にかけて C8（標高 1.08m）～ C5（標高 1.78m）までの放射性炭素年代測定試料を採取した。標高 2.04m から標高 3.74m までには粗粒砂層～シルト質細粒砂層が堆積する。上位層のシルト質細粒砂層には細礫が混じる場合がある。それぞれの砂層において下位層から上位層にかけて C4（標高 2.40m）～ C2（標高 3.24m）までの放射性炭素年代測定試料を採取した。標高 3.74m から標高 4.94m では粘土やシルトの細粒な堆積粒子が卓越するようになる。標高 4.46m ～ 4.70m の黄灰色 (2.5Y5/1) を呈する砂質シルト層の標高 4.60m で放射性炭素年代測定試料 (C1) を得た。上位層では径 20mm の粘土層のブロックを含む層準もみられる。標高 4.94m ～ 7.04m は黄褐色 (2.5Y5/3) のシルト層からなるが、本層は人工的な盛土であり、本層の頂部が現代の地表面（標高 7.04m）となる。

火山灰分析

10 区の東側で実施した地点１で５点（A1 ～ A5）を採取し分析に供した。最下位層である標高 -6.04m ～ -5.76m の大礫層において、深度 12.94m の地層の下部（標高 -5.98m）より採取した試料からはバブルウォールタイプ（Bw）の火山ガラスが 3000 粒子中に 0.1 と、きわめて少量ではあるが含まれた（表 6）。火山ガラスの主成分分析から姶良 Tn 火山灰（AT）の特徴と一致した。だが、それよりも上位層から採取した試料 A4 ～ A1 から火山ガラスを検出することはできなかった。

放射性炭素年代測定

10 区の東側で実施した地点１のコア資料から 14 点、10 区の南西端で実施した地点２のコア資料から９点の計 23 点の放射性炭素年代測定を行なった（表 7・表 8）。地点１のコアでは最下位層の細礫層（C14: 標高 -5.74m）と標高 0.86m の粗粒砂混じり粘土層から採取した試料 (C11) では残念ながら測定不能のため数値年代を得ることができなかったが、他の試料からは年代値を得ることができた（表 7）。数値年代の古い試料としては標高 -2.44m の粘土質シルト混じりの極粗粒砂層から採取した生材が 6356 - 6287 cal yrs BP (PLD-29228)、標高 0.42m の黒褐色粘土層から採取した土壌が 6489 - 6388 cal yrs BP (PLD-29227)、標高 0.96m の褐灰色粘土層から採取した土壌が 6944 - 6786 cal yrs BP (PLD-29225) と約 6900 年前代から 6300 年前代の数値年代であった。対して、標高 0.66m から標高 2.52m でみられる黒褐色粘土層からは標高 1.30m の草本類（C9）が 4766 - 4615 cal yrs BP (PLD-29224)、標高 2.20m の生材（C6）が 4660

表 7　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 1 の放射性炭素年代測定分析結果

試料	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	2σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
C1	3.98	灰黄褐色粘土層	生の草本類	425 ± 20	-23.78 ± 0.23	1433 - 1483 AD (95.4 %)	517 - 468 (95.4 %)	PLD - 29216 (AMS)
C2	3.76	灰黄褐色シルト質砂層	生の草本類	274 ± 20	-27.46 ± 0.21	1626 - 1665 AD (56.8 %)	325 - 285 (56.8 %)	PLD - 29217 (AMS)
						1521 - 1575 AD (37.3 %)	429 - 375 (37.3 %)	
						1787 - 1793 AD (0.8 %)	164 - 158 (0.8 %)	
						1585 - 1590 AD (0.5 %)	365 - 360 (0.5 %)	
C3	3.51	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	1763 ± 22	-23.78 ± 0.22	216 - 346 AD (95.4 %)	1735 - 1605 (95.4 %)	PLD - 29218 (AMS)
C4	3.21	黒褐色シルト質中粒砂層	生の草本類	2666 ± 23	-27.47 ± 0.25	848 - 797 BC (89.0 %)	2797 - 2746 (89.0 %)	PLD - 29219 (AMS)
						895 - 871 BC (6.4 %)	2844 - 2820 (6.4 %)	
C5	2.44	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	2458 ± 22	-24.07 ± 0.21	596 - 429 BC (42.9 %)	2545 - 2378 (42.9 %)	PLD - 29220 (AMS)
						755 - 680 BC (33.5 %)	2704 - 2629 (33.5 %)	
						671 - 608 BC (19.0 %)	2620 - 2557 (19.0 %)	
C6	2.20	灰黄褐色シルト層	生材	4116 ± 25	-28.63 ± 0.23	2711 - 2578 BC (55.4 %)	4660 - 4527 (55.4 %)	PLD - 29221 (AMS)
						2864 - 2806 BC (25.5 %)	4813 - 4755 (25.5 %)	
						2760 - 2717 BC (14.5 %)	4709 - 4666 (14.5 %)	
C7	1.98	黒褐色シルト質粘土層	生の草本類	4119 ± 28	-26.54 ± 0.28	2764 - 2578 BC (69.8 %)	4713 - 4527 (69.8 %)	PLD - 29222 (AMS)
						2866 - 2804 BC (25.6 %)	4815 - 4753 (25.6 %)	
C8	1.86	黒褐色シルト質粘土層	生の草本類	4135 ± 25	-28.03 ± 0.21	2872 - 2620 BC (95.4 %)	4821 - 4569 (95.4 %)	PLD - 29223 (AMS)
C9	1.30	黒色粘土層	生の草本類	4172 ± 26	-27.95 ± 0.31	2817 - 2666 BC (75.3 %)	4766 - 4615 (75.3 %)	PLD - 29224 (AMS)
						2881 - 2835 BC (20.1 %)	4830 - 4784 (20.1 %)	
C10	0.96	褐灰色粘土層	土壌	6017 ± 28	-21.07 ± 0.25	4995 - 4837 BC (95.4 %)	6944 - 6786 (95.4 %)	PLD - 29225 (AMS)
C11	0.86	黒色粗粒砂混じり粘土層	草本類	—	—	—	—	PLD - 29226 (AMS)
C12	0.42	黒褐色粘土層	土壌	5637 ± 30	-22.02 ± 0.33	4540 - 4439 BC (76.1 %)	6489 - 6388 (76.1 %)	PLD - 29227 (AMS)
						4426 - 4371 BC (19.3 %)	6375 - 6320 (19.3 %)	
C13	-2.44	黄灰色粘土質シルト混じり極粗粒砂層	生材	5534 ± 27	-27.15 ± 0.25	4407 - 4338 BC (65.9 %)	6356 - 6287 (65.9 %)	PLD - 29228 (AMS)
						4449 - 4412 BC (29.5 %)	6398 - 6361 (29.5 %)	
C14	-5.74	細礫層	土壌	—	—	—	—	PLD - 29229 (AMS)

表 8　伝法寺野田遺跡 10 区、ボーリング地点 2 の放射性炭素年代測定分析結果

試料	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	2σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
C1	4.60	黄灰色砂質シルト層	土壌	3534 ± 23	-23.89 ± 0.25	1940 - 1861 BC (50.2 %)	3889 - 3810 (50.2 %)	PLD - 29230 (AMS)
						1853 - 1772 BC (45.2 %)	3802 - 3721 (45.2 %)	
C2	3.24	黄褐色細礫混じりシルト質細粒砂層	生の草本類	-11 ± 20 F14:1,0014±0.0026	-17.50 ± 0.20	post-bomb NH2 2013: 1954 - 1955 AD (95.4 %)	—	PLD - 29231 (AMS)
C3	2.90	黄褐色細礫混じりシルト質細粒砂層	土壌	4083 ± 24	-23.54 ± 0.23	2696 - 2568 BC (73.7 %)	4645 - 4517 (73.7 %)	PLD - 29232 (AMS)
						2852 - 2812 BC (15.8 %)	4801 - 4761 (15.8 %)	
						2517 - 2499 BC (3.8 %)	4466 - 4448 (3.8 %)	
						2744 - 2728 BC (2.0 %)	4693 - 4677 (2.0 %)	
C4	2.40	黄褐色細礫混じりシルト質細粒砂層	土壌	6200 ± 30	-25.09 ± 0.29	5230 - 5051 BC (91.4 %)	7179 - 7000 (91.4 %)	PLD - 29233 (AMS)
						5289 - 5267 BC (2.8 %)	7238 - 7216 (2.8 %)	
						5261 - 5249 BC (1.2 %)	7210 - 7198 (1.2 %)	
C5	1.78	黒色粘土層	炭化草本類	4223 ± 26	-26.35 ± 0.23	2903 - 2858 BC (50.8 %)	4852 - 4807 (50.8 %)	PLD - 29234 (AMS)
						2810 - 2752 BC (38.4 %)	4759 - 4701 (38.4 %)	
						2722 - 2702 BC (6.2 %)	4671 - 4651 (6.2 %)	
C6	1.44	黒褐色粘土層	生の草本類	4430 ± 26	-27.01 ± 0.22	3117 - 2928 BC (76.5 %)	5066 - 4877 (76.5 %)	PLD - 29235 (AMS)
						3323 - 3234 BC (17.8 %)	5272 - 5183 (17.8 %)	
						3173 - 3162 BC (1.1 %)	5122 - 5111 (1.1 %)	
C7	1.30	黒褐色粘土層	生の草本類	4323 ± 26	-28.64 ± 0.21	3013 - 2893 BC (95.4 %)	4962 - 4842 (95.4 %)	PLD - 29236 (AMS)
C8	1.08	黒色粗粒砂混じり粘土質シルト層	生の草本類	4413 ± 26	-29.59 ± 0.22	3102 - 2922 BC (91.9 %)	5051 - 4871 (91.9 %)	PLD - 29237 (AMS)
						3264 - 3245 BC (3.5 %)	5213 - 5194 (3.5 %)	
C9	-0.01	灰オリーブ色粗粒砂層	土壌	5513 ± 30	-17.94 ± 0.27	4449 - 4327 BC (95.4 %)	6398 - 6276 (95.4 %)	PLD - 29238 (AMS)

- 4527 cal yrs BP (PLD-29221) と約 4000 年前代を示す一方で、標高 2.44m の土壌 (C5) は 2545 - 2378 cal yrs BP (PLD-29220) と約 2000 年前代を示す試料もあった。標高 3.76m の灰黄褐色を呈するシルト質砂層から採取した草本類（C2）は 325 - 285 cal yrs BP (PLD-29217) ともっとも新しい数値年代を示した。

地点 2 のコアでは標高 -0.01m の粗粒砂層から採取した土壌 (C9) が 6398 - 6276 cal yrs BP (PLD-29238) と約 6000 年前代の値を示した（表 8）。いっぽうで、標高 0.54m から標高 2.04m までにみられる粘土層やシルト層といった細粒堆積物から採取した試料では標高 1.30m の黒褐色粘土層から採取した草本類（C7）が 4962 - 4842 cal yrs BP (PLD-29236)、標高 1.78m の炭化した草本類（C5）が 4852 - 4807 cal yrs BP

(PLD-29234) と 4900 年前代から 4800 年前代の値を示した。標高 4.60m の砂質シルト層から採取した土壌 (C1) は 3889 - 3810 cal yrs BP (PLD-29230) と地点 2 の試料の中ではもっとも新しい数値年代であった。

第４節　考　察

伝法寺野田遺跡における地下層序と堆積年代

伝法寺野田遺跡では 10 区の 2 地点で試錐調査を実施し、地下の堆積物の状況を捉えた。地点 1 および地点 2 の地下層序ではともに、標高 0.5m 付近を境にして下位の砂層が卓越する層相と上位の黒褐色粘土層が卓越する層相の大きく 2 つのユニットに分けられる (図 27・図 28)。下位層でみられる砂層は砂層の間にシルト層や粘土層を挟まず、淘汰良好な砂層の上方への連続的な累重がみられた。試錐コアで観察されたこれらの砂層は全体に塊状で堆積構造を確認することができず、詳しい水理情報を得ることができなかった。だが、上述の砂層の特徴から水理学的に高エネルギー環境下で堆積したことがわかり、調査地点にはかつて活動的な河川流路が存在していたことがわかる。その存在時期について、地点 1 のコア資料では最下位層である標高 -6.04m ～ -5.76m の大礫層の下部（標高 -5.98m）から採取した試料（A5）からバブルウォールタイプ (Bw) の火山ガラスが検出され、火山ガラスの主成分分析から姶良 Tn 火山灰（AT）と同定された。姶良 Tn 火山灰（AT）は約 2 万 9000 年前～ 2 万 6000 年前の火山灰と見積もられている（町田・新井 , 2003)。いっぽうで、放射性炭素年代測定の結果では、地点 1 のコア資料では標高 -2.50m ～ -2.42m の黄灰色 (2.5Y4/1) を呈する粘土質シルトの混じる極粗粒砂層から採取した生材が (C13) 6356 - 6287 cal yrs BP (PLD-29228) を、地点 2 コア資料の下位層では標高 -0.18m ～ 0.04m の灰オリーブ色 (5Y4/2) を呈する粗粒砂層から採取した土壌 (C9) が 6398 - 6276 cal yrs BP (PLD-29238) の値を示し、地点 1・地点 2 の 2 地点とも 6300 ～ 6200 年前頃の数値年代を示した。このことから、調査地点では 6300 年前ころには活動的流路が流下するような高エネルギー環境に置かれていたことを示す。

調査地点では標高 0.5m 付近を境にして黒褐色粘土層が卓越する層相へと変わる。この粘土層の堆積時期について地点 1 コアでは標高 1.28m ～ 1.34m の黒色粘土層において標高 1.30m で採取した草本類（C9）が 4766 - 4615 cal yrs BP (PLD-29224)、標高 1.62m ～ 2.04m の黒褐色シルト質粘土層の標高 1.98m で採取した草本類（C7）が 4713 - 4527 cal yrs BP (PLD-29222)、標高 2.14m ～ 2.22m の灰黄褐色シルト層の標高 2.20m で採取した生材（C6）が 4660 - 4527 cal yrs BP (PLD-29221) と、4700 年前～ 4500 年前代の数値年代を示した。地点 2 コアにおいても標高 1.28m ～ 1.56m の黒褐色粘土層の標高 1.30m から採取した草本類 (C7) で 4962 - 4842 cal yrs BP (PLD-29236)、標高 1.56m ～ 1.80m の黒色粘土層の標高 1.78m から得た炭化した草本類（C5）が 4852 - 4807 cal yrs BP (PLD-29234) と約 4900 年前～ 4800 年前代の値を得ている。このように、標高 0.5m 付近を境に粘土層を主体とする細粒な層相が卓越しはじめる。粘土層の中には植物の葉や茎などの破片の集積がみられる層準も認められる。植物片が下流へ流されることなく堆積するような後背湿地的な環境へと移り変わったことがうかがえ、それははおよそ 4900 ～ 4800 年前頃に生じたことがわかった。

粘土層が卓越する層相には砂層が挟まれるようになる。これは活動的流路が調査地点の近傍に近づいたことを示す。地点 1 コアでは標高 2.42m ～ 2.52m の黒褐色を呈する砂混じり粘土層の標高 2.44m から採取した土壌 (C5) で 2545 - 2378 cal yrs BP (PLD-29220)、標高 3.11m ～ 3.30m のシルト質中粒砂層から得た草本類（C4）で 2797 - 2746 cal yrs BP (PLD-29219) と 2700 年前～ 2300 年前代であった。いっぽう、地点 2 コアでは標高 2.36m ～ 3.60m の細礫の混じるシルト質細粒砂層の標高 2.90m から採取した土壌（C3）が 4645 - 4517 cal yrs BP (PLD-29232)、標高 4.46m ～ 4.70m の砂質シルト層の標高 4.60m から採取した土壌 (C1) でも 3889 - 3810 cal yrs BP (PLD-29230) と約 4600 年前から 3800 年前代であり、地点 1 コアよりも約 2000 年ほど古い数値年代であった。この理由について地点 2 コアの方がより離水域に近く、早い段階で堆積作用が終了していたのに対し、地点 1 コアの方がより流路に近く、堆積作用がその後も続いていたのかも知れない。これは地点 1 コアの標高 3.56m ～ 3.84m の灰黄褐色シルト質砂層から採取した草本類 (C2) が 325 - 285 cal yrs BP (PLD-29217) の数値年代であり、地点 1 コア周辺の方が新しい時代まで堆積

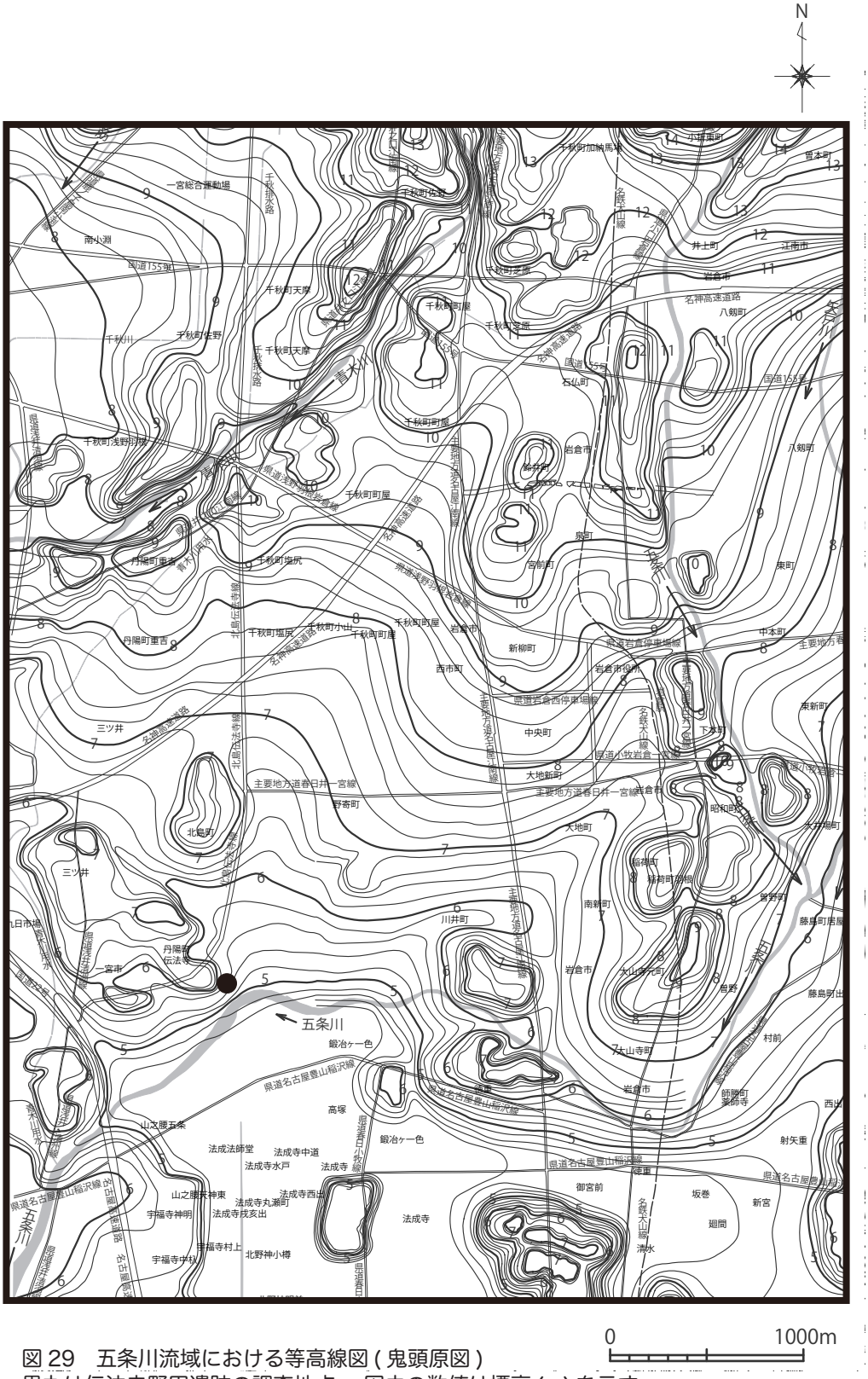


図 29　五条川流域における等高線図 (鬼頭原図)
黒丸は伝法寺野田遺跡の調査地点 、図中の数値は標高 (m) を示す

作用が続いていたことを示唆するものである。

調査地周辺の古地理・古環境

伝法寺野田遺跡の試錐調査からは標高 0.5m 付近を境にして下位の砂層の卓越する層相と上位粘土層が卓越するものとに大きく 2 分され、堆積システムに大きな変化がみられた。また、その時期は放射性炭素年代測定の結果から、砂層の卓越する層相は約 6300 ～ 6200 年前ころに活動的流路が流下するような高エネルギー環境に置かれており、約 4900 ～ 4800 年前頃に後背湿地がひろがるような環境へと移り変わったことがわかった。

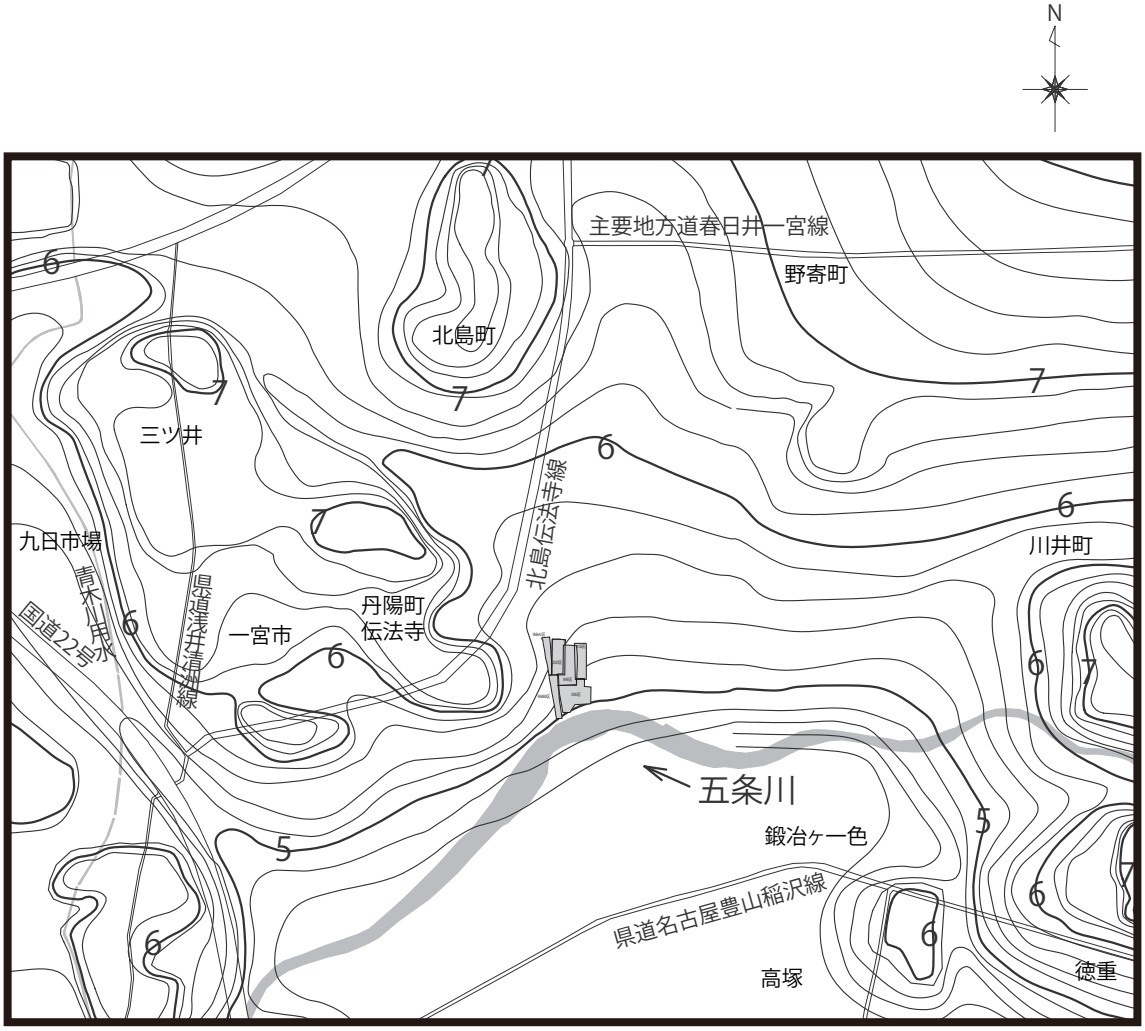


図 30　伝法寺野田遺跡の調査区と周辺等高線拡大図
調査区は五条川右岸 (北) にある、図中の数値は標高 (m) を示す

ところで筆者は、伝法寺野田遺跡の調査地がある一宮市丹陽町をはじめ岩倉市、北名古屋市、小牧市、江南市、丹羽郡大口町までの範囲において、地表に認められる微小な起伏を解析するために等高線図を作成し五条川の流路変遷について述べた（蔭山ほか，2015）。ここではその解析図を基に論を進める（図 29・図 30）。東西約 5.6km、南北約 10.4km の範囲の等高線図には標高 3.4m から標高 15m までの等高線が描かれ、図の北側で標高が相対的に高く、南へ向かい次第に標高が低くなる傾向にある。解析範囲における地形傾斜の緩急状態は等高線間隔の疎密の度合いに表わされ、図の中央付近にある標高 6m の等高線を境として地形の傾斜が相対的に急なところと緩やかなところとに分けられる。伝法寺野田遺跡の調査地点は地形傾斜が急なところから次第に緩やかに漸移する場所に当たっているのが読み取れる（図 29）。さて、解析範囲全体には多くの尾根状や谷状の地形が認められるが、ここでは伝法寺野田遺跡の周辺でみられる起伏をみる。図 30 に伝法寺野田遺跡の調査区を配置した。調査区の南には現在の五条川が東から西へ流下する。調査地周辺でみられる相対的に標高の高い尾根状や島状地形を呈するところとして、調査地点の西と北西側に一宮市三ツ井から丹陽町伝法寺の、標高 6.0m ～ 6.8m でほぼ水平な頂部をもつ島状に孤立した地形がみて取れる。この地形の北西 - 南東方向に伸びる長軸は約 550m、短軸は約 300m である。さらにこの地形の北には一宮市北島町に標高 7.0m ～ 7.6m で南北方向に約 550m の長軸と短軸約 290m の島状地形が認められる。この 2 つの島状地形との間には標高 4.6m ～ 7.0m までの谷地形がみられる。伝法寺野田遺跡の調査地点は、一宮市三ツ井から丹陽町伝法寺にかけてみられた標高 6.0 ～ 6.8m の島状地形の南東端にあたり、さらにその東には標高 4.6m ～ 5.8m の幅の広い凹地が認められる場所にあることがわかる（図 30）。地点 2 コアでは標高 4m から 5m 付近に黒褐色を呈するシルト層や粘土層、砂層がみられ、標高 4.46m ～ 4.70m の砂質シル

ト層の標高 4.60m から採取した土壌 (C1) では 3802 - 3721 cal yrs BP (PLD-29230) と約 3800 ～ 3700 年前代の数値年代が得られており、河川環境の卓越する場所であったことがわかる。06 区では検出された考古遺構の溝から垂直方向に、古植生を推定するために植物珪酸体分析を行なっている（鈴木 茂（株式会社パレオ・ラボ）による本報告書添付 CD-ROM 中の植物珪酸体分析の結果を参照）。分析結果を参照すると 06 区北端の考古遺構 1813SD、1539ST から採取した試料（C サンプル：図 31）では、標高 4.48m ～ 4.60m の灰褐色を呈する粘土層 (No.2) から 1000 個 /g のイネの機動細胞珪酸体が検出された。この地層 (1813SD) からは弥生時代前期後半頃と推定される土器片が検出されている。同様に弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期の考古遺物を含む標高 4.69m ～ 4.88m の黒褐色を呈する粘土層 (No.4:1539ST) から 7500 個 /g のイネの機動細胞珪酸体が、さらに古代の土器片を含む標高 4.88m ～ 4.96m の灰褐色の粘土層 (No.5) からも 25500 個 /g と高密度でイネの機動細胞珪酸体が検出されている。また、06 区南端の考古遺構 1815SD から採取した試料 (D サンプル：図 31) では、弥生時代中期中葉後半～古墳時代の水田面と推定される直下の標高 4.45m ～ 4.55m の黒褐色粘土層 (No.4) から 13800 個 /g のイネの機動細胞珪酸体が、さらにその上位の古代～中世前半の水田面とされる直下の標高 4.65m ～ 4.75m の灰褐色を呈する粘土層 (No.6) から 24800 個 /g と高密度でイネの機動細胞珪酸体が検出された。06 区では弥生時代中期中葉以前から古代までの水田遺構が検出されている（石黒・蔭山 , 2007）。伝法寺野田遺跡の調査地点は標高 6.0m ～ 6.8m の島状地形の南東端で、東にひろがる凹地との境界付近にあった。また、考古遺構からはイネの植物珪酸体が検出された。湿地であった凹地がヒトにより水田として利用されていたことを示すものである。

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査では株式会社アーキジオに、火山灰分析では古澤地質株式会社の古澤　明氏に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤　茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

古澤　明 , 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析 , 地質学雑誌 , 101, 123-133.

古澤　明 , 2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別 , 地質雑 , 109, 1-19.

石黒立人・蔭山誠一 , 2007, 伝法寺野田遺跡 , 愛知県埋蔵文化財センター 平成 18 年度 年報 , 愛知県埋蔵文化財センター , 10-11.

蔭山誠一・鬼頭　剛・鈴木正貴 , 2015, 五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観 , 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第 16 号 , 愛知県埋蔵文化財センター , 69-88.

町田　洋・新井房夫 , 2003, 新編　火山灰アトラス［日本列島とその周辺］, 東京大学出版会 , 336p.

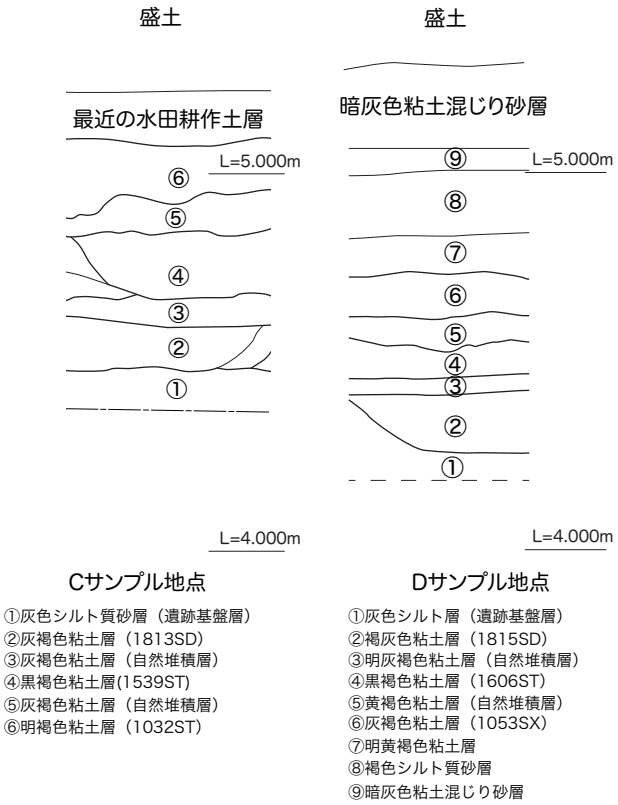


図 31　伝法寺野田遺跡 06 区 C サンプル地点と D サンプル地点における地質柱状図

第6章　総　括

第1節　伝法寺野田遺跡の遺構変遷

伝法寺野田遺跡の遺構変遷について、既報告の遺構と本報告の遺構を合わせて検討したのが図12・図32～図35である。

○弥生時代前期～弥生時代中期（図12）

既報告の調査区と10区では、この時期の遺構は確認されておらず、06区の3面と4面で確認された水田遺構と溝、06区北側の2613SKがある。4面の溝2588SDは3面の1814SDの下にほぼ同一の軌道をもつもので、4面の水田遺構は3面の水田遺構と連続性をもつものと考えられる。出土遺物がなく、3面で出土している弥生土器以前の遺構と考えられる。

○弥生時代中期中葉後半～古墳時代（図32）

06区の2面で確認された水田遺構と溝、既報告の98B区の南側の水田遺構、98B区北側にあるSD18～SD20・SD25～SD29、99区SD10・SB01～SB07・SK30～SK38、02区南端部にあるSD12、06区の水田遺構と1062SD・1040SK、10区102SDがある。既報告の98B区南側の水田遺構と06区2面の水田遺構は、同一層順で隣接する調査区において検出されたものであるので、同時に存在した遺構と考えられる。しかし、98B区において確認されたSD18～SD20・SD25～SD29の続き部分は、隣接する06区において十分に留意して調査したが確認することができず、これらの溝の調査については、検証もできておらず、調査の方法などで課題が残った。但し、98B区の溝と02区SD12は98B区と06区の水田遺構の軸線と概ね対応しており、水田遺構と関係する遺構の可能性がある。また、既報告において弥生時代中期の環濠の溝と想定された02区SD10は10区102SDからつながり、南にある06区1062SDにつながる溝である可能性が高くなり、06区の水田遺構に伴う用水路の可能性が高くなった。また、これに伴い02区SB01～SB07も、竪穴建物ではなく水田遺構の下部である可能性があり、06区北側の2面の下部にて同様の遺構を確認し、検証を行った。

○古代～中世前半の遺構（図33）

06区の水田遺構（1028ST～1039ST・1041ST

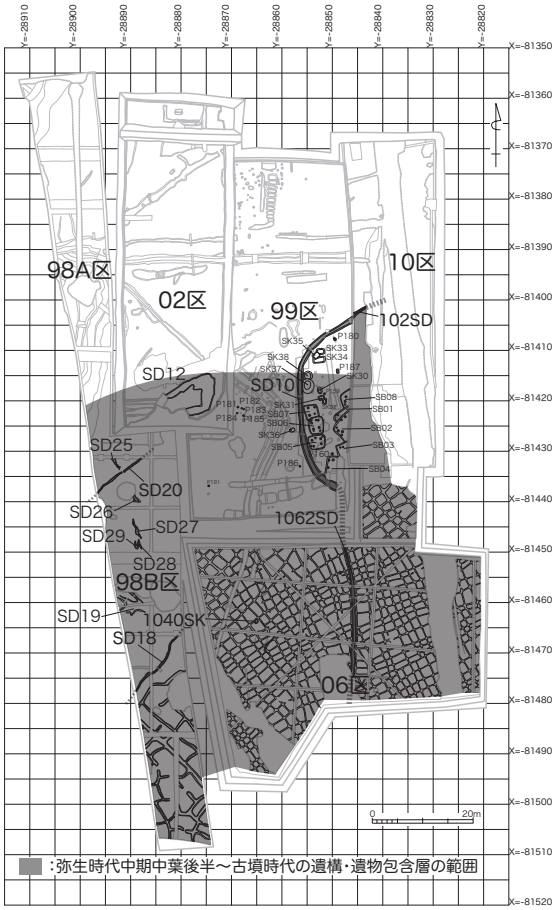


図32　弥生時代中期～古墳時代の遺構（1：1,500）

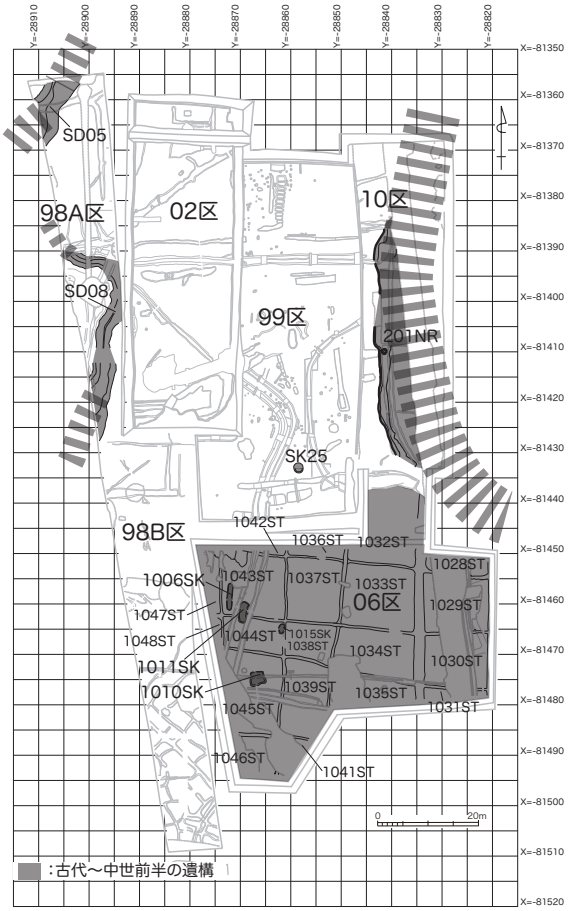


図33　古代～中世前半の遺構（1：1,500）

～ 1048ST)、中世の方形土坑 1006SK・1010SK・1011SK、10 区の自然流路 201NR がある。既報告では、98A 区 SD05・SD08、99 区 SK25 がある。これらの遺構は、奈良時代から室町時代にかけて形成されたもので、同時に存在した遺構ではない。10 区 201NR は自然流路の可能性が高く、江戸時代にかけてゆっくりと埋没したものと考えられた。また、99 区 SK25 は、中世の方形土坑と関係する遺構の可能性がある。

○江戸時代後期の遺構（図 34）

06 区 1002SD・1003SD、水田遺構（1025ST ～ 1027ST）がある。既報告では、98A 区 SD06、99 区 SD14・SD15、02 区の畦畔状遺構・SD08 がある。既報告で中世の溝とされた 02 区の SD14 と SD15 は、それぞれ今回の調査で江戸時代の溝と判明した 06 区の 1003SD と 1002SD につながるようであり、06 区 1003SD は 98B 区南端にある溝に続く可能性が高い。また 99 区 SD15 は北西側で 02 区 SD08 につながり、さらに 98A 区 SD06 と交差する溝状遺構につながることが判明した。06 区の調査では、この並行する 2 条の溝に新旧関係があり、水田に伴う溝である可能性が高い。また 98A 区 SD06 は 02 区 SD08 より新しい遺構である可能性が高く、02 区にある畦畔状遺構に隣接する遺構になる可能性が考えられた。

○江戸時代末～近代以後の遺構（図 35）

06 区 1001SK・1004SD・1005SD・1012SD・1019SD ～ 1021SD、10 区 003SD・005SD ～ 007SD と水田遺構（010SN ～ 013SN）がある。既報告では、98A 区 SD07 と溝 2 条、98B 区の溝 6 条、99 区 SD06 ～ SD08・SD19・SK01 とハザ状遺構、02 区 SD01・SD02・SD05 ～ SD07・SD09・SD10 がある。06 区 1019SD・1020SD は、10 区 007SD につながる可能性があり、最も新しい遺構の一つである。また 06 区 1012SD は西にある 98B 区の溝につながり、10 区 005SD・006SD は 99 区 SD07 につながり、さらに西にある 02 区 SD05 に続く。これらをはじめ、他のほぼ軸線を同じくする東西方向にのびる溝は、全てが同時存在したものではないが、南北 40m ～ 45m 前後の間隔で掘削されているようである。

第 2 節　古代の条里型水田遺構と地割り

ここでは、古代から中世前半期の遺構とした条里型水田遺構と周辺地域の地割りとの関係について検討する。図 36 は愛知県公文書館所蔵の明治 17 年作成の地籍図（図化を行ったのは、丹羽郡伝法寺村・同小山村・西春日井郡野寄村・同岩倉村・同北島村・同川井村・同鍛冶ヶ一色村である。）を地目に応じて解析し、伝法

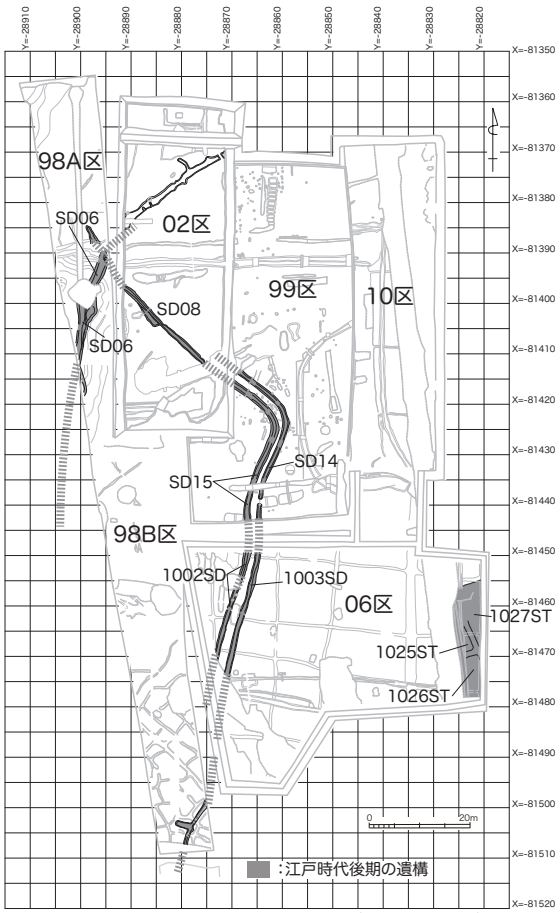


図 34　江戸時代後期の遺構（1：1,500）

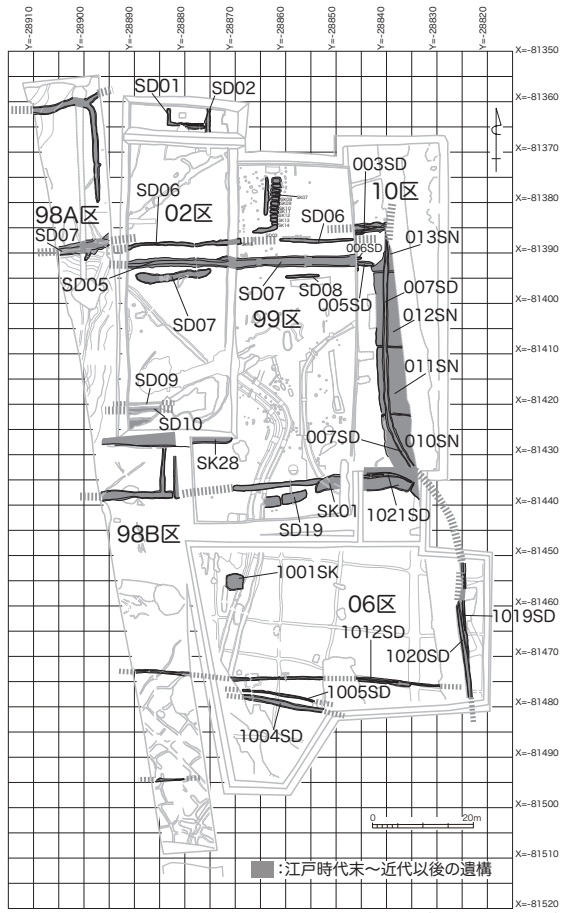


図 35　江戸時代末～近代以後の遺構（1：1,500）

寺野田遺跡と権現山遺跡の調査区と古代の遺構を合成した。

伝法寺野田遺跡周辺の地域は、歴史地理学の研究により尾張地域で最も条里地割りが残る地域として、研究・紹介されてきた地域である（水野 1971、金田 1973、金田 1985 など）。これまでの歴史地理学的研究では、比較的地割りが明瞭に判別できる道や水路、村境、地名などを抽出することにより条里遺構の復元が行われてきており、条里型地割りの分布などの特徴が明らかにされている。伝法寺野田遺跡周辺では、本遺跡の北東から東にかけて、条里地割りの可能性がある正方位の地割りが顕著にみられるが、本遺跡地点も含めて遺跡の西と北西にはみられない。

しかし、06 区ではほぼ正方位を志向する水田遺構が 20 筆確認されており、大畦畔と思われる 1052SX はほぼ正方位を示すものである。この 1052SX の軸線から 1 町の東西幅である約 109m の間隔の位置にある正方位を示す道や用水路はなく、地籍図から識別し易い区画は、古代以後に改変されて形成されてきたものと思われる。実際に道や用水路、村境の間郭は 100m 前後で 95m ～ 120m の幅があり、一里（6 町）では規模が小さい区割りとなっている。

地籍図における正方位を示す地割りは、田が卓越する箇所では比較的確認できるが、田に宅地や畑などが混在する箇所ではあまり確認できない。本遺跡では後者にあたり、古代～中世前半の 1052SX をはじめとする遺構の軸線は正方位の軸線をもつ区画であるが、江戸時代後期の溝は斜方位の軸線をもち、近代以後の溝は再び正方位の軸線をもつ。一方、本遺跡の北東 250m の地点にある権現山遺跡（早野編 2003）も、後者の地割りの箇所にあたり、正方位の軸線をもつ北島村の区画と斜方位の軸線をもつ野寄村の区画がある。発掘調査では、奈良・平安時代の溝 5 条、鎌倉・室町時代の溝数条、江戸時代の溝 7 条があり、全て正方位に対して斜方位の軸線をもつ溝であった。江戸時代の溝は野寄村と北島村の村境に沿った軸線をもつようである。

以上のように、本遺跡周辺の条里地割りの可能性がある正方位の地割りは、古代にさかのぼり形成された可能性もあるが、周辺全域を覆う区画としては確認できない。そして現在に至る地割りは、古代以後の地形変遷の中で開発・形成されてきたもので、微地形に応じた地割りなど複数の動機による地割りの存在とその変遷が想定される。

第 3 節　水田遺構と植物珪酸体分析の結果

最後に、発掘調査で検出された水田遺構と植物珪酸体分析との対応関係について述べたい。

第 5 章の第 4 節でも述べているが、本報告添付 CD-ROM に掲載される鈴木 茂氏の植物珪酸体分析によれば、06 区 1 面の古代～中世前半期の条里型水田遺構と 06 区 2 面の弥生時代中期中葉後半～古墳時代の小区画水田遺構、中世以後の水田遺構の地層ではイネの機動細胞珪酸体が確認され、水田耕作が行われていた可能性が高いことが指摘されている。しかし、鈴木氏が分析した 4 地点のすべてで、06 区 3 面の弥生時代前期～弥生時代中期の小区画水田遺構の地層からは、イネの機動細胞珪酸体が極少量検出されるのみで、水田耕作の可能性は低いとされている。

また、本報告添付 CD-ROM に掲載されている森 将志氏の植物珪酸体分析では、10 区北側地点の近代以後の水田遺構と弥生時代中期中葉後半の遺物包含層、10 区南側地点の近代以後の水田遺構とその下にある中世以後の自然流路（201NR）において、イネの機動細胞珪酸体が確認された。特に江戸時代以後と考えられる地層からはイネの籾殻片が確認された。

以上の分析結果から、本報告にある弥生時代中期中葉以後の水田遺構に関しては植物珪酸体分析からも支持される結果となったが、06 区の 3 面で検出した弥生時代前期～弥生時代中期の小区画水田遺構においては支持されない。06 区 3 面の水田遺構に対応する地層では、層相が砂質になる等の別の要因による影響や遺構の再検討を含めた今後の検証が必要と考えられる。

参考文献

水野時二 1971「第 8 章 尾張の条里制とその歴史地理学的研究」『条里制の歴史地理学的研究』株式会社大明堂
金田章裕 1973「尾張の条里と土地利用ーその基礎的検討ー」『人文地理』第 25 巻第 3 号、人文地理学会
金田章裕 1985「第 2 章 1 奈良時代の開発と条里プラン」『条里と村落の歴史地理学研究』株式会社大明堂
早野浩二編 2003『権現山遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 110 集」財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁 2007『伝法寺野田遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 141 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

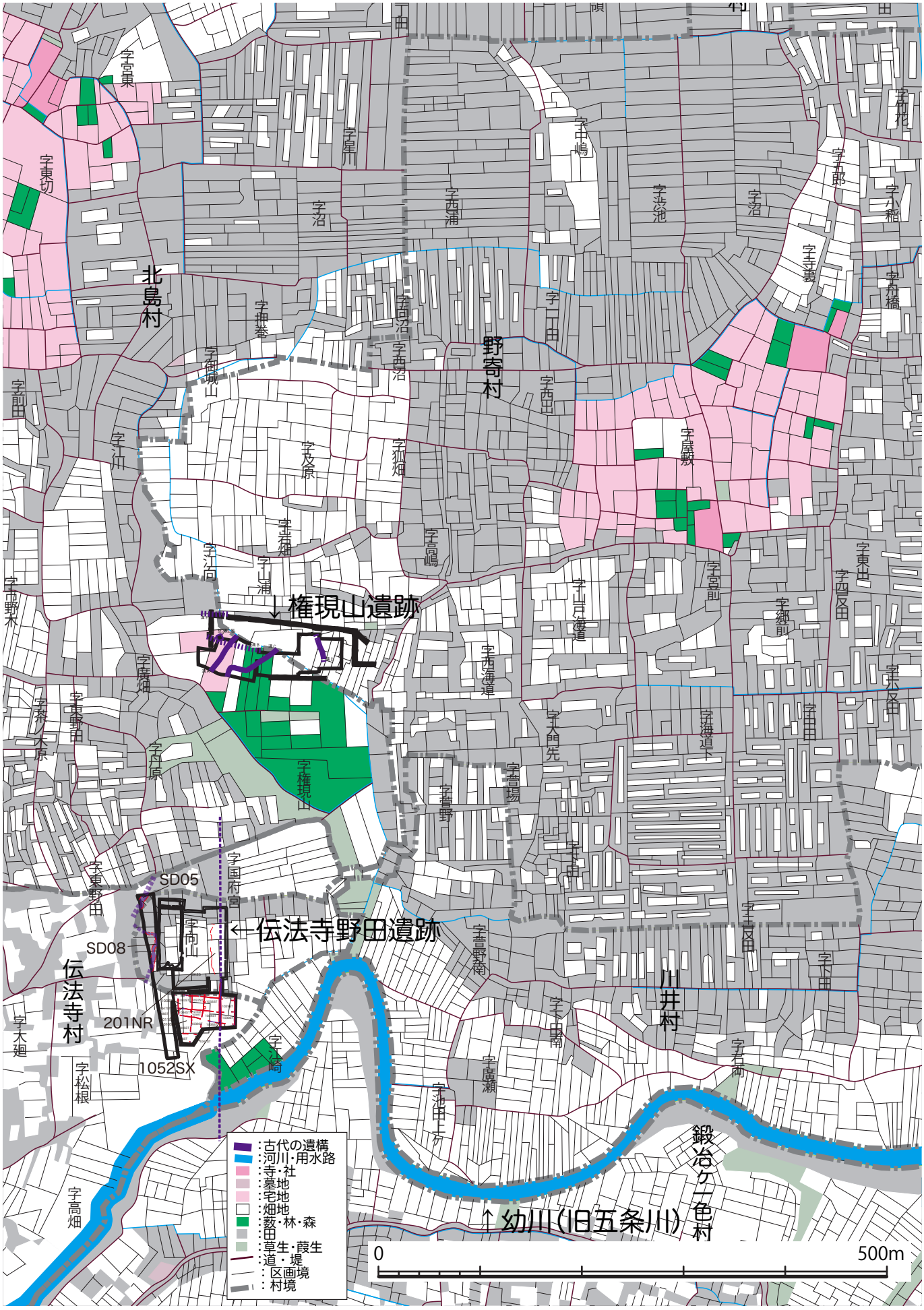
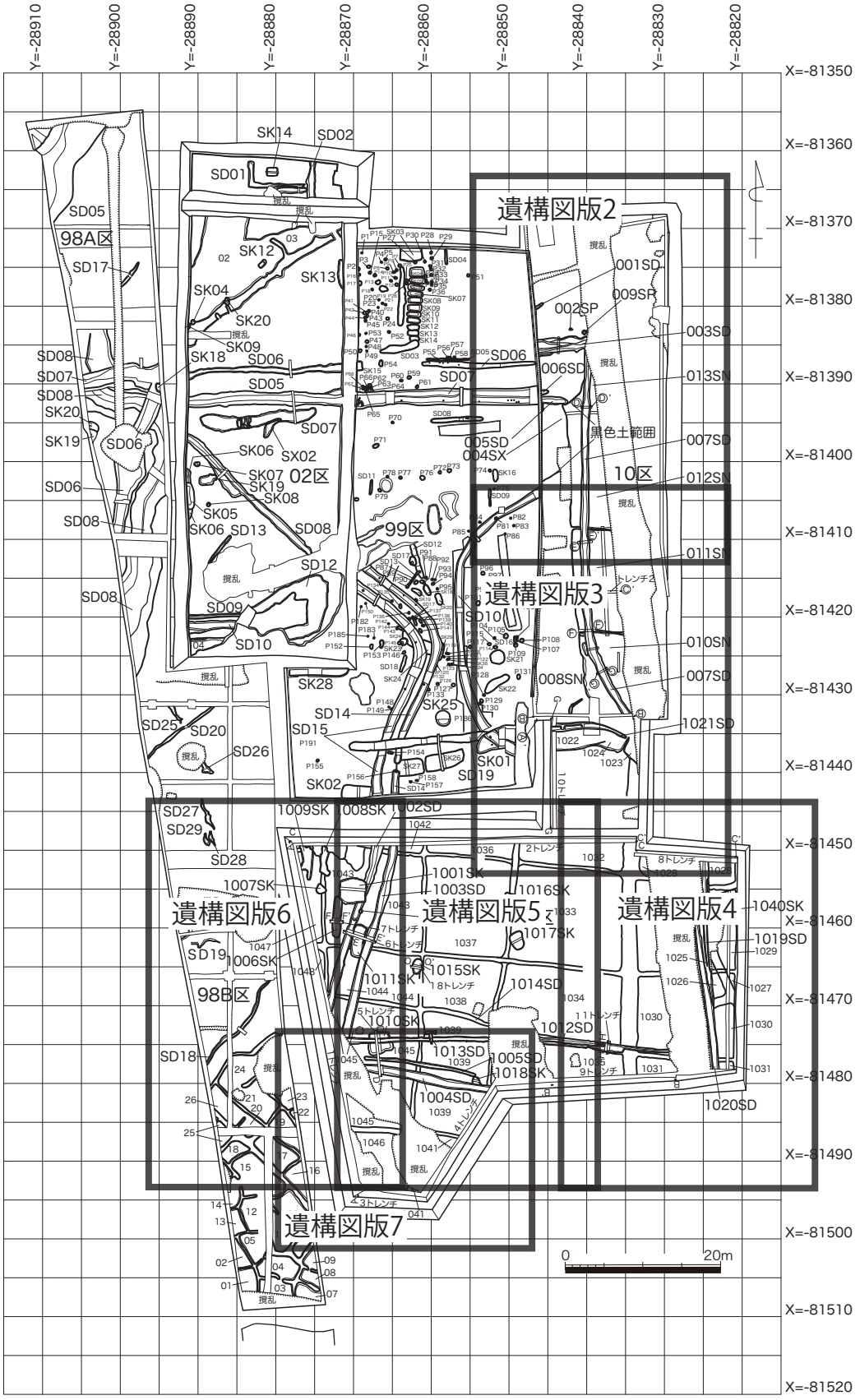


図 36　古代の伝法寺野田遺跡と周辺の地籍図（1：5,000）

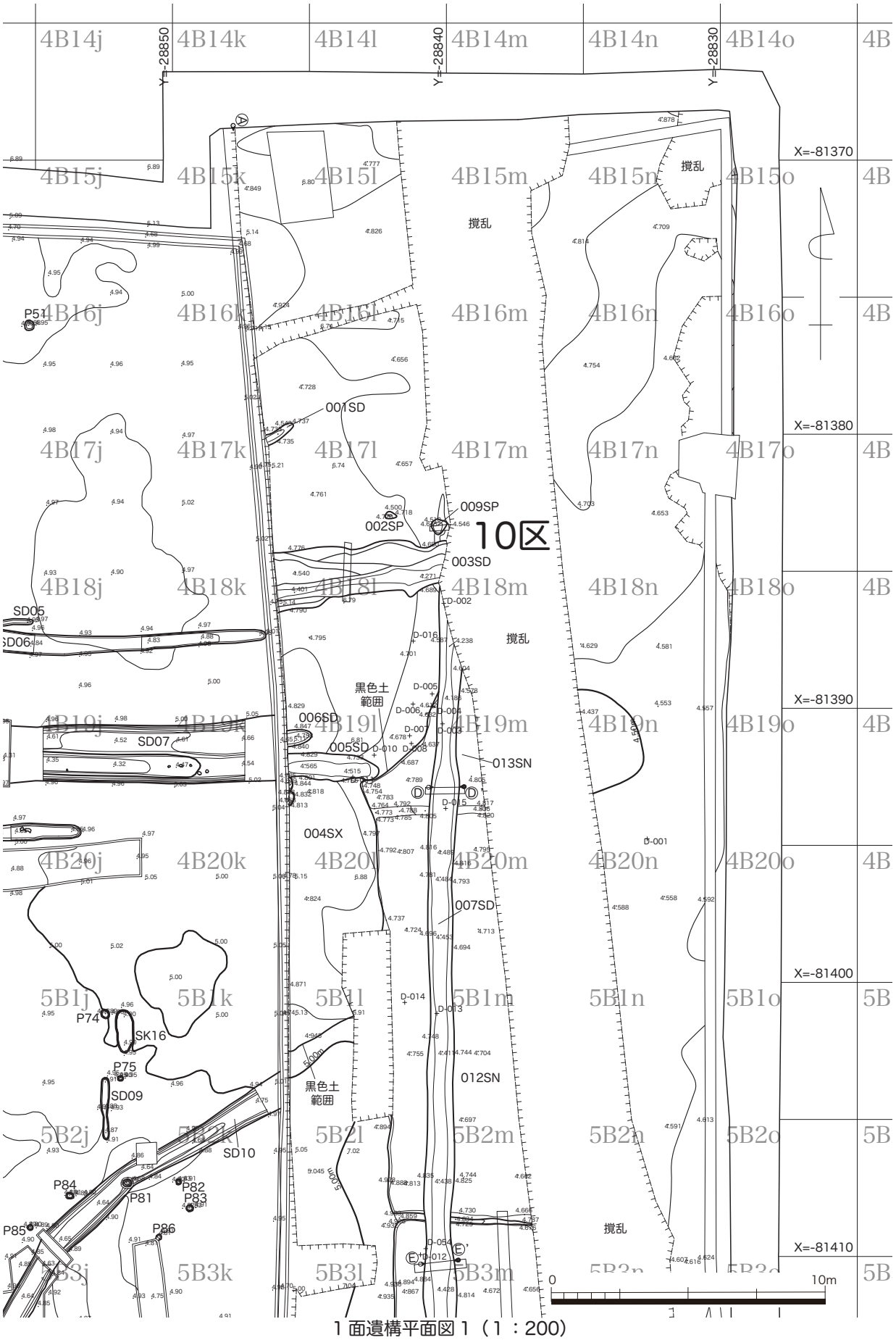
遺 構 図 版

遺構図版 1



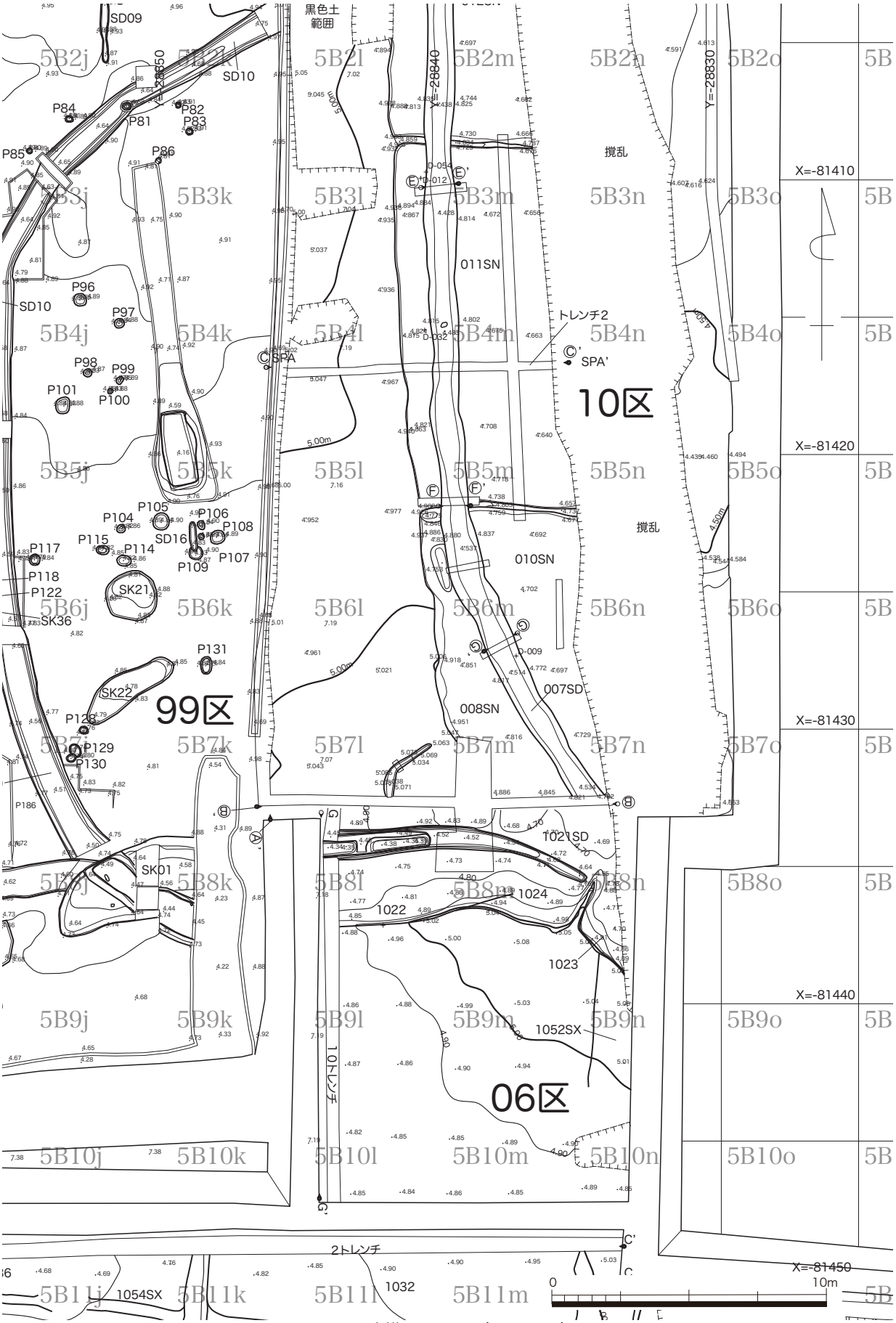
1 面遺構平面図・1 面 200 分の 1 遺構平面図図割り（1 ：800）

遺構図版２



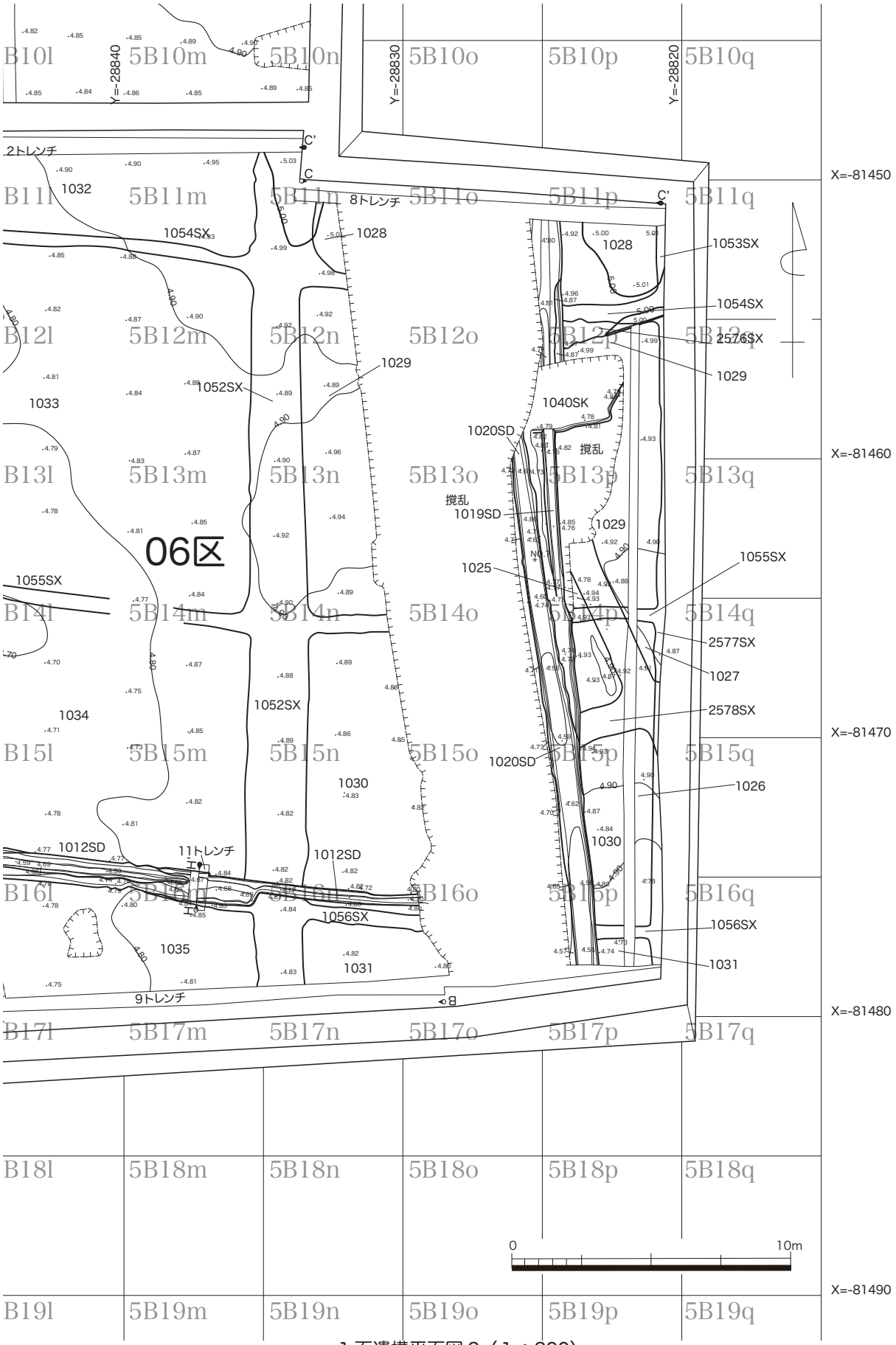
１面遺構平面図１（１：200）

遺構図版 3



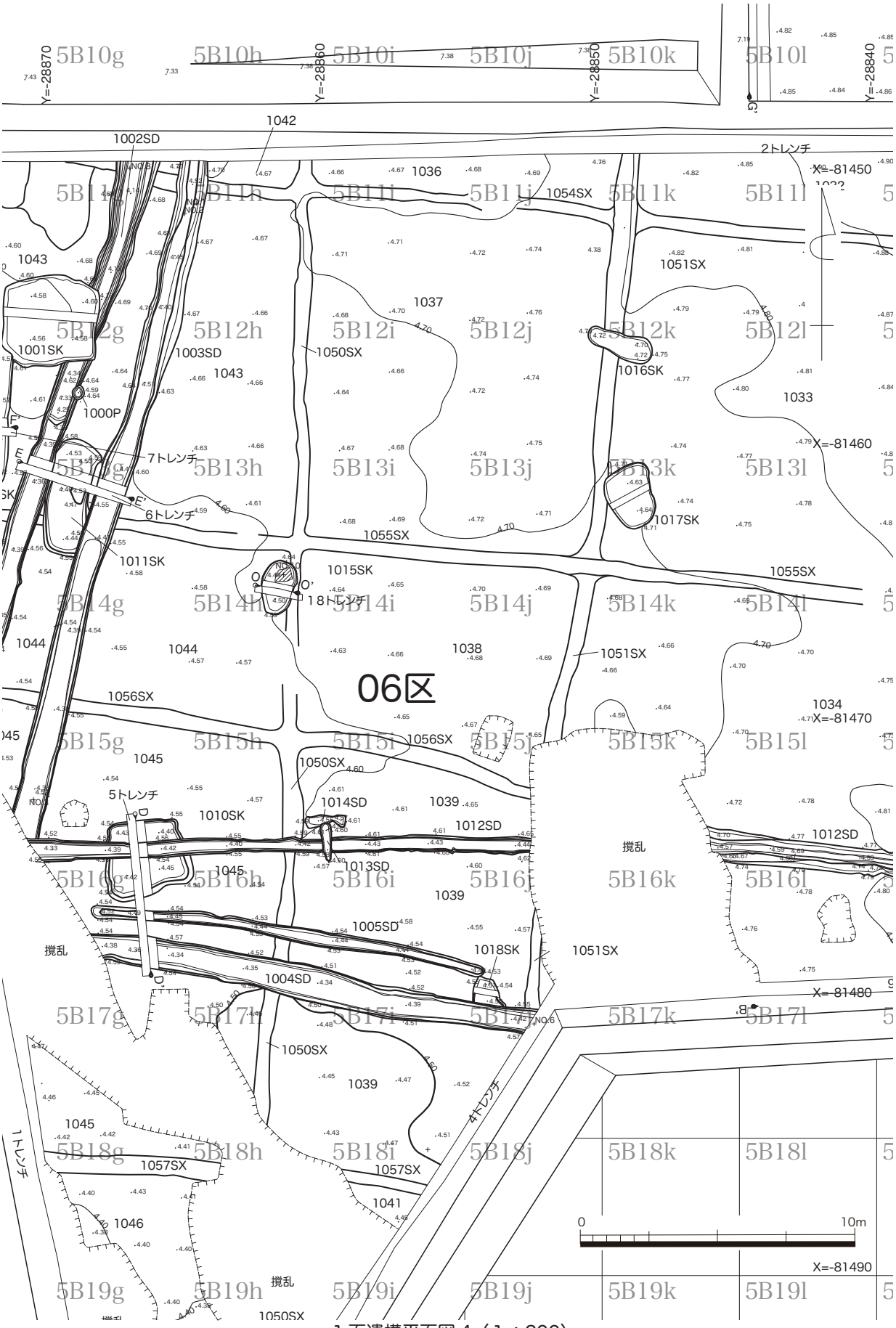
1面遺構平面図２（1：200）

遺構図版４



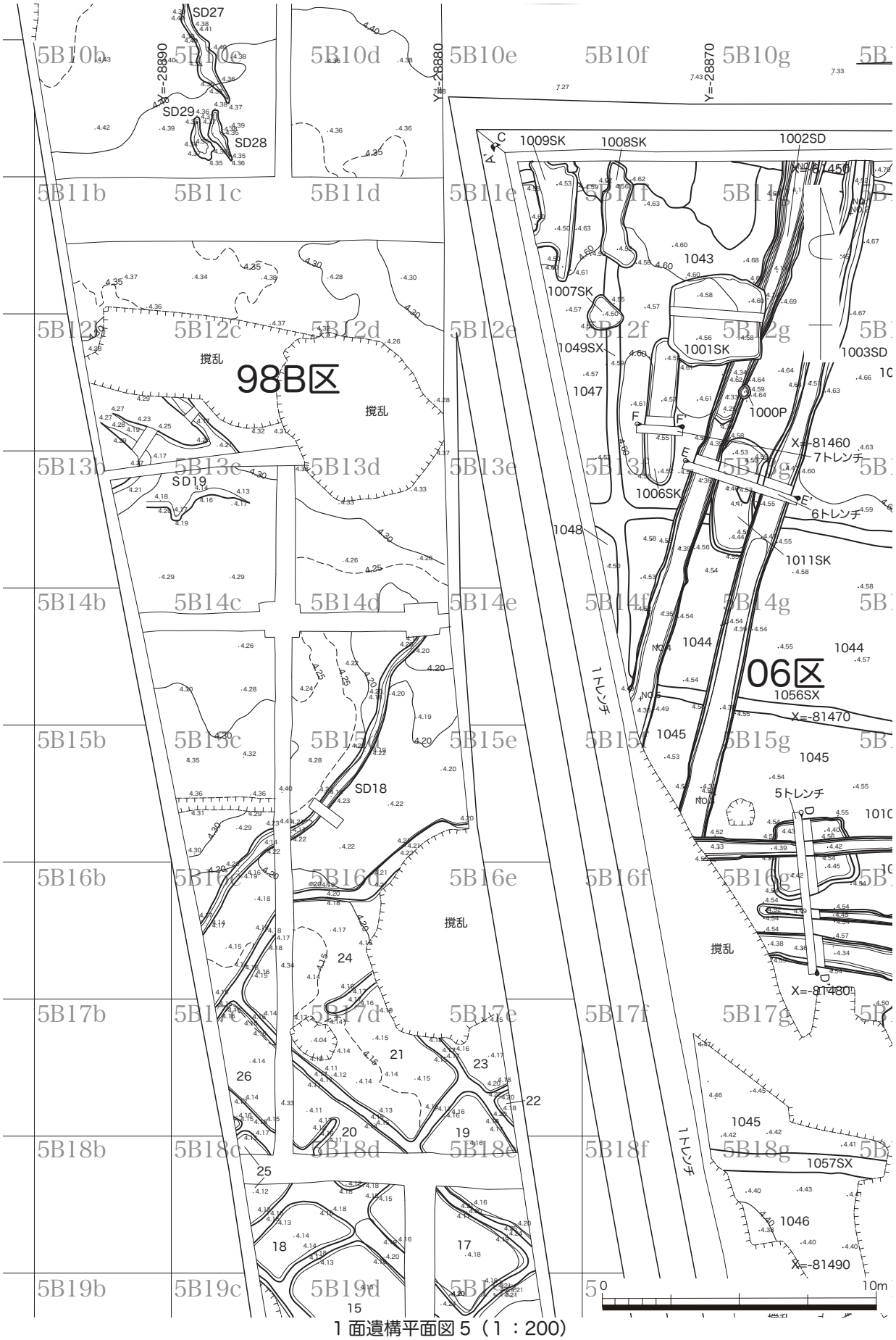
１面遺構平面図３（１：200）

遺構図版 5



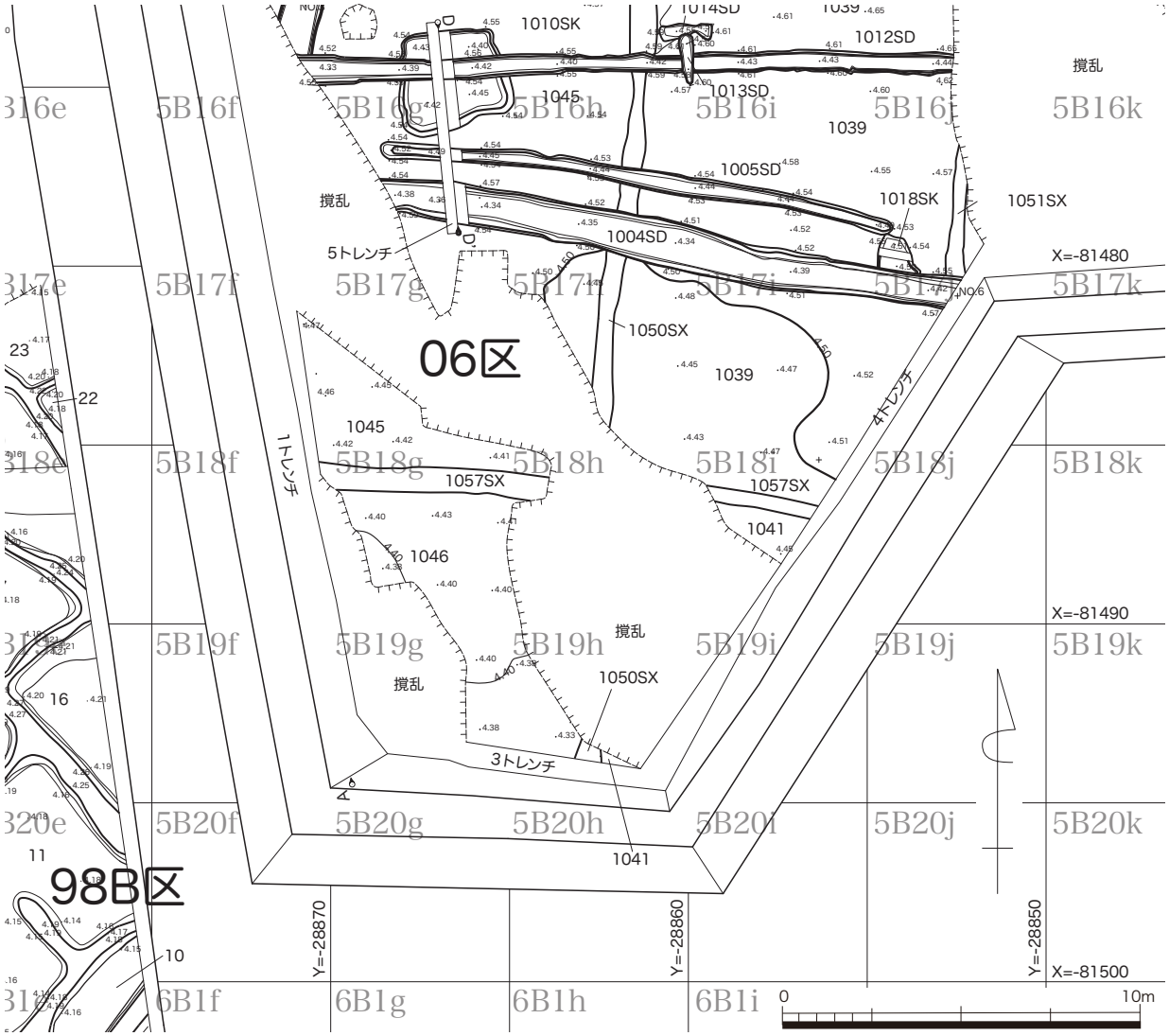
1面遺構平面図 4（1：200）

遺構図版 6

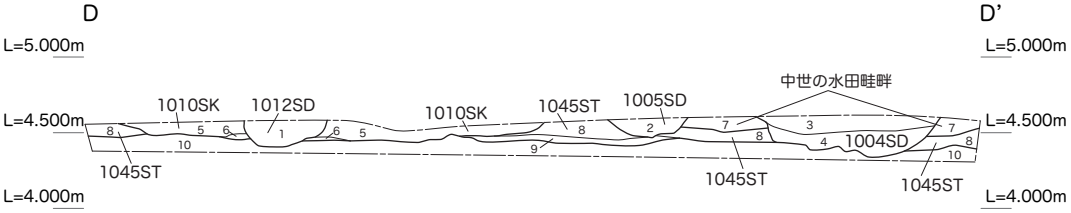


1面遺構平面図5（1：200）

遺構図版 7



06区5トレンチ東壁

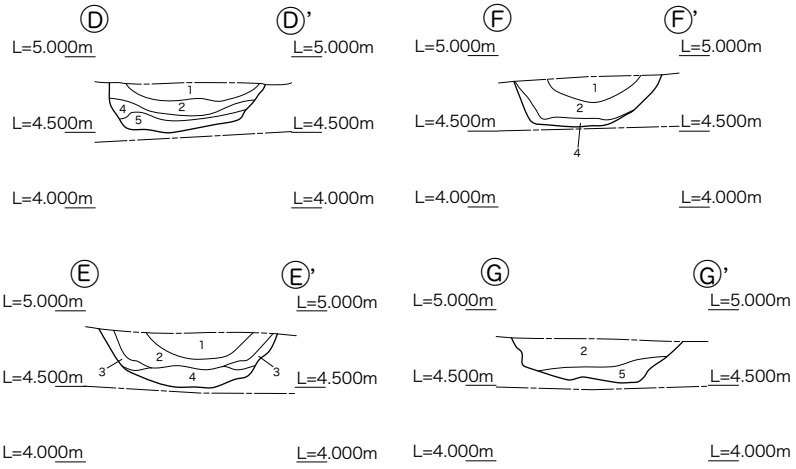


06区5トレンチ東壁土色

1, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
2, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂が混じる斑土
3, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
4, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
5, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂が混じる斑土
6, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
7, 5Y4/3暗オリーブ色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
9, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
10, 10YR4/1褐灰色細粒砂

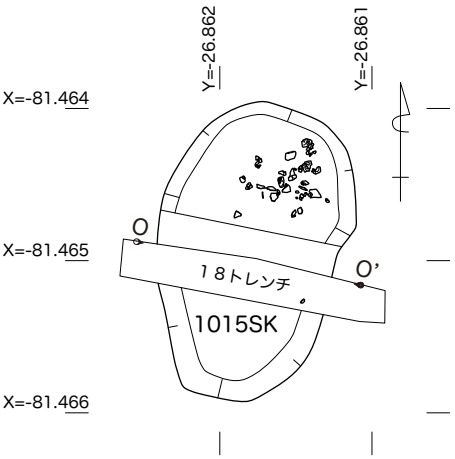
1 面遺構平面図 6（1 ：200)、5 トレンチ東壁（1 ：50）

遺構図版 8

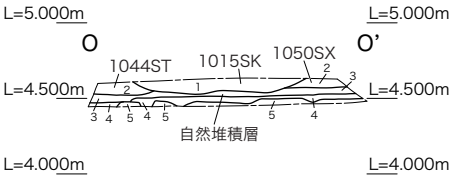


10区007SD土色

1. 2.5Y6/1 黄灰色 粘土 しまりあり(強) 粘性あり 径1～2cm灰白色粘土ブロックを5%含む
2. 2.5Y5/1 黄灰色 粘土 しまりあり(強) 粘性あり 径1～2cm灰白色粘土ブロックを10%含む
3. 5Y5/2 灰オリーブ色 粘土 しまりあり 粘性あり
4. 5Y5/1 灰色 粘土 しまりあり 粘性あり(弱) 径5～8cm炭灰色粘土ブロックを10%含む
5. 10Y5/1 灰色 粘土 しまりあり(強) 粘性あり 灰白色細粒砂を5%含む



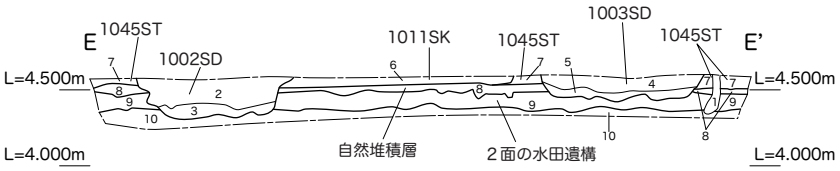
06区18トレンチ北壁



06区18トレンチ北壁土色

1, 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
2, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
3, 5Y4/3暗オリーブ色細粒砂
4, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂(ややシルト混じる)
5, 10YR4/1黄灰色細粒砂

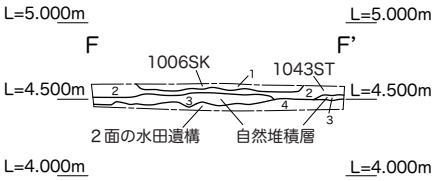
06区6トレンチ北壁



06区6トレンチ北壁土色

1, 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
2, 2.5Y6/1細粒砂
3, 10YR5/1褐灰色細粒砂に10YR4/1褐灰色細粒砂(ややシルト混じる)が混じる斑土
4, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(底の一部に白色細粒砂の互層あり)
5, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂に2.5Y5/3黄褐色細粒砂が混じる斑土
6, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂に5Y5/2灰オリーブ色シルトが混じる斑土
7, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
9, 10YR4/1褐灰色細粒砂(ややシルト混じる)
10, 10YR5/1褐灰色細粒砂

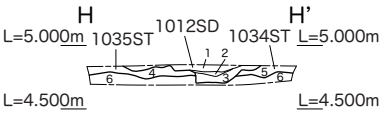
06区7トレンチ北壁



06区7トレンチ北壁土色

1, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂に2.5Y5/3黄褐色細粒砂が混じる斑土
2, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
3, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
4, 10YR4/1褐灰色細粒砂

06区11トレンチ西壁



06区11トレンチ西壁土色

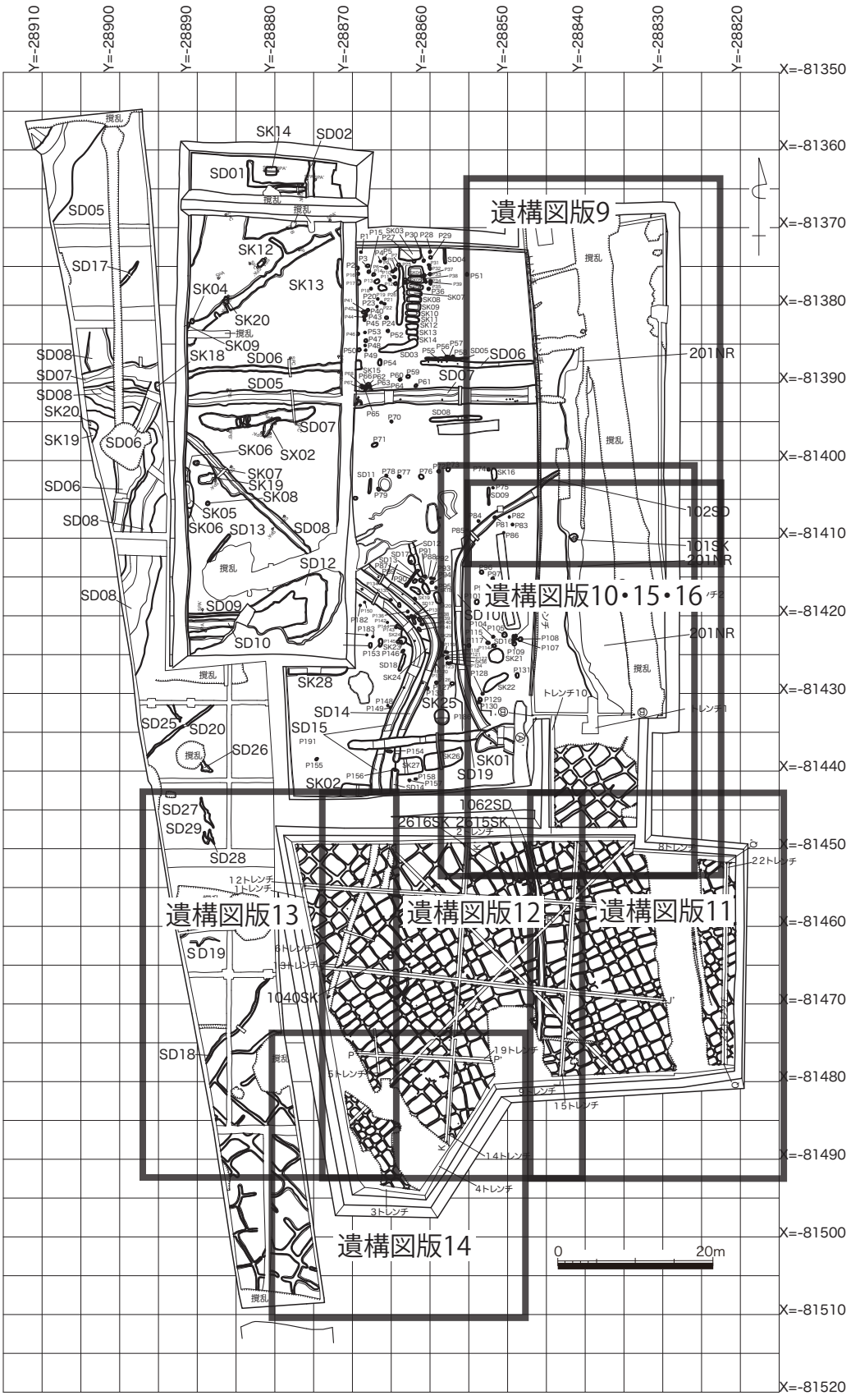
1, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
2, 5Y4/1灰色シルト
3, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
4, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
5, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
6, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂



10区007SD断面、06区1015SK・18トレンチ北壁、6トレンチ北壁、
7トレンチ北壁・11トレンチ西壁（1：50）

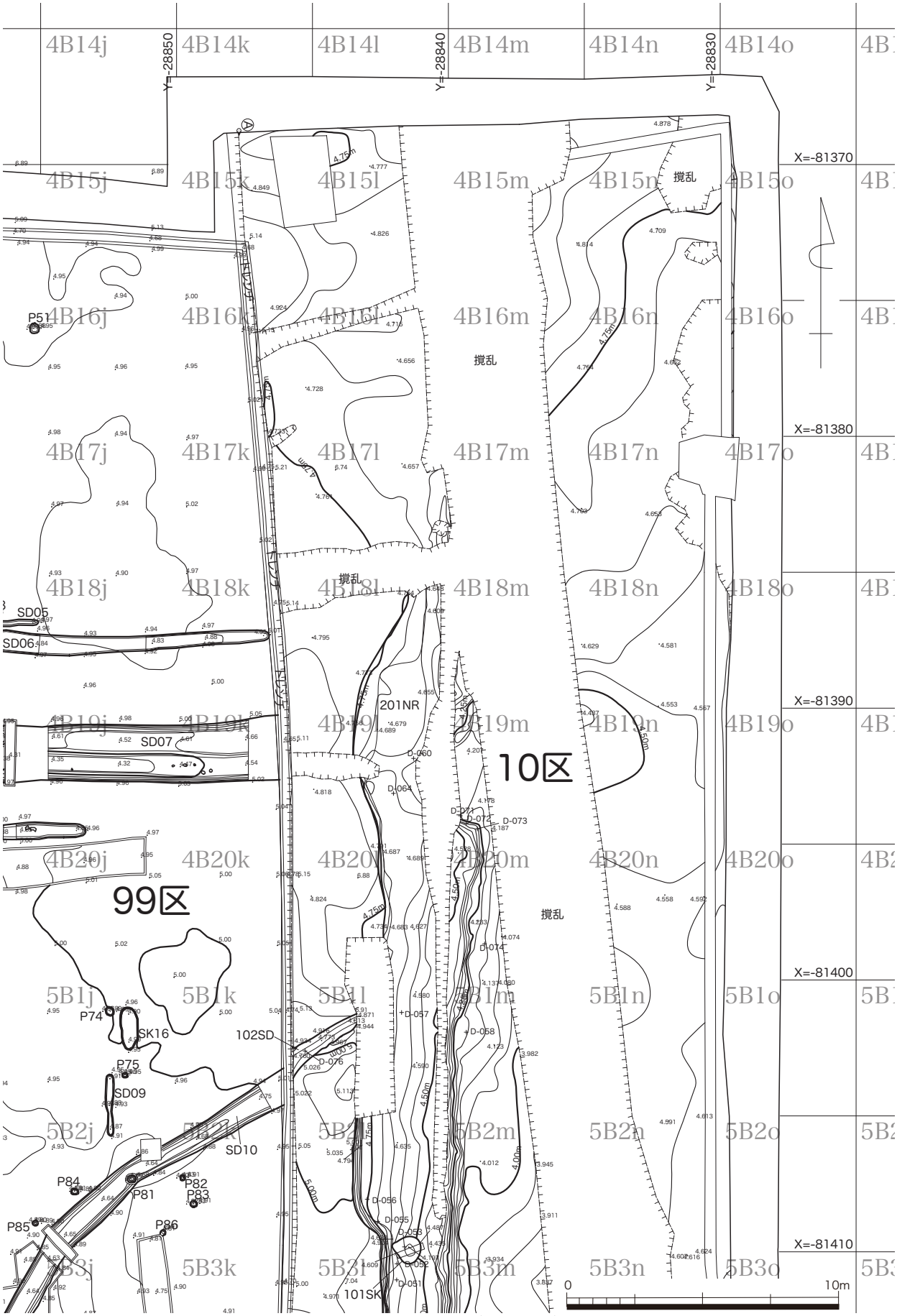
遺 構 図 版

遺構図版 9

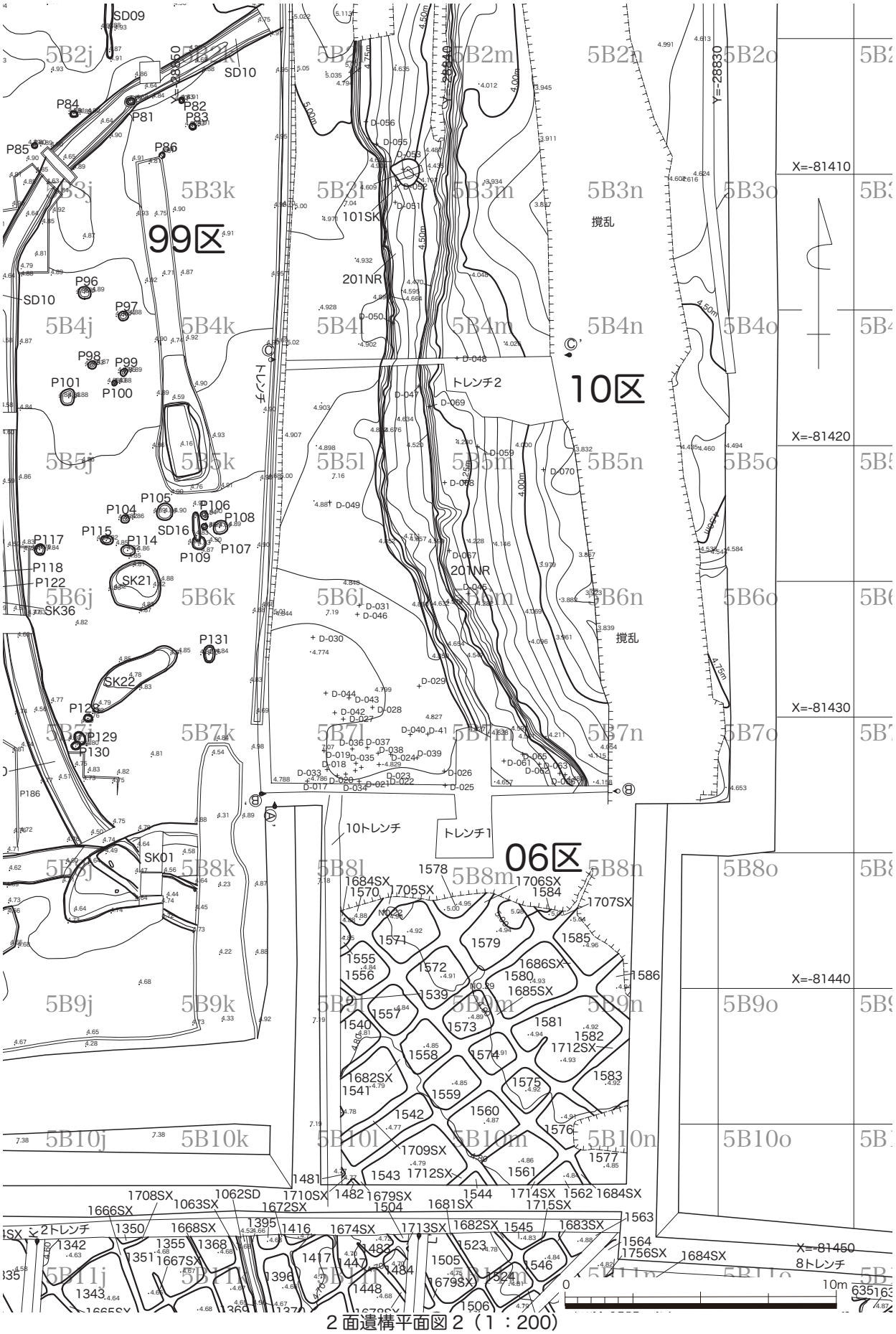


2 面遺構平面図・2 面 200 分の 1 遺構平面図図割り（1 ：800）

遺構図版 10

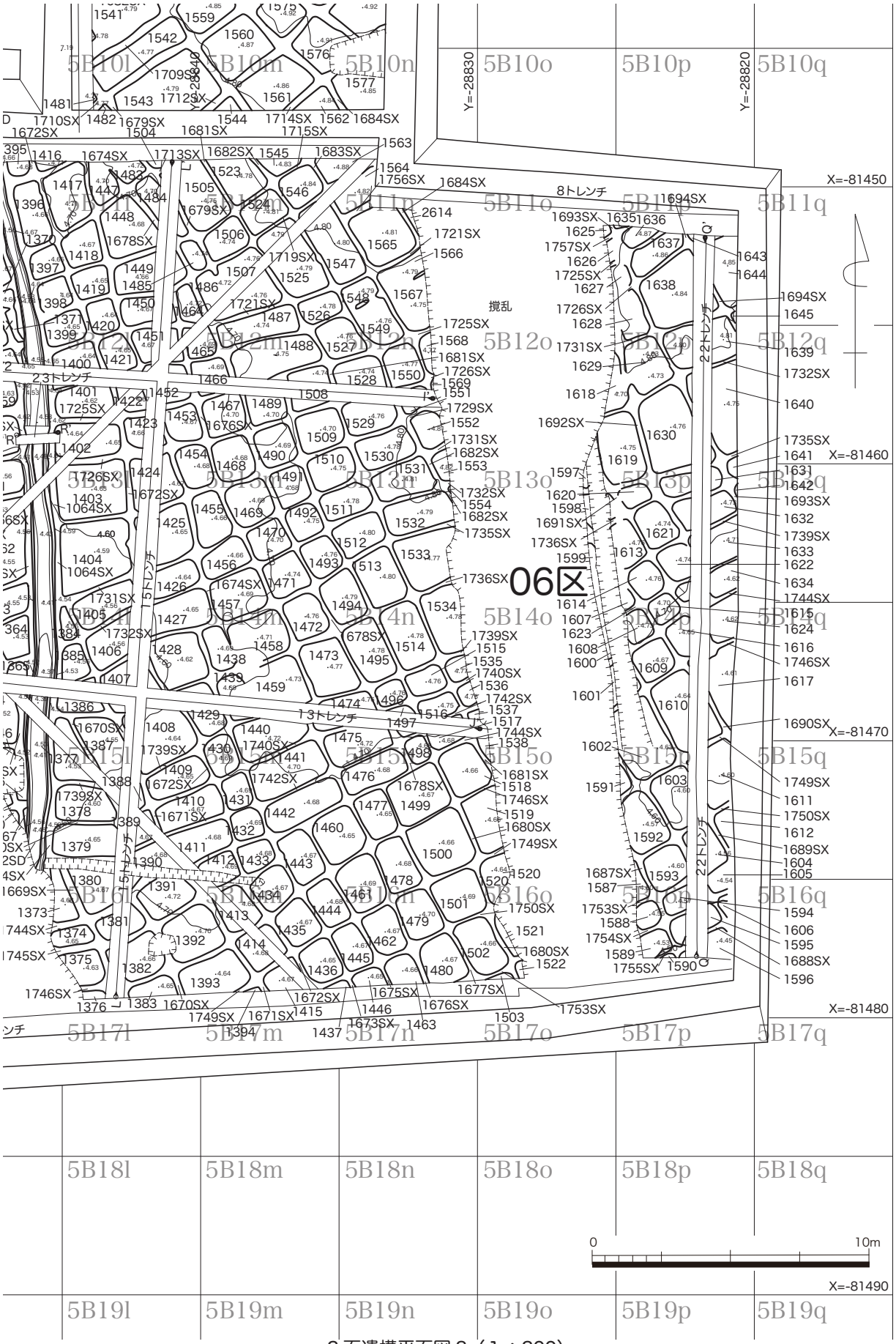


2面遺構平面図1（1：200）



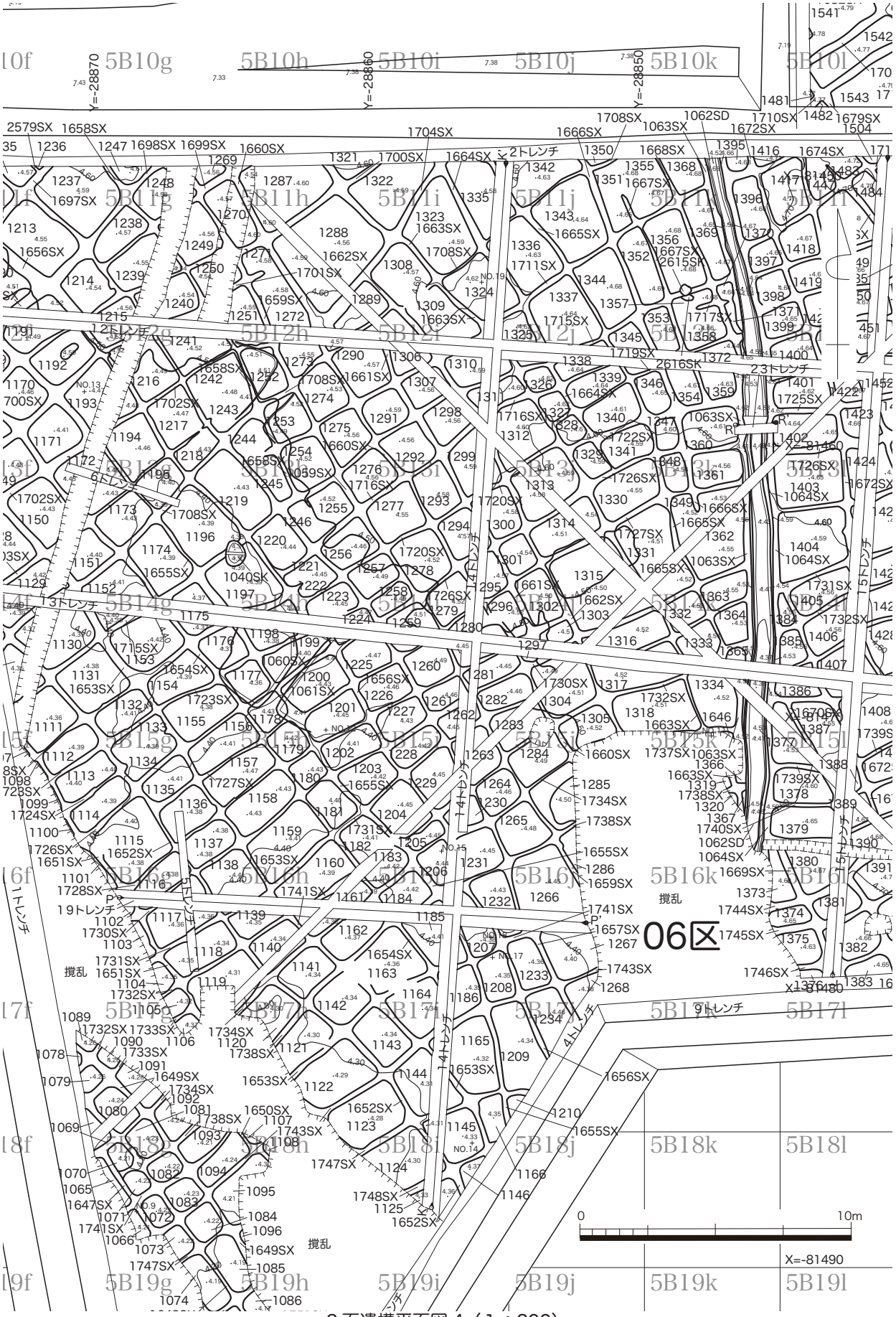
2面遺構平面図2（1：200）

遺構図版 12



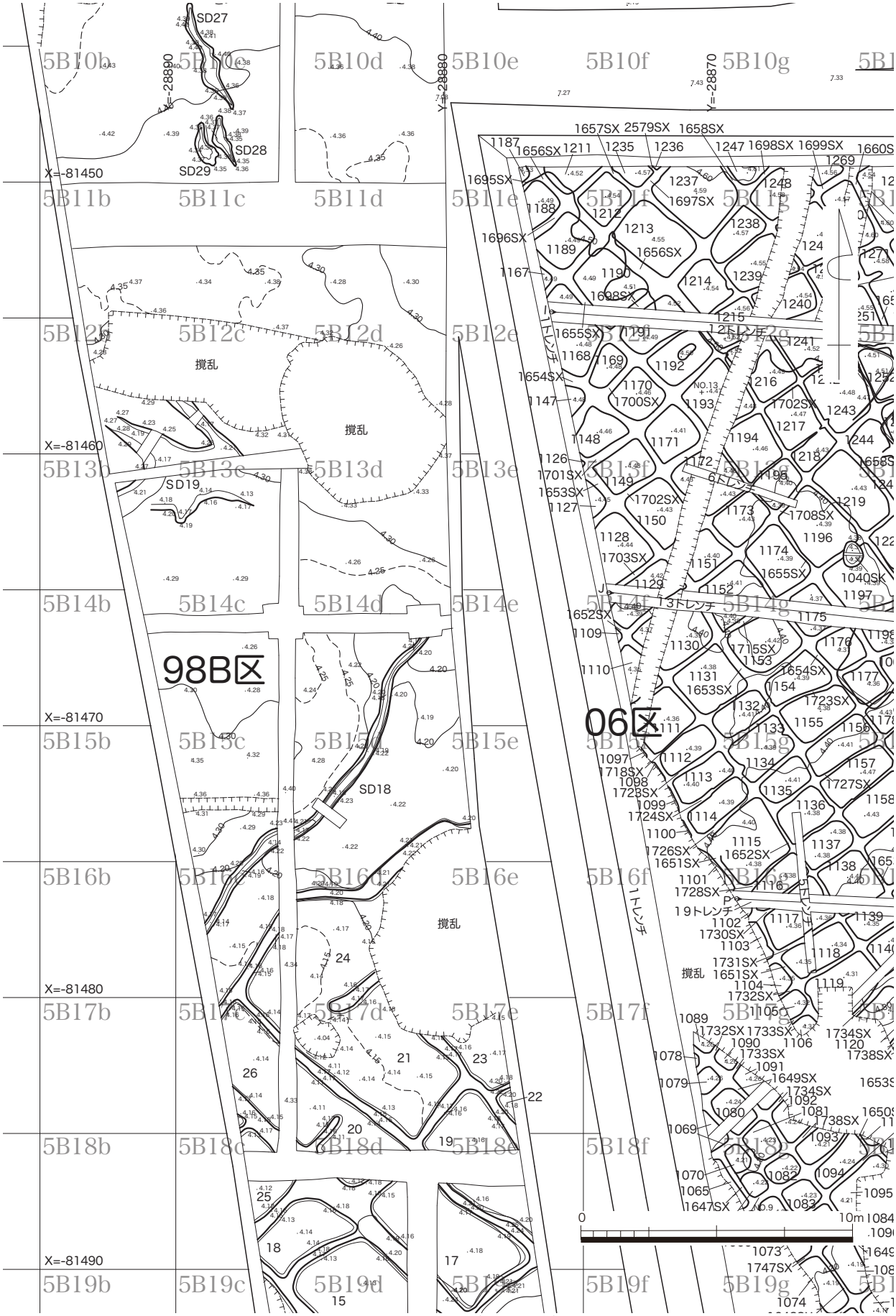
2 面遺構平面図 3（1 ：200）

遺構図版 13

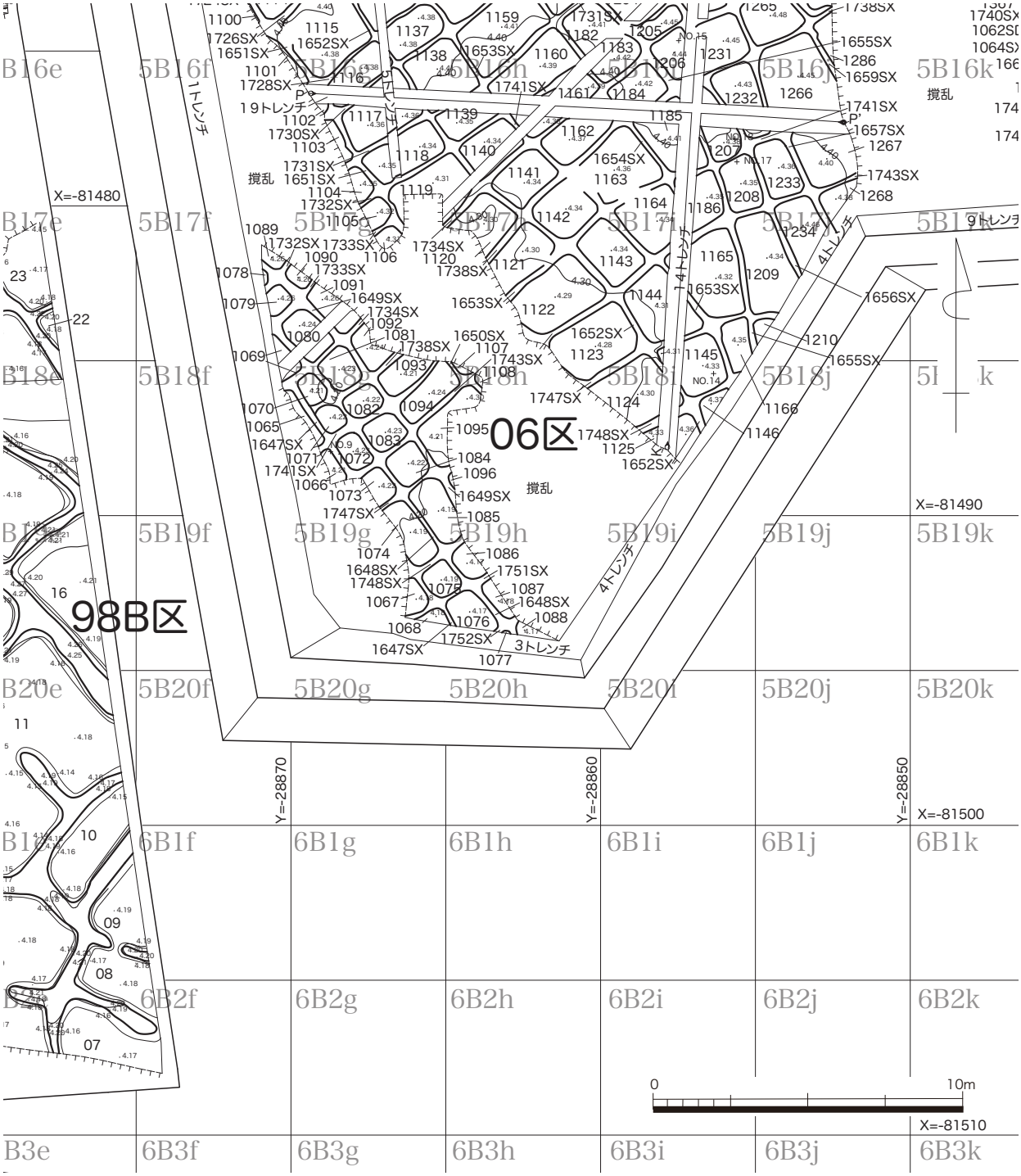


2面遺構平面図 4（1：200）

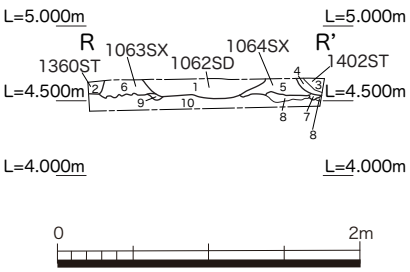
遺構図版 14



2 面遺構平面図 5（1：200）



06区23トレンチ北壁

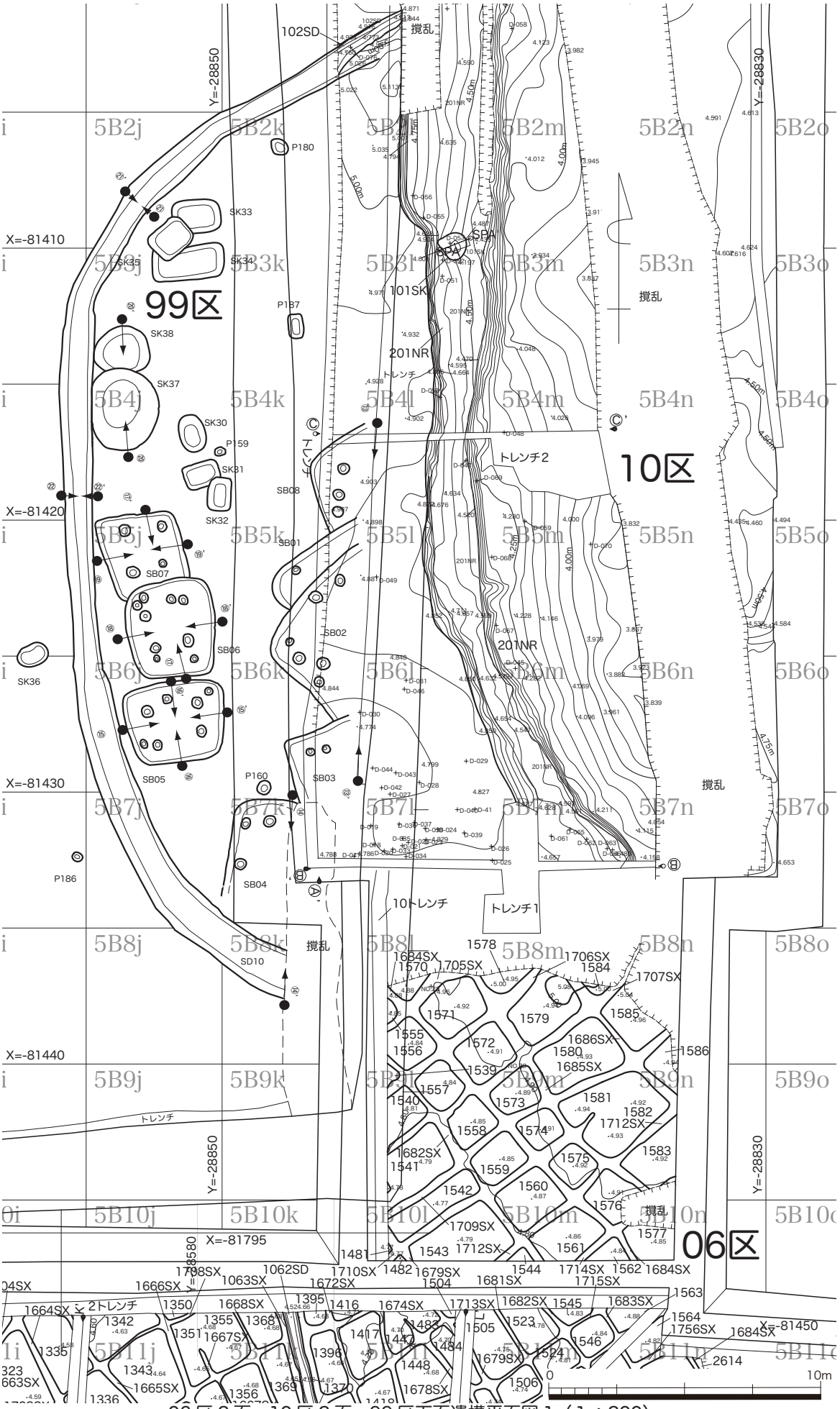


06区23トレンチ北壁土色

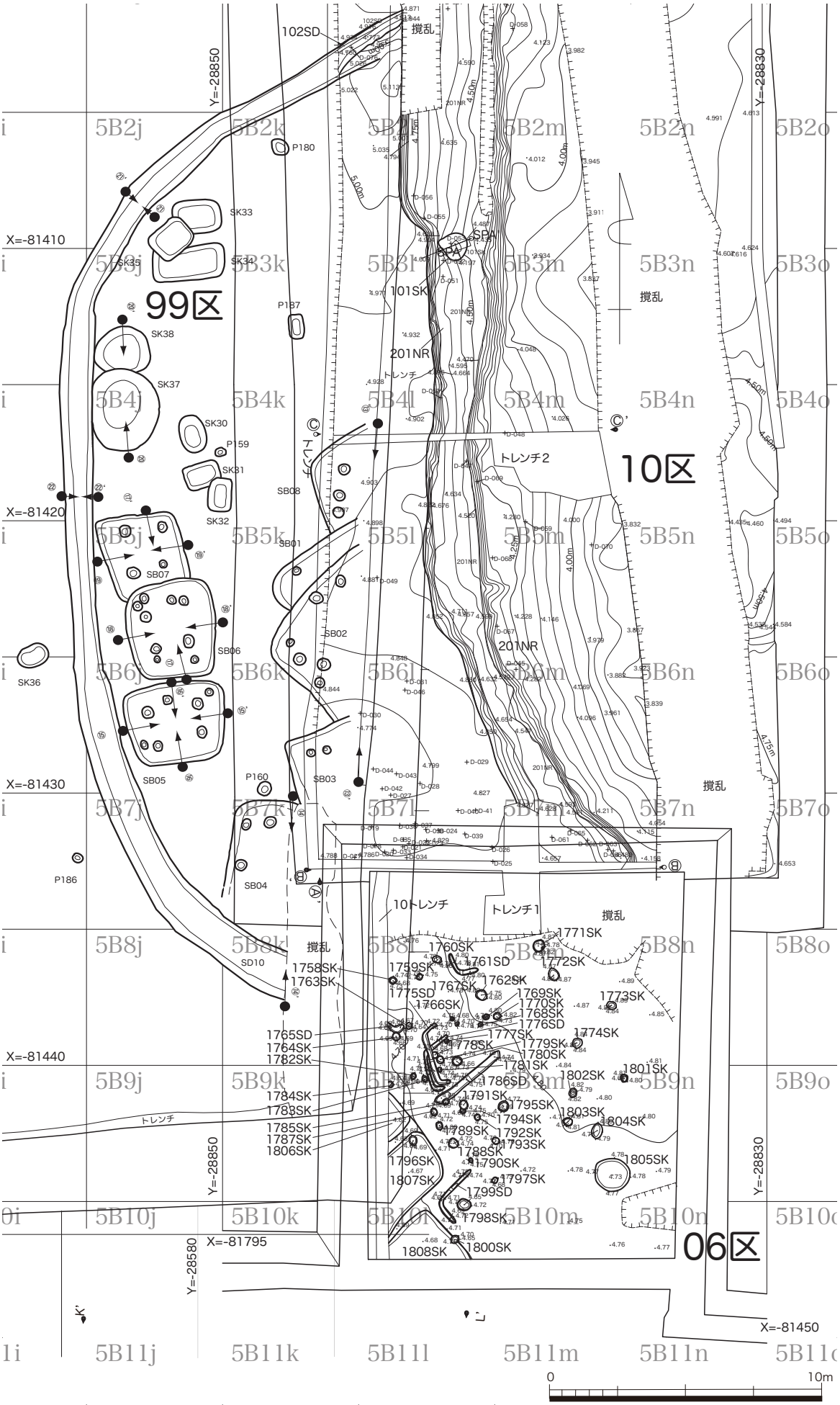
1, 10YR3/2黒褐色細粒砂
2, 10YR2/2黒褐色細粒砂
3, 10YR2/2黒褐色細粒砂
4, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
5, 10YR3/2黒褐色細粒砂
6, 10YR2/2黒褐色細粒砂
7, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
8, 7.5YR4/3褐色細粒砂(鉄斑が顕著な部分)
9, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
10, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂

2面遺構平面図6（1：200)、23トレンチ北壁（1：50）

遺構図版 16

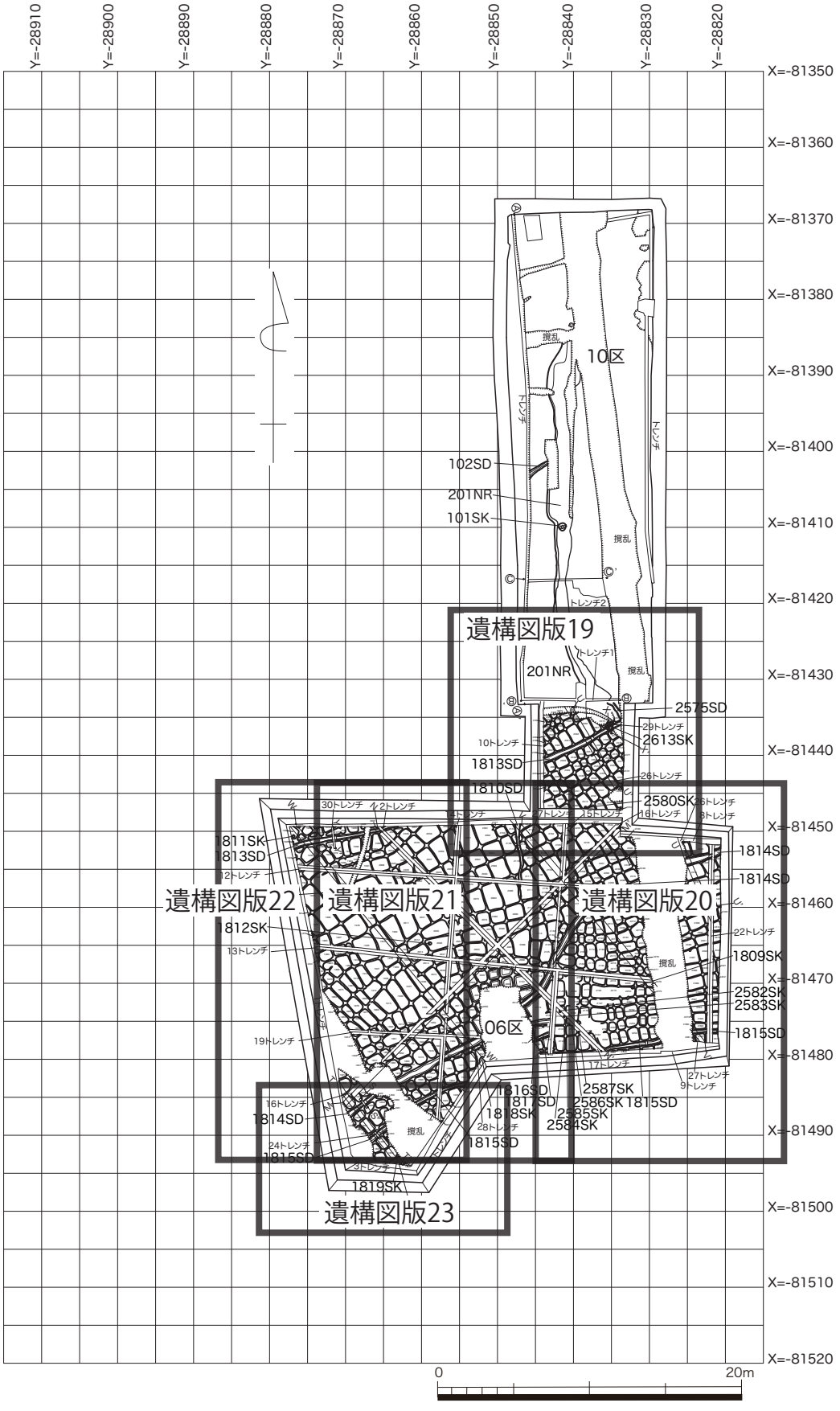


06区2面・10区2面・99区下面遺構平面図1（1：200）

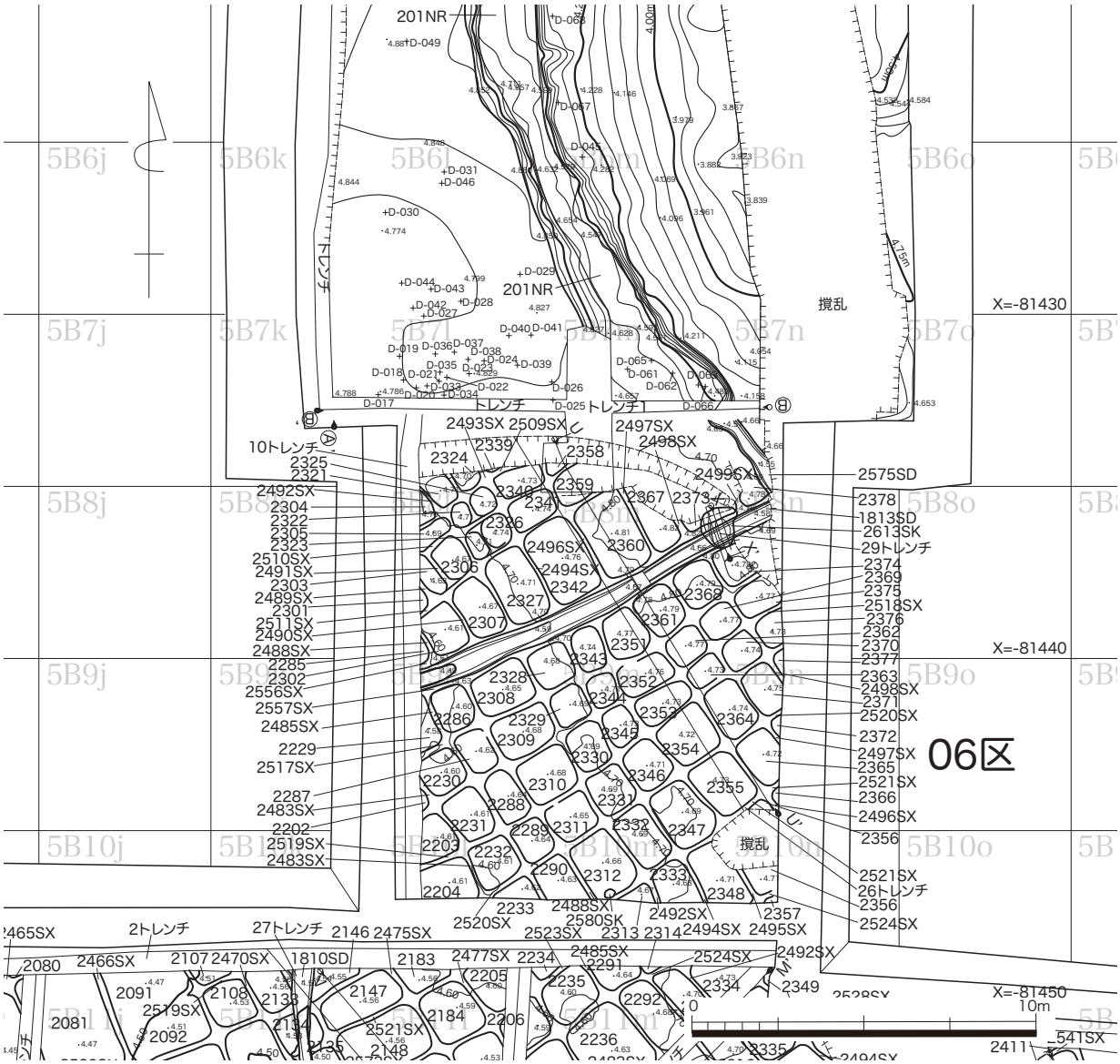


06区２面下層・10区２面・99区下面遺構平面図１（１：200）

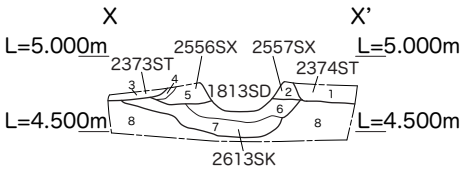
遺構図版 18



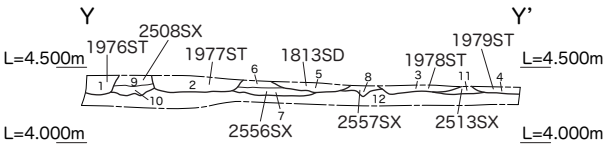
06 区 3 面・10 区 2 面遺構平面図、06 区 3 面・10 区 2 面 200 分の 1 遺構平面図図割り（1 ：800）



06区29トレンチ東壁



06区30トレンチ東壁



06区29トレンチ東壁土色

1, 10YR4/6褐色シルト
2, 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
3, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
4, 7.5YR4/4褐色細粒砂
5, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
6, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
7, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂

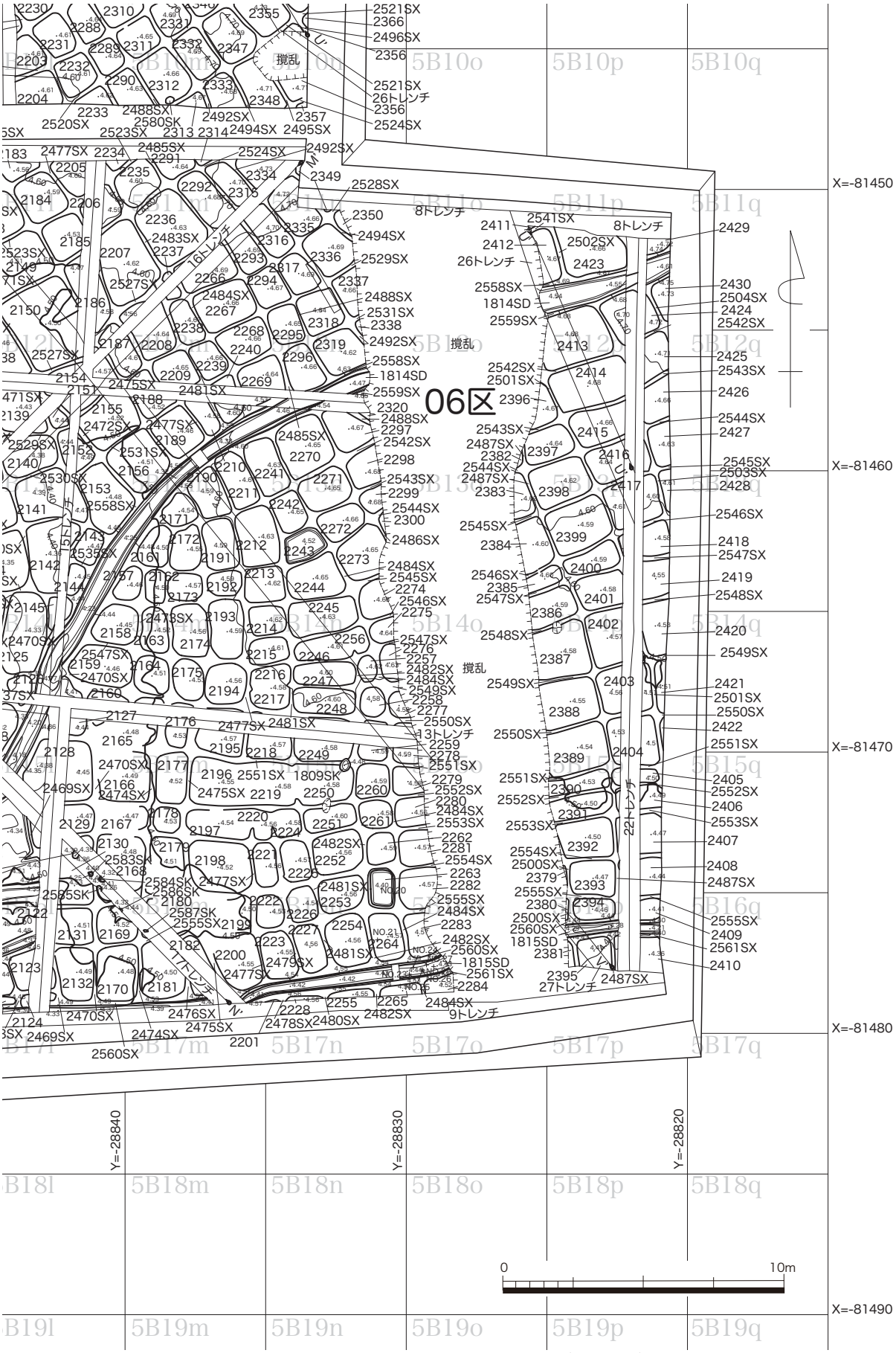
0 2m

06区30トレンチ東壁土色

1, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
2, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
3, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
4, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
5, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
6, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
7, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
9, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
10, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
11, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
12, 5Y6/2灰黄色細粒砂

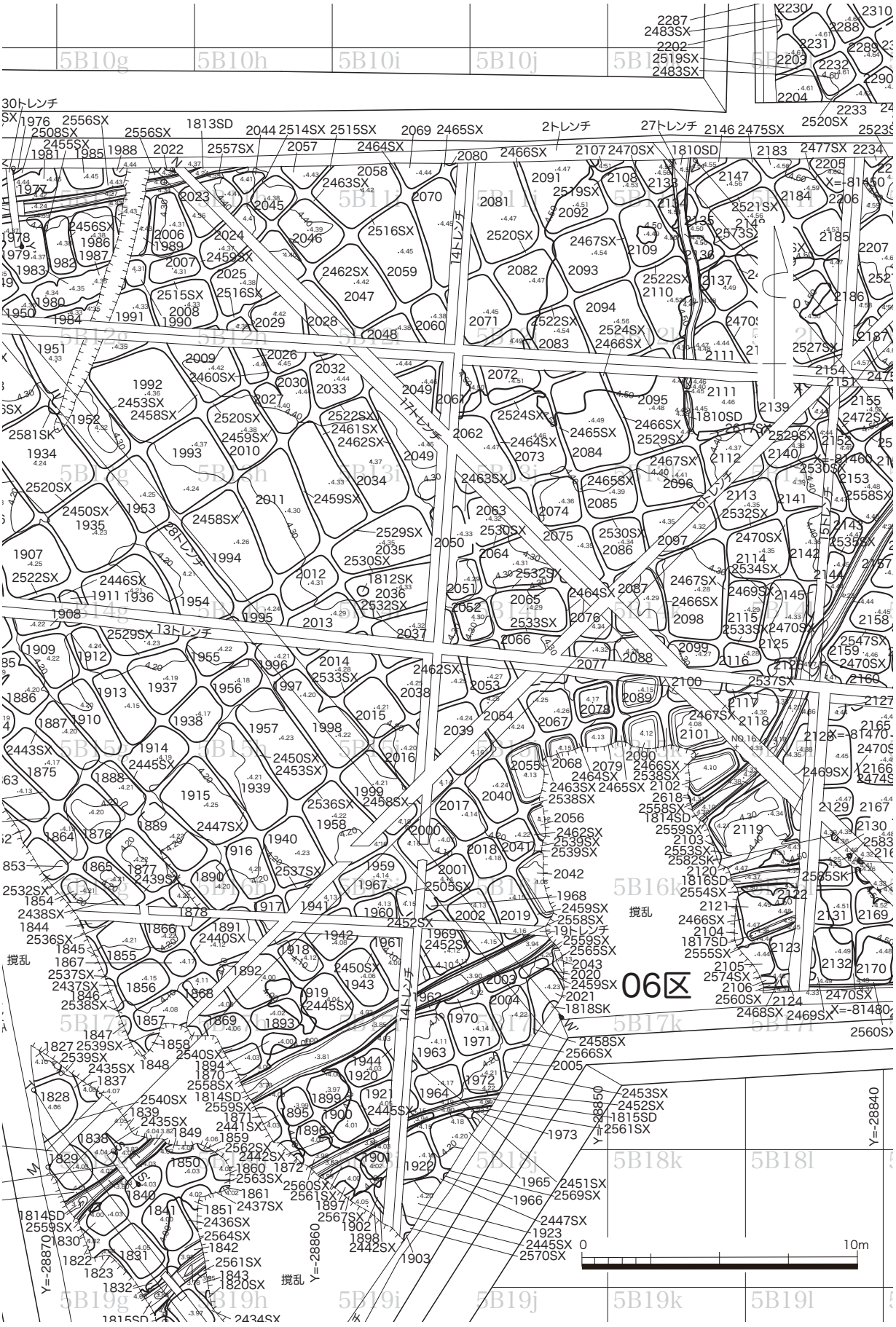
06 区 3 面・10 区 2 面遺構平面図 1（1：200）、29 トレンチ東壁・30 トレンチ東壁（1：50）

遺構図版 20



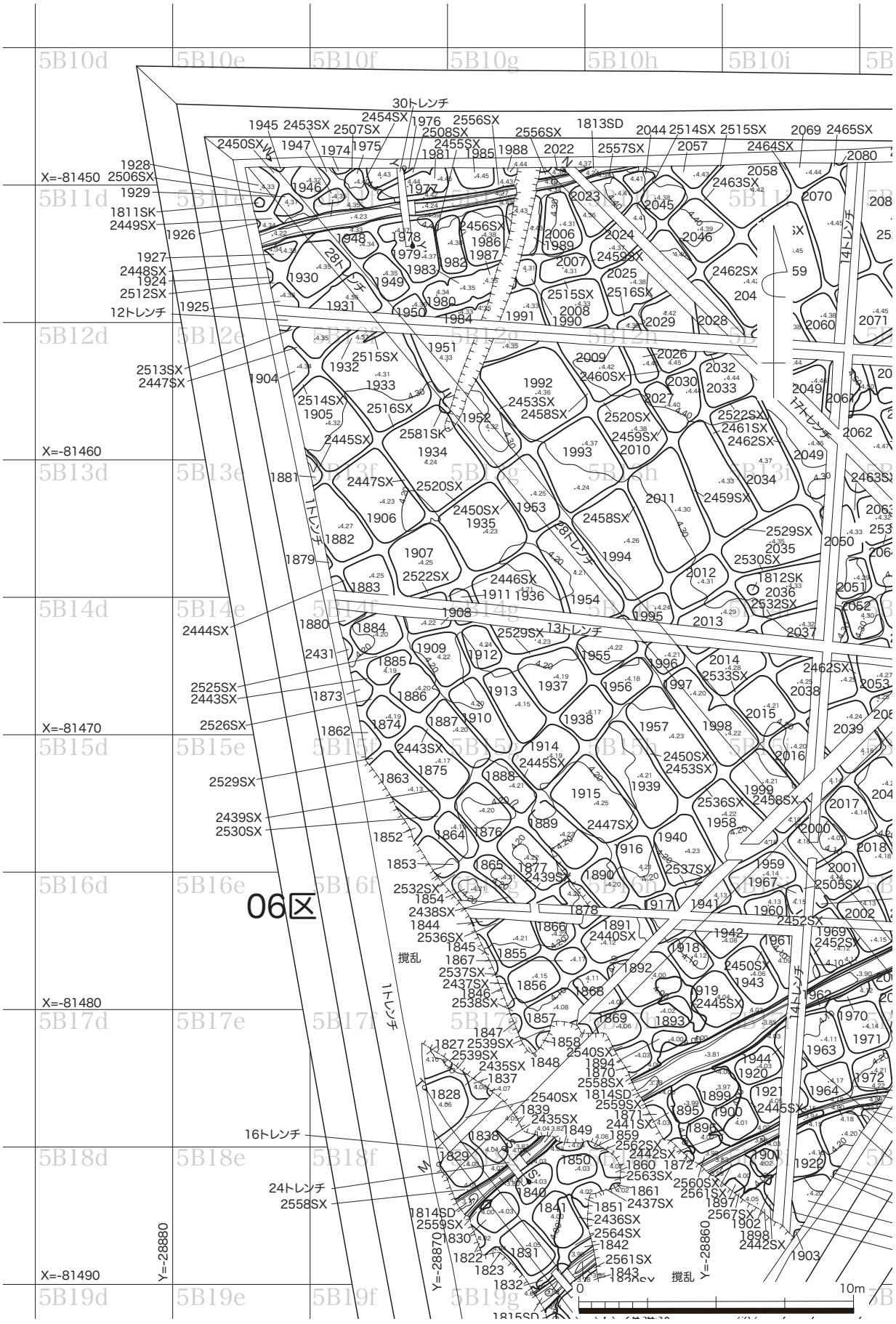
06 区 3 面・10 区 2 面遺構平面図 2（1：200）

遺構図版 21



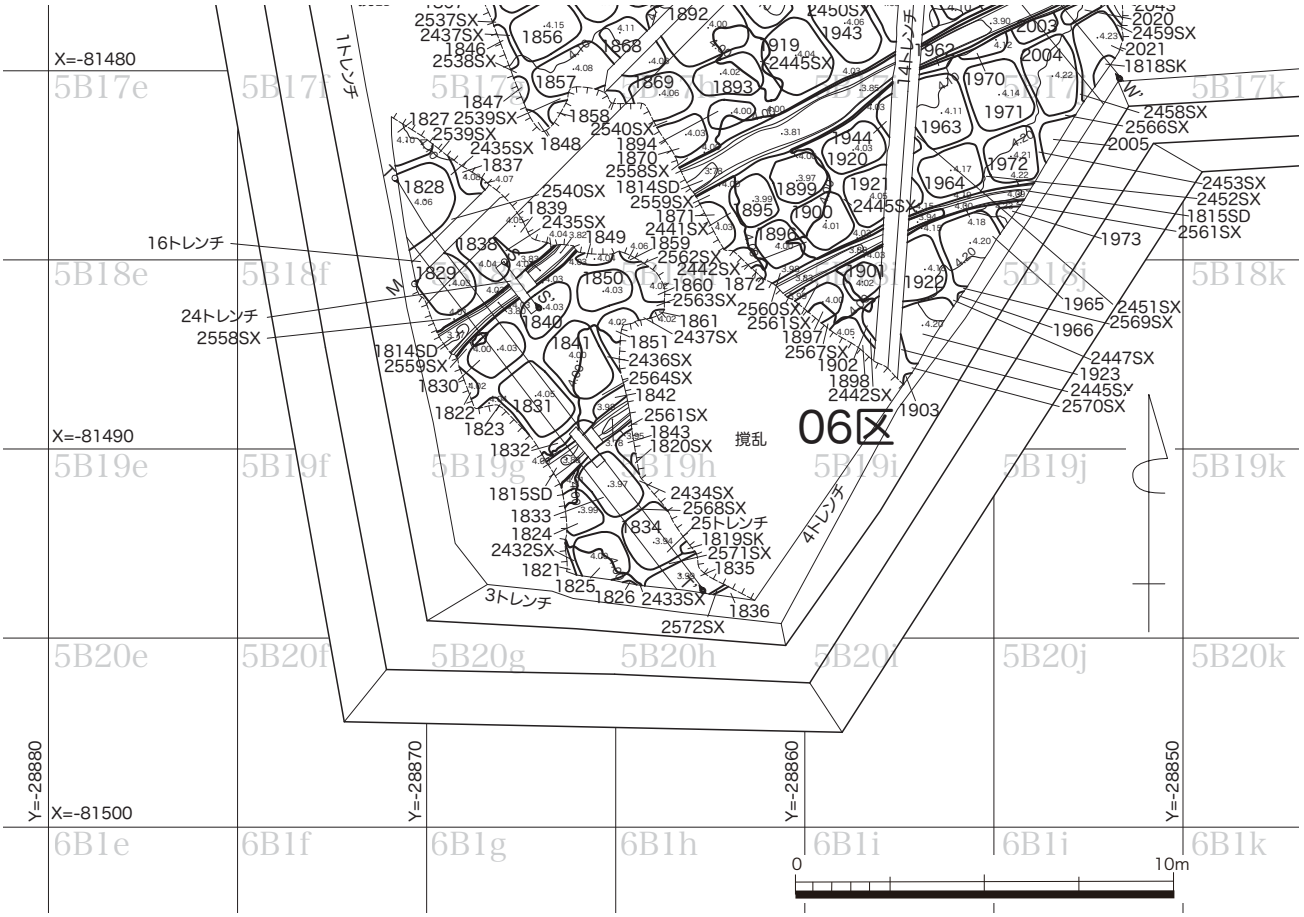
06区3面・10区2面遺構平面図3（1：200）

遺構図版 22

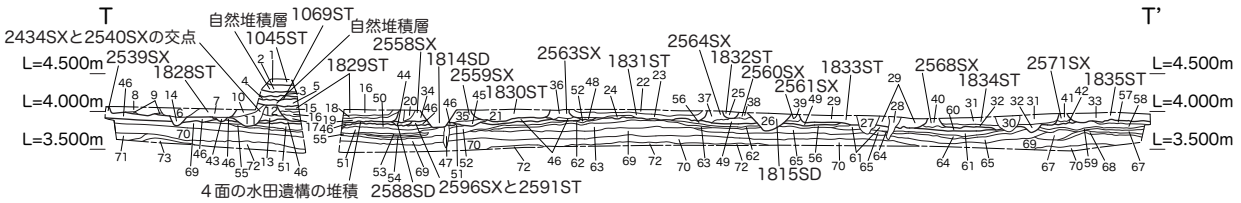


06 区 3 面・10 区 2 面遺構平面図 4（1：200）

遺構図版 23



06区25トレンチ西壁

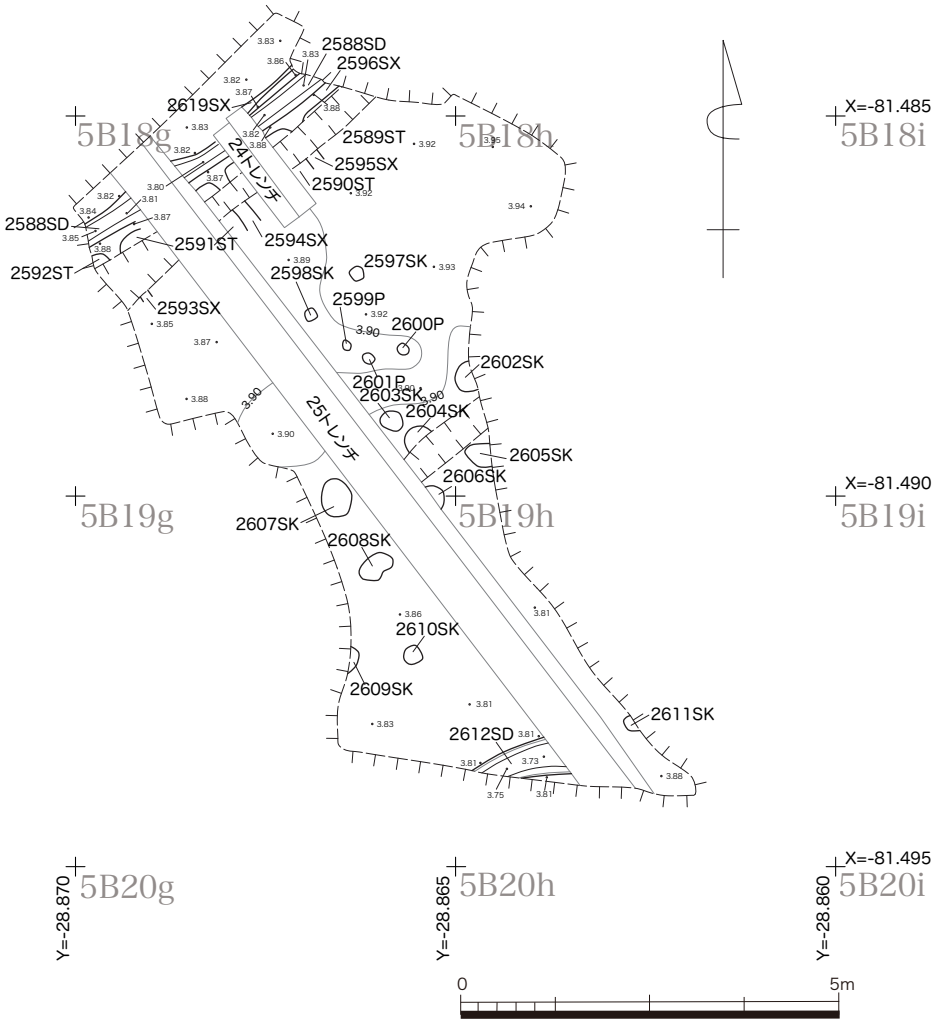


06区25トレンチ西壁土色

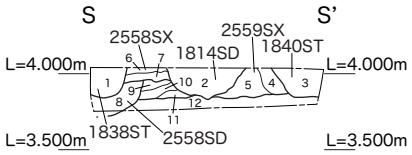
1, 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
2, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
3, 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
4, 10YR5/2灰黄褐色シルト(鉄斑が顕著な部分)
5, 10YR5/2灰黄褐色シルト(やや細粒砂混じる)
6, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
7, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
9, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
10, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
11, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
12, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
13, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
14, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
15, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
16, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
17, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
18, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
19, 10YR3/1黒褐色細粒砂
20, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
21, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
22, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
23, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
24, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
25, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
26, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
27, 10YR4/1褐灰色細粒砂
28, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
29, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
30, 10YR4/1褐灰色細粒砂
31, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
32, 10YR4/1褐灰色細粒砂(やや砂っぽい)
33, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
34, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
35, 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
36, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
37, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
38, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
39, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
40, 10YR5/1褐灰色細粒砂
41, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
42, 2.5Y4/1黄灰色細粒砂(やや砂っぽい)
43, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
44, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂(やや砂っぽい)
45, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂(やや砂っぽい)
46, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
47, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
48, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
49, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
50, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
51, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
52, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
53, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
54, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
55, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
56, 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂
57, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
58, 2.5Y5/1黄灰色細粒砂
59, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
60, 2.5Y5/1黄灰色細粒砂
61, 2.5Y7/1灰白色細粒砂
62, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
63, 2.5Y7/1灰白色細粒砂
64, 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
65, 2.5Y7/1灰白色粗粒砂
66, 2.5Y6/2灰黄色細粒砂
67, 5Y6/2灰オリーブ色細粒砂
68, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
69, 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
70, 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
71, 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
72, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
73, 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂

06 区 3 面・10 区 2 面遺構平面図 5（1：200）、25 トレンチ西壁（1：100）

遺構図版 24



06区24トレンチ東壁



06区24トレンチ東壁土色

1, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
2, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
3, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
4, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
5, 10YR4/2灰黄褐色細粒砂
6, 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
7, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
8, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
9, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂(ややシルト混じる)
10, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
11, 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
12, 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂

0 2m

06 区 4 面遺構平面図（1：100）、24 トレンチ東壁（1：50）

写真図版 1



伝法寺野田遺跡（06 区 1 面）と五条川（北東より）



06 区　1 面全景（南西より）

写真図版 2



06 区　1 面全景（北東より）



06 区　1 面中央部（東より）



06 区　1 面中央部（西より）



06 区　1 面東側上層（北より）



06 区　1 面東側下層（南より）

写真図版 3



06 区　1 面 1052SX（南より）



06 区　1 面北西部の溝と土坑（西より）



06 区　1 面 1004SD・1010SK（西より）



06 区　1 面 1006SK（南より）



06 区　1 面 1015SK（南より）

写真図版４



06 区　２面全景（南西より）

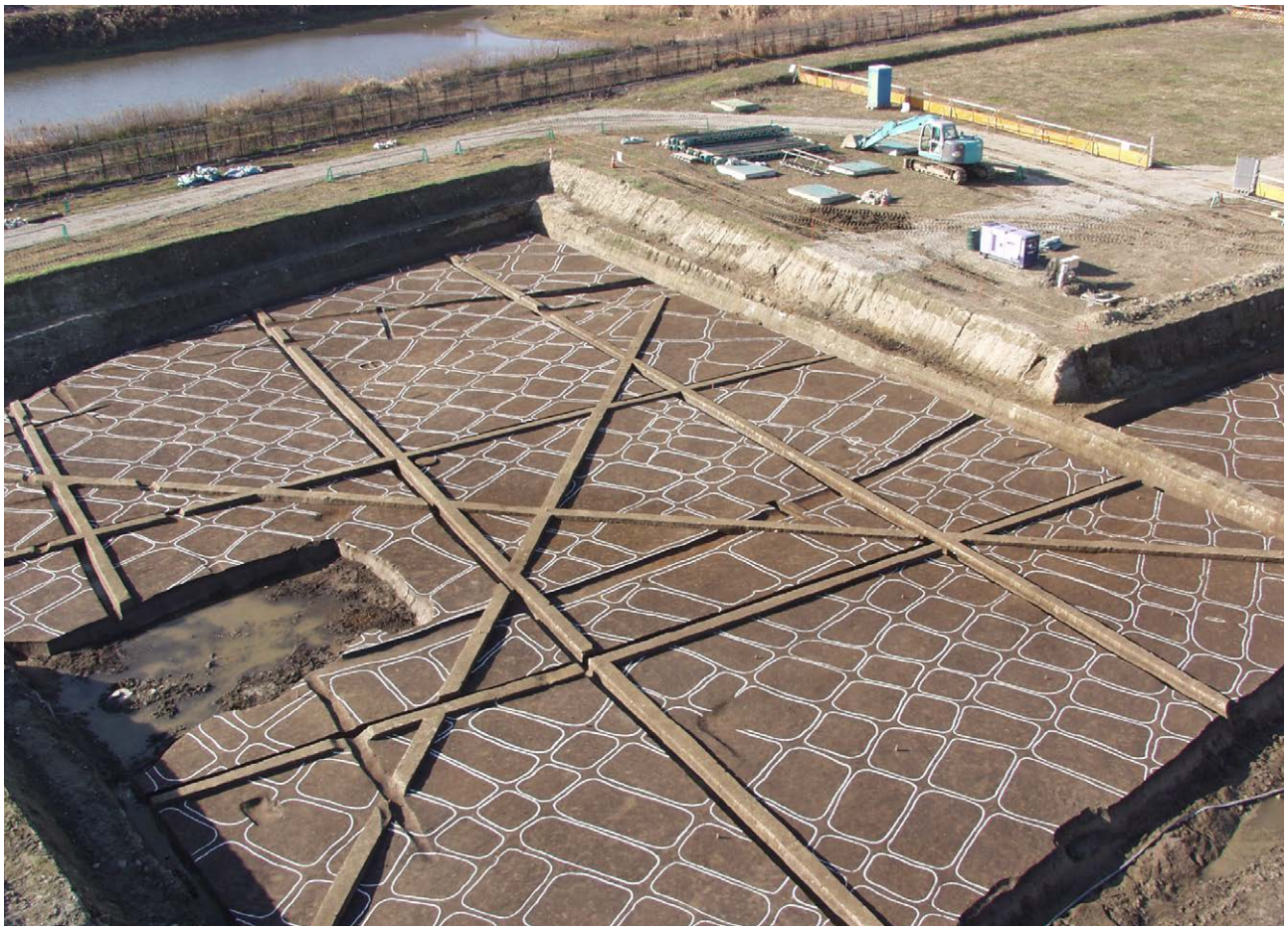


06 区　２面全景（北東より）

写真図版 5



06 区　2 面全景（北より）



06 区　2 面全景（南東より）

写真図版 6



06 区　2 面打製石鏃出土状況（東より）



06 区　2 面 1062SD 土層断面（南より）



06 区　2 面 1062SD（南より）



06 区　北側 2 面下部分全景（北西より）

写真図版 7



06 区　3 面全景（南西より、写真奥の 06 区北側は 2 面下部分）



06 区　3 面全景（北東より、写真手前の 06 区北側は 2 面下部分）

写真図版 8



06 区　3 面北側（北より）



06 区　3 面 1813SD 南西側（南西より）



06 区　3 面 1813SD 北側（南西より）



06 区　3 面 1814SD（西より）



06 区　3 面 2613SK（北西より）

写真図版 9



06 区　4 面全景（北西より）



06 区　4 面全景（南東より）

写真図版 10


10 区　1 面遠景（南東より）


10 区　1 面全景（西より）


10 区　1 面 007SD と水田遺構（南より）


10 区　2 面全景（北より）


10 区　1 面 005SD（西より）


10 区　1 面 005SD 遺物出土状況（東より）


10 区　3 面 201NR（南東より）


10 区　3 面 201NR（南より）

写真図版 11


E007


E008


E012


E019


E020


E021


E023


E025


E028


E041


E043


E045


E046


E049


E051


E052


E053


E054

写真図版 12


E055


E056


E059


E061


E063


E064


E082


E083


E086


E095


E120


ガラス継ぎ部分↑
E120


E121


S001


S002


S003


S004


S005

写真図版 13


S006
S007
S008


M003
M004
M005


M006
M007


E014
E015
E013
E027
E036
E076
E114
E097

加工円板

写真図版 14



W001



W002



W003



W004



弥生時代中期中葉後半の弥生土器と打製石鏃

報告書抄録

ふりがな	でんぽうじのだいせき
書　　名	伝法寺野田遺跡　II
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第203集
編著者名	蔭山誠一、鬼頭剛、永草康次
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2016年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
でんぽうじのだ 伝法寺野田 いせき 遺跡	あいちけん いちのみやし 愛知県一宮市 たんようちょうでんぽうじ 丹陽町伝法寺	2302	020103	35度 15分 46秒	136度 50分 39秒	2006.11.1～ 2007.3.30 2010.10.1～ 2010.12.28	3,800㎡	五条川右岸流域下水道事業・五条川右岸流域下水道事業焼却施設建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伝法寺野田遺跡	水田・集落	弥生時代前期～江戸時代後期	水田遺構・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・灰釉系陶器施釉陶器・打製石鏃・磨石・鉄製釘・鉄製把手・木杭	

文書番号	発掘届出(18埋セ第50号・2006.10.3)　通知(18教生第1713号・2006.10.30) 終了届・発見届・保管証(18埋セ第115号・2007.3.30) 鑑定結果通知(19教生第903号・2007.7.13) 発掘届出(22埋セ第138号・2010.8.24)　通知(22教生第1236号・2010.9.7) 終了届・発見届・保管証(22埋セ第196号・2010.12.9) 鑑定結果通知(22教生第2473号・2011.2.17)
要約	弥生時代前期～弥生時代中期中葉後半と弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期前半の小区画型水田遺構、奈良時代～鎌倉時代の条里型水田遺構、中世後半～近代の水田遺構・溝・土坑が確認できた。愛知県の水田遺構の変遷を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第203集

伝法寺野田遺跡 II

2016年３月31日

発行　公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　サンメッセ株式会社